

- 長澤七郎親清 判
- 形原左近將監貞光 判
- 牧内右京進忠高 判
- 竹谷彌七郎秀信 判
- 岡崎六郎公親 判
- 細川次郎親世 判
- 岩津源三算則 判

かく十六人の輩にも連判せしめらる是等信光親忠兩君の御時より御縁者となり御旗下に属し毎度軍忠を勵ける此外にも高山三郎左衛門忠正遠山左衛門尉景前等の國人皆歸順して追々御旗下に多くあれり其頃駿遠兩國の領主今川修理大夫氏親の駿遠のさらあり三州も大畧伐從へ國人ども若干属しける所近來西三河の輩も多く徳川家の武威に恐れ今川家を背き徳川家に歸降する者少うらすこゝに西三河に大久保左衛門五郎忠茂といふものあり其先祖の(大久保)山緒俗傳大に説る今の家譜にて改む)法興院兼家公の二子栗田關白道兼公より五

代下野國の住人宇津宮左衛門尉朝綱か八代左近將監泰藤と云泰藤新田義貞朝臣に属し後醍醐天皇の官軍に参りける然るに義貞朝臣討死ありしかの泰藤越前の國を落て三河の國よ來り宇津入道通常とすける(波合配に朝綱か子左衛門尉といひし者波合危難を遁れ尹良親王の若宮を供奉し三河の國に落たり其時世良田政義の討死し宮の尾張の國津島へ逃まします宇津宮の三河に残り住む其住し地を大久保といひしかの家號とするよし見へたり新説ゆづらしくきこへき)通常の八代の孫此左衛門五郎忠茂と忠茂か子を五郎右衛門忠俊後に新八郎又入道して常源といふ其子五郎右衛門忠勝(今大久保新八郎か祖)忠俊か弟の甚四郎忠員其長子の七郎右衛門忠世(今大久保加賀守か祖)三男治右衛門忠佐三男大八郎忠包五男新藏忠寄六男勘七郎忠核七男權右衛門忠爲八男甚右衛門忠長九男平助忠教(後彦左衛門)此一族御當家に仕代り功臣たりかく國人等追うに徳川家より歸降すれり東三河の國人等もや、今川か旗下をはされ徳川家に参る者多しかくて、近年の内東三河もみな徳川家に從服するあらんと駿州にての風説專之今川氏親是を聞て大に驚き兩葉の時代取らされり斧柯の用ゆる恐れあり早く誅伐すへしとて相州小田原の城主北條新九郎長氏入道早雲(本氏伊勢)を大將に



て二万余兵をむかひしむ早雲の其子新三郎氏綱に小田原城を守らせ其身の永正三年丙寅の八月廿日駿河遠江三河三國の勢を揃へて西三河の吉田に着陣す(年月の大成記に従へり)先三河二連木牛窪伊奈西郡の勢を以て岡崎城を押へしめ寄手數千騎の大平川を馳渡し會志原に掛のほり青山を打過て井田郷をあへ大樹寺を本陣とし魁の兵を以て岩津城をそ攻たりける此城にの長親君の御兄岩津太郎親長こもり城兵わづかに五百余人大將親長の弓矢取て剛將みれの其下知に應じ城兵等或の岩を切て落し或の鐵を揃て射出しよを専途と防戦し寄手七十余人忽に討死しかども今川方の大軍あれの流石防ぎ兼てろ見へにける此事安祥へ聞へければ長親君諸兵を呼給ひ眼前に兄の城を攻させ後詰せすといふ事やあるへきぞ敵の何万騎ありども夫にのよるへうらす運の天にあり死生命あり進め者どもとて御子二郎三郎信忠君と共に五百余人を一所に集め大桶の中へ酒をたへ其中へめり上りたる御盃の酒を志たみ給ひ思ひくく飲しめて安祥の城を打立せ給ふ是を聞て馳加のる御一族の御兄大給松平源次郎乘元松平玄養助親房同刑部丞親光安祥左馬助長家松平助十郎張忠胤松平加賀右衛門乘清并親光の長子兵庫助親良其弟三郎信乘御伯父竹谷松平左京亮守家形原松平佐渡守

與副岡崎松平大膳亮光重松平八郎右衛門光英松平彌三郎元芳能見松平次郎右衛門光親松平美作守家勝松平修理進親正并彌三郎元芳子御油松平彌九郎元心其弟深澤松平大炊介忠景御家人よの本多八郎正時同平八郎助豐柳原七郎右衛門清長其子孫十郎長政菅沼新三郎定直石川修理亮康長同左兵衛尉親長并修理亮康長同左衛門尉親康并修理亮康長子四郎康繁大久保左衛門五郎忠茂其子五郎右衛門忠俊林藤助其外の國人の岡崎左近助親貞同六郎公親形原左近將監貞光竹谷彌七郎秀信上野左衛門太夫親堅牧内右京進忠高細川二郎親世長澤七郎親清岩津源五光則同大膳入道常道同彌九郎長勝同彌四郎信守同八郎五郎親勝同源三算則高山三郎左衛門忠正(一説鳥山とあり)遠山左衛門尉景前はしめ七百三十余騎馳加のる彼是都合千三十余騎馬に鞭打て桑子筒針矢矧川の上川崎よりあしあひる北條早雲入道是を見てすはや安祥より長親が後詰に出たるそ人數を二手に押分て一手の城を賣一手の後詰を防げと下知すれの東三河牛窪二連木西郡築手田峯長篠野田西郷吉田伊奈の國人を始として備を直して討てかゝる長親君のいかにも靜にかゝらせ給ふ先陣酒井氏忠入道弟與四郎親重并本多大久保保原物馴たる輩鯨波を作り金鼓を鳴らし進み戦ふ今川勢の盛にかゝり散々に打散ら



さんとす其時竹谷深澤御油片原大給能見の御一族横合より打てかゝれ今川勢破れて早雲か旗本へ足を亂して崩れかゝれ早雲大に怒り新し手を入かへて戦んと馬乘廻し下知すれども大軍破れかゝりたる習ひにて下知をも更に聞かれ右往左往に逃しかり早雲も引立られ心ならず敗軍して青山迄引退たり又城に向ひと寄手も堪兼て城を卷同しく思ひくゝに逃けるを安祥勢の追討し討取首級三百六十二級矢矧川の西涯に掉詰渡し掛たりけり此時田原の戸田はや今川勢をそむき長親君へ降参せんとするよと聞て早雲我の西郡の城修築せんといひすて吉田へ引取しと

三葵御紋御治定并酒井家酸醬紋 戸田宗光歸順の事

かゝりしかり其翌朝長親君の酒井兄弟を御前に召し昨日兄弟先手も働き尤絶倫といふへし抑汝等か用る葵の紋の旗の去る文明十一年七月十五日信光君より汝家に賜はる所あるか汝兄弟毎度其紋の旗を先立て敵陣を破る故世上皆其武勇を見知りたり其紋を我に得させよ當家の吉例として永く子孫に傳ふべく思ふ之我此紋を所望する事他よわらず汝兄弟の武勇を本とす我子孫にわやからせん事を希なり其形よく似たれ汝等の酸醬を紋にすへしと

酸醬の葉を取りて給はりぬ酒井兄弟而目有て忝あしと謝しにける是よりして御當家にて三葵を御紋とされ酒井か家への酸醬を以て紋とせしと

按ずるに葵御紋の事本文に記せるの世に久しく傳ふる説あり又伊奈の本多か傳に清康君田原の城賣給ふとて御出馬ありしとき本多總殿助正忠伊奈の城へ迎へ奉り御酒進らす其時水葵の葉に肴を盛て奉る清康君御悦有て葵の汝か紋なり我給はらんと宣ひ是より御紋も定ると見へたり又本多中務大輔より獻せしといふ説々多くして一定せず又上野國新田庄に傳へたる右の目貫小刀の柄等に葵の紋の丸ある物多し是によれば新田流代々の御紋ならんといふ説もあり其の實ハ八幡殿流にて義國義重主以來御代々の御紋なり他家より獻せしにのわらず其事の別に記し置ぬ事長けれのこゝに記さ

爰に三州田原の城主戸田彈正左衛門尉宗光の彈正少弼憲光が父之宗光此年頃今川家の旗下なりしう今度今川方をはなれ長親君に降参するとき東三河今川與力の國人とも大略長親君に降参する由なれの北條早雲もかくての合戦彌利あるべうらすと吉田城より直に駿州へ



軍を歸しけり長親君に今度の合戦に打勝給ひ武威彌國中に輝きけるういかに世の中を  
 思ひ取り給ひとにや御壯年にて御隠居の思召立あり御長男信忠君に御家督を譲らせられ  
 福釜東端兩城を御二男右京亮親盛にゆづらる櫻井上野の兩城を御三男内膳正信定にゆ  
 つり給ひ青柳(大久保物語に青野に作る)の城東條の郷を御四男甚太郎義春にさつけられ藤  
 井の郷を御五男彦四郎利長よさつけ給ひ御身の早く落飾じて掉舟車道閑と號し是より世塵  
 をさけ風月を友とし閑逸を樂じみ給ひけるう善長くして御曾孫廣忠君の御時迄なりら給  
 ひ天文十三年甲辰八月廿一日終をどらせ給ふ大樹寺に葬りて御法名をも掉舟院殿一閑道閑  
 大居士とすける

信忠君御家督付石川忠輔元服并大濱御隠居の事

二郎三郎信忠君の長親入道道閑君の御長子始め竹千代又藏人とも右京とも許けり御子三人  
 おりしませす御嫡子の二郎三郎清康君御二男の藏人信孝御三男の十郎三郎康孝とすける此  
 頃石川左兵衛尉親康の子を元服せしめられ御名の一字賜り傳太郎忠輔と名のらしめらる  
 後に左近大夫と稱しけるは是之其父親康を親忠君御前にて元服せしめ御一字賜りし先蹤と

を聞へける扱も信忠君御幼稚より御才氣勝れまじくければ御家督と定められけるか漸く  
 御成人にて御代嗣を給ふ頃より次第に御心荒くしく成らせ給ひ召遣はる内外の人をも御  
 情をかけ給ふ事もなく國民悉く恨み背く御政事成りて故に御一族も御縁者もやうやくう  
 とみはてたる輩も多く成行によりまじて御父入道殿の時降参じたる尾州駿州與力の國人等  
 の皆本主の方へ歸りける依て今のた安祥一城のみろかへ給ふ(原書に安祥左馬助長  
 家此時織田家へ降参しけれ岡崎一城のみ残ると記す大久保か物語に安祥計り領し給ふ  
 と記す後に昌安入道岡崎を領する事われの大久保か記をよとす)信忠君のかくても心付  
 せ給はず日夜酒宴遊興にのみ耽り老臣共の諫言も聊か用ひ給はず佐者を親じみ忠臣を疎み  
 賞罰更に定まりなく軍國の大事の怠りはて給へば御一族御譜代の輩も心區々に成りて或は  
 櫻井の信定或は福釜の親盛或は東條の義春或は藤井の利長を主君に取立んと各最負荷擔  
 んより評議さまくわれどもいまた一決せず信忠君かくと聞召大よ怒り給ひ其首謀の徒  
 を手討にし給へは是を感する者も有り又怒る者も有兎角衆人思ひ付さる様を御覽じ(大久  
 保物語記年録)大永三年癸未わつかに十三歳にならせ給ふ清康君を御家督にさされ御二



男藏人信孝に三木城の郷を譲り給ひ御三男十郎三郎康孝に水城(一本見次)の郷をゆつり給ひ御身の三州大濱の郷に御隠退ありて是より春雲と號し給ひ享祿四年辛卯七月廿七日四十二歳にて逝去し給ひしかの(大樹寺に葬り安栖院殿奉孝道忠大居士と贈りまいらせらる

清康君御家督付攻三岡崎山中兩城并昌安入道息女御婚姻の事

三郎三郎清康君の藏人信忠君の御長子に永正八年辛未九月七日御誕生ありて大永三年癸未四月四日十三歳にて御家督を嗣せ給へり此君御武勇并御慈愛も兼備ありて並ぶ方なくまじくければ是ころ後に天下に旗を揚げ給ふへければ御内外様の衆頼母しく思ひ慕ひ奉る事大方あらす安祥の城にまじくけるに信忠君の御代離散せし者共も其御武徳を慕ひ歸參する者多かりける爰に三州岡崎山中兩城に松平彈正左衛門尉信貞入道昌安(西郷彈正左衛門頼副の子之信光君御五男松平紀伊守光重が子左馬助親貞の譲りを受け岡崎城主と成り松平と稱し壽叟昌安と號す) 信忠君の御時よりそむき奉り清康君の御代と成りて召すといへども參らす清康君安からぬとに思召岡崎山中兩城を攻取へしとて大永四年御みつから軍勢を催し給ふ此時御歳十四にならせ給ひしか御丈高さ五尺八寸力量勝れて尋常廿四五

歳ども見へ給ふ御志大勇ある事老功の宿將も及びかたし(大久保か物語よの御せいのひくとして御腹の内恐るる小麻より猶見事にして御姿並ふ人なし) 此時老功の大久保左衛門五郎忠茂入道源秀(原書に大久保五郎左衛門忠勝とす大久保か物語よの左衛門五郎忠茂と有後國中舛の事願ひし詞によれば忠茂ある事疑ひなし系圖に忠茂の天文十六年二月四日卒すとあれば此時の存命之) 諫ける凡良將の謀を以て味方の兵を損せずして敵を挫を以て上策とす今彼城を攻んに力を以てせんとせば味方も若干損すし謀を以てせば月日を経ずして城を乗取へし只某に御任せ有へしとす清康君も尤と諾し給へば忽ち忠茂に忠茂入道謀を廻らし大永四年五月廿八日夜に究竟の忍ひの兵數十人を山中城へひをか忍ひ込ませ又壯勇の軍士若干城外に隠し伏しむ折節風雨篠をつくかとも物音更に聞へず暗さの暗し城中にの偷人の入たる事の夢にも知らず今夜城を攻る者有へしとも思はぬ所に偷人とも先所よの番人共を一に討殺し聞の聲をあく城外の伏兵とも同じく聞を請取て鼓具を鳴らし攻められぬ城中にの夜懸りに敵の音來りしそ出向て防げと音素肌にて馳り出防んとする所に城中にも敵有と覺へて聞を作り爰かしこに切てまいる是の回忠の者の



りを見つたり由断して討るゝなどいふ程こそあれ上下大に騒動し同士討する事や久し其  
 ひまに寄手の城戸を破り昇乗越て城中に入しかの防くへき様もなく命計りを助り赤裸に  
 て落行けれの城の忽に落たりけり討取首級七十三級深手負て倒れ臥し首取らるゝ者十六  
 人味方大に勝利して凱歌を執行への清康君御悦斜さすいさや此勢に乗じ直に岡崎城を  
 も乗取べしと仰有れり皆此儀然るへしと御請し翌十六日岡崎へ押寄て短兵急に攻かゝる昌  
 安入道自身打て出て命を限りに防ぎしめども敵の氣に乗り大勢あり城兵の大零山中よりの  
 落武者なれの臆病神の醒やらすはりくじき防取らぬす昌安入道も詮方なく降参す岡  
 崎城邊大林寺良倪上人此和睦を扱ふよし其寺に傳ふ(扱昌安の息女清康君に参らせ御聲君  
 ぞし岡崎城を讓参らすかくて後の西三河大零のふたゝひ徳川家の御旗下に属しけり  
 接るに大久保久記に山中落城の全く大久保忠茂が大功されり其褒美を望べしと仰有け  
 るに君いままた御領國も廣うらされは采邑を望へきにあらす其上子供三人迄所領賜り  
 恩澤に浴する上の老身の何の願かひへき但し御領内の市の外を司とらしめ給ひ外取を  
 中付置いり我り老後の活計十分たるへしと願ひけれり其請所を免許せられしと見へ

たり

清康君北の方の事

清康君に昌安入道り息女を迎へ給ひ北方どかしつぎ給への僧老の契り後からぬ御中らひ  
 にて琴怨の和らき調りせ給りん事御一門御家人一統悦いへし所此北方嫉妬の御心深くま  
 しくある宮仕の女房をいつしか清康君御寵ありしよし小侍従といへる小女北方へ告ま  
 らせけれり北方大に怒らせ給ひその女房を擲置て其肌に燒鉄をあてゝ責殺されける是を聞  
 人皆爪弾して恐れける清康君も此事を聞召より御中疎くしくあらせ給ひ終は御離別に  
 及ひけりされとも北方の貞操ましく忽に黒髪をはらひせ給ひ染衣の姿になり立能と名  
 付給ひ生涯を送らせ給ひけるり天文十七戊申二月十六日逝去ありて花岳院香月清春大姉  
 ぞて大林寺に納め奉りしころ哀なれ清康君の其後江州の住人青木筑後守貞景か女を北方  
 どなされ大永六年丙戌四月廿九日此御腹に若君を設給ふ贈大納言廣忠卿是之北方の若君を  
 産せ給ふ後御あやみ重く終はかくれさせ給ひしかの其頃三州刈屋城主水野右衛門太夫忠政  
 の妻の離別して寡住してありしをむかへさせ給ふ是の三州額田の住人大河内左衛門尉元綱



か女ありしか尾州宮の城主岡本善七郎秀成にぞかりむかへ取らせ給ひけり此北方の容顔衆  
にこへてめてにうつくしくわたらせ給ひしか御年の程の清康君よりはるかにまさり給ひし  
とぞ(諸書に此北方の水野忠政が卒後にむかへ給ふよし見ゆ然れども清康君逝去の天文四  
年十二月四日なり忠政が死の天文十二年七月十二日されは清康君より九年後に死せしこ  
玉興志よ忠政が離別の婦と有を以て實を得たりとぞ)

吉田川合戦牧野兄弟討死付西三河國士降参の事

清康君に岡崎山中兩城を攻抜給ひ武威大に盛になり給へは享祿二年己丑五月牧野傳  
藏信成が吉田の城を攻へしと軍勢催促し給ひ同廿七日岡崎を御出馬ありて赤坂に陣を取給  
ふ(原書天文元年四月とす今大成記家忠日記に據る)東三河吉田城に傳藏信成是を闕弟傳  
藏高并新藏其外家の子郎等を喚て軍議をこらす信成がやの夫三河國のさせる大國にもあ  
らす其中又東三河の今川織田兩家に屬す僅に残る西三河を傳藏と清康と兩人して争ひん事  
心外に思ひ内此方より勢を催し岡崎へ押寄んととくより思慮をめぐらせども余りに小勢  
故兎角時日に移す所に清康居城を離ればるく是迄押寄ること幸なれ籠城して防戦せし

勝利あるへしと思へどもつらく按るに寄せらるゝたに云甲斐あき籠城し若も居負する  
ならの自國他國の物笑ひ屍の上の恥辱あり小勢ありとも馳向ひ途中に於て唯雄を一戦の鋒  
に決へしとわれの第三人其外家子郎等も皆尤と同心し軍勢を召集めけり清康君の三千余  
騎を引率せられ五月廿八日(月日)大成記家忠日記に據る)赤坂を打出給ひ小坂井に旗を立  
られ先足輕を遣じ下地御油の在る所に放火せらる牧野兄弟討て期したる事をわれの狼煙を  
見ると其儘城に老人病者七十余人残り置壯士千余人を引具し吉田の城を出るより忽勝負  
を決せんと血氣にまかせ馳けるに折節梅雨降つゝきて吉田川一圓に水嵩まさり白波天に照  
り岸を浸し瀬の早き事矢を射るよりも速なれ騎馬も渡すへしと見へすまして歩卒の  
思ひ絶たるは傳藏のあのか領所されの船筏を用意し忽に打渡り向の岸より堤に登り寄來  
る徳川勢を見れば旗旗風よ翻り其勢三四千もあらんかど覺へ曳く盛して押來る傳藏始め  
牧野方に寄手思ひしよりも大勢されの案に相違し馬を扣て進み得ず傳藏弟新藏の是を見  
て兄に申けるの寄手の勢を見れば三千人への過へからず味方の勢心を一致にし必死と決せ  
んこそ簡要あれ韓信が背水の謀は此時にてはへしと船共悉く押流し生て再び歸るまじ



き心を味方に示す其跡先涼しく見えにける新藏此時十八歳皆人其志を感じける傳藏又  
 かけるの多からざる味方の勢を餘多に分てい悪かるへし先陣一手の五百餘人二陣の旗本傳  
 藏傳次新次新藏兄弟四人五百餘人必死を極めて進みけり清康君の御方の陣を四列に分らる  
 先陣の瀧脇の松平加賀右衛門乘清藤井の松平彦四郎利長を兩大將として七百餘人二陣の  
 清康君御旗本にて東條の松平右京亮義春其子甚太郎家春御家人に本多吉左衛門忠豊其子  
 平八郎忠高神原孫十郎長政石川左近太夫忠輔か子安藝守清兼石川四郎康重か子四郎左衛門  
 重康本多八郎正時か子小八郎正助以下千二百餘人後陣の三木の松平藏人信孝鶴殿の松平十  
 郎三郎康孝八百餘人一手の游軍にて大久保五郎右衛門忠俊其弟平右衛門忠員其子七郎右衛  
 門忠世弟治右衛門忠佐酒井氏忠入道か長子將監忠尙二男小次郎忠次(後左衛門尉)同與四郎  
 親重か子與四郎正親(後雅樂助)を始て三百餘人の横合を打へしと遙の脇に備たり又伊奈本  
 多藏殿助正忠も最初より御味方と參る(藩譜)敵合既に近くあれば先陣松平加賀右衛門松平  
 彦四郎兩軍勢旗の手をすゝめ下地の堤は押登り大鼓を鳴らし鬨を作り懸を並て掛りたりけ  
 り牧野の先陣鋒を交て志はし戦ふと見へしか如何したりけん本陣として破れ走る二陣に

有じか傳藏兄弟かくと見るより少しも疑義せず鋒を接へ逃る味方を妻手に見なし五百餘人  
 鋒を傾けまつしくらに突立れば加賀右衛門彦四郎八百餘人立足もさくかけ破られ御油の  
 方へ崩れ去る清康君御覽して敵勝に乗たり入替り戦へとて御自身馬をすゝめ給へは千二  
 百余の軍勢我とらしと討てかゝる牧野兄弟四人とも元來必死と覺悟せしかは大勢にかこ  
 まれなから少しも氣を屈せず懸通り懸戻り手にあまりて見ゆる所に大久保酒井か遊軍横合  
 より懸入ておし隔おしたて散々に攻めしかは牧野か軍勢悉く討取られ残る者皆逃走る傳  
 藏傳次新次新藏四人共かけ合せ一戦て一人も残らず討死す傳藏の首柴田中務これを  
 とり傳次が首の大岡忠右衛門取しとぞ敵皆敗死しければ清康君の吉田川の上の瀬を馳渡し  
 直に吉田の城を責かゝり給ふ本多總殿助正忠一番に城の東門を押破る(藩譜)城兵防くに及  
 はずして城を捨女童部の田原をさして逃走れり清康君の城に入給ひ一兩日人馬の息を休め  
 夫より直に田原の城におしよせらる城主戸田彈正左衛門宗光か子彈正少弼憲光の先に長親  
 君に降参しけるか信忠君の時再び背きて御旗下を離れたり然るに清康君の既に牧野兄弟を  
 討取吉田の城を攻落し其勢に乗じ田原城を攻めこみ給へり戸田の大に恐れ忽に降参し城



を渡し奉る本多總殿助の命の居城伊奈へ清康君を迎へ奉り御酒を進らせ賀しす(藩譜  
 に)此時に葵の紋の事を載たり)清康君の再度吉田の城に入せられ十余日御滞留の間近邊  
 の城々を攻從へ給ふ三州牛窪の牧野新次郎貞成設樂の設樂神三郎貞重西郷の西郷新太郎信  
 貞三連木の戸田丹波守宣光田峰野田の菅沼新八郎定則其外山家三方築手長間西郡の輩長親  
 君の時に降参し信忠君の時に至り背て今川又の織田方とありしも再度降参し吉田へ参り先  
 非を悔み罪を謝して拜謁すれり西三河悉く御手に屬す因てみかしの法を正し民を恵み  
 各其所の守將を定め歸らせ給ふ夫よりして諸國にも安祥の三郎殿とすて畏れけると  
 (大久保か記に吉田城責に内膳もよく働しとあり)

尾州岩崎野呂城責の事

清康君にの享餘二年の冬にいたり西三河勢七千余人を引率し給ひ尾州に御出馬ありて織田  
 弾正忠信定入道月岩か子備後守信秀か岩崎野呂の兩城を攻られんとす岩崎城に荒川新八  
 頼乘を守將にて三百余人籠る又野呂城より(大成記家忠日記大久保か記神野とす)坂井彦右  
 衛門秀忠守將にて二百五十余人立籠りたり清康君兼てより謀を廻らせ老練の倫人三十

余人を役夫にこしらへ岩崎に入居る此者共か手引して夜にまきれ味方百人計り城に入て丑  
 寅の刻に成り相圖を定め城下の寄手七千余人を二手に分て追手の四千五百人擲手の二千五  
 百人夜懸りして城を責る守將荒川新八も城兵を二手に分て大手擲手を防ぎしかども俄の事  
 なれば武具着する者の希なりけるかゝる折節城中の陣屋どもに火を放て百余人の軍兵ども  
 城兵の後より間を作り前後右左より攻しかり城兵遁るゝ道なく守將新八を始として二百余  
 人の皆殺され残る者共の深手負て散々に落行けれり此城に軍士をどめ守らしめ清康君  
 の直に野呂城に押寄て九日の朝より揉にもんで攻られけり守將坂井彦右衛門も城兵を下知  
 し随分と防ぎけれども寄手の大勢故に攻口一取を攻す堀を渡り柵を破り平押し攻入り流水  
 の漲るを手にて防に異あらず彦右衛門是を見て今かなぬ所へ打出て戦へとて百余人を  
 従へ突出て戦ひけるか悉く深手負しかり城中へ入て各切腹と殘る兵士等或は討れ或は  
 落失せ兩城容易に落しかり此所の守將として櫻井の松平内膳信定を入置る此時清康君の廿  
 歳の御時又小林勝之助重次野呂の先登し其賞として粟田口國吉の御持鎗を賜しか今に其  
 家に傳ふ(大成記)



宇理城軍松平右京亮親盛討死の事

享祿三年庚寅清康君の熊谷備中守直盛(大成記直則)が宇理の城を責られんとて軍勢發向し給ふ此熊谷の直實が未葉にて江州の住人成りしか武勇智謀人に知られし者之然るを織田信定入道月岩終に歸附させ近年織田家より隨順せしむと扱も清康君の七千餘兵を二手よわけ先大手の大將より御叔父福益の右京亮親盛并其弟内膳正信定軍勢二千餘人ツッ添られ御旗本にの三千餘人清康君御みつから引率し給ひ搦手の山上に押登り大手搦手間を作り大鼓を打て責かゝる中にも右京亮親盛一番に軍勢を屬まじ城近く攻寄たり城兵の鏃を揃へ散り射立ければも寄手の是を事ともせず死人を乗こへ塀を乗らんと争ふ熊谷備中守元來老練の剛兵時分よと城戸口蟻と押開き三百餘人の兵穂先を揃へて突出れば右京亮も鎗取て士卒をばけまじ奮戦す雙方の呼ぶ聲山谷を轟かじ松柏を震ひけり敵味方入亂れ突も有り突かるとも有り切つ切れつ逐つかへじつ火花を散じて戦ふ所に寄手の中に内膳正信定が手より裏崩じて逃じかの何かは知らず寄手の大勢崩れ立てそ逃たりける右京亮親盛大に怒り鞍遣に立あかり大言あけて下知しける甲斐さき味方のふるまひ敵敵の僅の小勢あるに逃るとい

ふ事やある親盛とに踏止り速に討死するそ我を見捨て歸りあひ人に面を向ふへきか耻を知り名ををしみ踏留て討死せよと怒り立て四方を白眼み牙を噛て散りに罵りければ破れ立たる軍の習ひ下知をの耳も入す右往左在も逃たりけり親盛始め其家人天野源兵衛忠俊大瀧源内宮村平八同平七鈴木主殿安藤助作近藤次右衛門以下十三人主人と共に奮戦し敵大勢討取同じ枕に討死す内膳正信定の兄か主従討死するを見て救へんとせず捨鞭打て逃去りぬ清康君の大手の寄手敗北するを搦手の山上より遙に見給ひ是れを救へんと御身をもこてあせり給つとも其間に嶮岨を隔て救ふべきよさく牙を噛て怒り給ふ身に取てり叔父の敵討頃の念願此城に有りよしと大手の敗北するとも搦手より無二無三に押寄せ乗取れどもみづから大鼓を打ならじ三千余騎を先に立て命を惜ます攻給ふ清康君の扇の御指物敵も是を見知りければ撰打に討取らんとすれども元來力量は抜群之打物の絶倫之近付者切倒されぬのなかり本多吉左衛門忠豊また猛勇無類の壯士主君を討せしと眞先に懸塞り懸る敵を伐て落す城兵其猛威に辟易して近く者の逃隠れ遠き者の近寄らず清康君其勇猛を感ぜられ後に扇の御指物を賜ふ是よりして本多が家寶とし代々扇の指物を用ひけるとそ大將手



宇理城軍松平右京亮親盛討死の事

享祿三年庚寅清康君の熊谷備中守直盛(大成記直則)が宇理の城を責られんとて軍勢發向し給ふ此熊谷の直實が末葉にて江州の住人成りしか武勇智謀人に知られし者之然るを織田信定入道月岩終に歸朋させ近年織田家は隨順せしとそ扱も清康君の七千餘兵を二手よわけ先大手の大將より御叔父福釜の右京亮親盛并其弟内膳正信定軍勢二千餘人ッ添られ御旗本に三千餘人清康君御みつかから引率し給ひ搦手の山上に押登り大手搦手間を作り大鼓を打て責かゝる中にも右京亮親盛一番に軍勢を勵まし城近く攻寄たり城兵の鏃を揃へ散り射立ければも寄手の是を事ともせず死人を乗こへ塀を乗らんと争ふ熊谷備中守元來老練の剛兵時分よじと城戸口堀と押開き三百餘人の兵穂先を揃へて突出れば右京亮も鎗取て士卒をばけまし奮戦す雙方の呼ぶ聲山谷を轟かし松柏を震ひけり敵味方入亂れ突も有り突かるとも有り切つ切れつ透つかへしつ火花を散して戦ふ所に寄手の中に内膳正信定が手より裏崩して逃じかの何かは知らず寄手の大勢崩れ立てそ逃たりける右京亮親盛大に怒り鉄壺に立あかり大音おけて下知おける甲斐赤味方のふるまひ敵敵の僅の小勢あるに逃るとい

ふ事やめる親盛こゝに踏止り速に討死するそ我を見捨て歸りあひ人に面を向ふべきか耻を知り名ををしみ踏留で討死せよと怒り立て四方を白眼み牙を嚙て散りに罵りければ破れ立たる軍の習ひ下知をの耳よも入す右往左往よ逃たりけり親盛始め其家人天野源兵衛忠俊末廣源内宮村平八同平七鈴木主殿安藤助作近藤次右衛門以下十三人主人と共に奮戦し敵大勢討取同じ枕に討死す内膳正信定の兄か主従討死するを見て救へんとせず捨鞭打て逃去けり清康君の大手の寄手敗北するを搦手の山上より遙に見給ひ是れを救へんと御身をもこてみせり給へども其間に嶮阻を隔て救ふべきよふあく牙を嚙て怒り給ふ身に取ての叔父の敵目頃の念願此城に有りよしと大手の敗北するとも搦手より無二無三に押寄せ乗取れどもみづから大鼓を打ならし三千余騎を先に立て命を惜まず攻給ふ清康君の扇の御指物敵も是を見知りければの撰打に討取らんとすれども元來力量は抜群之打物の絶倫之近付者切倒されぬのなかり一々本多吉左衛門忠豊また猛勇無類の壯士主君を討せしと眞先に懸懸り懸る敵を伐て落す城兵其猛威に辟易して近く者の逃隠れ遠き者の近寄らず清康君其勇猛を感せられ後に扇の御指物を賜ふ是よりして本多が家寶とし代々扇の指物を用ひけるとそ大將手



を下し奮戦し給へし士卒もいかで身命をまじむべき父子の間をも顧す死骸の上を乗越へて敵鎧を突出せば其鎧に取ついでたくり寄て攻ける程に城兵今の防きかねて城門を打破られ防くへき術盡し一將熊谷直盛始として城を逃出て間道より落失たり討取首をはかるに三百七十余級之味方の討死九十余人手負も尤多かりけり宇理城を攻取て大手の味方敗軍せし會稽の耻をすき凱歌を奏し既に軍を歸されて清康君の軍士の功を賞し夫々褒賜せられし後諸士にむかひ仰られしは汝等今度身命を捨て軍功を勵むける故負へき軍に打勝ぬ只恨らくは右京亮討死の事歎ても猶余りあり是ひとへに信定か兄の戦死を見なから捨殺しにたる故なりとて御落涙鎧の袖を濡し給ふ信定の此御詞を蒙り大に赤面して退けるか内心には甚恨をさしはさみ後々終に反逆の心を生じ織田方へ與力せしとる清康君に此戦の後彌武威盛となり給へは昔より今川に屬せし東三河の國人もや心を變じ清康君の御方に隨順する者多くあり織田と與力する西三河の國人どももなして大冨御手に屬したりよりて御威光益近國に輝きけり(重修譜に此時の討死は親盛にのわらず其子右京亮親次とす)

松平大炊介忠定武功の事

松平大炊介忠定の和泉守信光君に御曾孫大炊介忠景の物領にて三州額田郡岩津の城主成りしが同郡小美村の米津四郎右衛門は合戦する事數年去る大永三年癸未にも米津と合戦し彼所領を攻取て保母村を合せ領心又同國深溝の城は太場次郎左衛門といふ者頗る近國に武威を震ひしが忠定是をも賞し終に深溝を以て居城とす清康君岡崎を賣給ひし時忠定其子又八郎好景父子共に御供し軍功を勵し彼城を攻落し享祿四年辛卯六月九日忠定卒去す法名を實岩源譽といふ其子好景家を嗣て大炊介と改む其妻の岩津太郎親長が女と好景か子主殿助伊忠(此母の櫻井松平内膳正信忠か女)其子主殿助家忠(母の鵜殿藤太郎長持か女)等が武功は末の卷に詳あり

武田信虎使者付大樹寺制札の事

天文二年癸巳三月清康君の廣瀬の城主三宅右衛門寺部城主鈴木日向守と岩津にて合戦あり松平太郎左衛門勝茂其子彌十郎信茂の眞先掛討死せしか(勝茂の長勝子)終に敵三宅鈴木等を敗走せしめ其冬信州より押來る諸軍を井田野にて追拂はれしうの威光益朝日の登るか如し先代背し國人共悉く降參せしめ織田家の所領尾州の城に攻寄て強を破り堅を碎



其猛勇取て近付者なしこゝに甲斐國の武田大膳太夫信虎此年頃は吳越を隔て戦争よ及けるか清康君少壯の英武を慕ひけるにや金丸伊賀守藤次郎長子若狹守虎嗣を使者としてはるく三州岡崎へ参らせ今より後は互に金蘭の交を結び同盟の約を厚くし互に合力可致せし中送るにより清康君其使者に對面まじく遠路の使節悦入て以て送らるる如く今より後は共に親昵して聊も疎意すべからずと御返答ありて金丸若狹守を歸されける其跡にて近臣等に仰ける信虎遙く使を送る事和睦の爲のみにあるべからず或は國の險夷強弱をも伺ひ我等が人物容態をも見て謀をめぐらさんとの内意成るべし今信虎が方寸を以て我を計らんとすの蚊子か鉄牛を喰の隙にひとし故に其使者城内へ呼入わさど城の案内も見せ我等も對面したり清康齡五十迄もなからし三遠を伐從へ其上にて甲州に打入て武田が取領を併呑せん事何難き事かおらんと宣へは聞者舌をふるひ恐れけると其後に清康君大樹寺境内へ禁制の札を立らるる是曾祖親忠君思石を嗣せ給ふとぞ聞へし

制札

一如開山上人御式條一代々住持可有御成敗一聊以老若共於進犯の輩は永可被成追出

事

一行學二道無懈意可被致勤任一方一難遊之族者堅被加制誠於其上令如在者是又可被追出事  
一諸末寺如前御控無退轉可有出仕無沙汰衆可被放門徒事

天文二癸巳十一月

清康御判

清康君御横死の事

尾張國森山城の織田彈正忠信秀が弟孫三郎信光居城たりしか近年清康君西三河の國人數多討從へ數の城を攻取て尾州の城共をも追攻かけ武威を近國に振ひ給へ大に恐れ此森山等の守將等も清康君御方に内通し美濃の國士數十人とも相かたらひ御味方となし尾州へ御出張もあるあらの御先手仕ひのんどの事なりしかの清康君一方余人を引率し給ひ天文四年乙未十二月四日尾州へ發向し給ひ岩崎に陣せられ翌五日の森山に御着陣あり此處へ美濃衆も參上して拜謁し織田信秀を尾州清須より偽引出し一戰せんと謀をめぐらし在々所々を放火せらる信秀いまた打出さる所に君の御叔父櫻井の内膳正信定いつしか志を



變し今度御出陣の節も臨病を平立御供せず上野の城に籠居せり此信定の去頃熊谷備中守直  
 盛が宇理の城を賣られし時兄右京亮親盛が討死するを見ながら捨鞭打て逃退しを清康君大  
 は御憤り有て信定兄を捨殺したりと衆人の中にも罵らせ給ひければ信定是より遺恨をさし  
 はさみ終に叛心を顯したりと表にいへども其内心いもどより森邪の私慾深く何れにも  
 本宗の所領を押領せんとの謀計之清康君の此事を聞召内膳が叛心を抱くとも何程の事か  
 らん先一軍を池鯉鮒に遣ひして上野の城を賣落し内膳が首を刎て軍神の血祭にせよとて既  
 に出陣し給ひんとあるを酒井左衛門尉忠次大久保五郎右衛門忠俊同平右衛門忠貞其子七郎  
 右衛門忠世同治右衛門忠佐等諫ける信定を誅せられん御旗を向らるゝ迄もあし我々に  
 仰付られんに何の難き事いへき去とて御思慮あるへき内膳が叛逆の小事に似たる大事  
 之其故如何とやに御一門に大給の松平源次郎親乗長澤の松平上野介康忠他家に川屋の水  
 野下野守信元此徒の皆内膳か聲されり定て後詰可致所詮敵國の長陣の損多く益少し先今  
 度内軍を踏され重ねて軍議を盛へ内膳誅伐然るべしと頻に諫ける清康君聞給ひ重て仰ける  
 は我安祥の孤城を守りし時さへ僅の小勢を以て大敵と合戦し終に一度も利を失はずよして

我軍の大勢内膳の小勢なりたどひ大給長澤等が刈屋に謀じ合後詰するとも其勢千人に過  
 べからず何の恐れかあるへき攻寄て其首をはね異心の徒の懲むめにせば清康天下に旗を揚  
 ん志之豈内膳か如き鼠輩を恐れんやと仰らる酒井大久保等重て承けるは君今天下に御旗  
 を立られん御志にいへんに猶更今度上野の城の御發向の思召留り給ふべし大事の前の小  
 事之大功の小瑾を顧みずとこそやいへど詞を盡して諫言しければ君も漸々御納得あり明日  
 の御人數岡崎へ歸るへきに定りける爰に阿部大藏定吉(井上家の祖)其頃出頭して萬事沙汰  
 しけるを猜妬む者やいひ出じけん大藏の内膳と志を合せ織田家に内通するよし雜説あり  
 陣中尤嘖し清康君も聞召けるか是の定て敵方より味方主従の中を妨る雜説あるべしと  
 仰られ敢て取合給ひすされと大藏の此雜説を聞て大に仰天し陳謝せんと思へども御糺明も  
 なきに此方より出難しと甚愁悶したりけり十二月四日の晩大藏其子彌七郎を閑所へ招  
 き汝のまた聞すや我内膳と同心し反逆企るよし君に讒訴する者ありと聞り其讒人を尋出  
 し糺問せんと思へども其人を知らされり如何ともあし難し君より御糺明あらんには陳謝す  
 べしと思へども御糺明もなくして無罪の罪科を蒙らんには末代迄反逆不臣の悪名を殘さん



と返くも歎かばしけれ吾の無實の罪に沈むとも故の何とそ身の難を遁れ父か罪なき事を陳謝し其上にも御許容あきに於ては速に自殺して反心なき所を明にすべし父か冤罪を怨て敵に内通などすへからすと庭訓し其上大藏に於ての内膳に一味をる心決してあらざる旨陳狀を認め起證文を添て彌七郎に渡す彌七郎は是を受取て父に向ひ御身御糺明をも蒙らず無實の罪に沈み給はん事返すも口惜き事ならずや御用心在へしとて父か前を退きける翌五日の早朝清康君の御陣屋にて御馬を取放し御陣中を馳廻りしかば御陣中以外の外に騒動せり清康君も其所へ立出給へ陣外へ出すへからす早く木戸を閉へしと高聲に御下知ありしを彌七郎の寝耳に聞付父大藏只今誅せらるゝと思ひ千子村正の刀を取走り出清康君立給ひて必ず逃すなくと下知し給ふ御うしろより只一打に切奉り右の御肩先より左の脇の番迄切付けられ鬼神をあさむく英將もあえなく二ツに成て倒れ給ふ植村新六郎此時十六歳御刀を捨て御側にあり忽に其御力の鞘をばつし彌七郎を切伏たり其外御家人等あまなき君の御最期に茫然として落涙するより外はなし其中にはあまりの腹足に彌七郎か死骸をそ尿溜に踏込しとそ新六郎我君の御敵をば立所に討取ぬ今は腹切て黄泉の御供せんといふを人よおじ

留め退腹切るは今日に限るへからす十日を過す織田信秀此虚に乗し押寄んの必定之其時討死せん今日の殉死に増るへしと諫て漸く新六郎も尤と同心す(大久保物語)さて各集り大藏をい擒とし彌七郎か死骸を實檢するよ其懐中より大藏か陳狀と起證文ありしを取出し大藏を糺問す大藏始終の子細詳にかたり愚味の彌七郎大逆無道の重罪を犯す其父として暫時も罪を逃るへきよあらず早く首を刎ねらるべしと切て居たり各評議しけるは此趣にて彌七郎こそ君を弑する大罪人されども大藏に於ての罪なきに似たり幸に本國に道閑入道殿いまた御存命にてあしませへ本國へ引廻し入道殿の御下知に任すへしと定めたり織田方にも此大變聞へけれと流石眞偽を定めかねしにや又御餘列による物か敢て追懸る者もなかりけれの岡崎の人々は尊骸を守護し極密に本國三州へ立歸り岡崎近邊菅生丸山にて茶毘心大樹寺八世資譽上人御導師して御法號善徳院殿年更道甫大居士と贈り奉る時に御齡廿五歳をこもても猶あまりの御事へ(大樹寺記菅生丸山にて御火葬大樹寺資譽和尚御引導勤むとあり隨倉寺記よるに御火葬ありし菅生丸山にも御墳ありよりて神君永祿四年に其地一寺御建立あり今隨倉寺と云是へ又大林寺記によるに大樹寺の西郷氏代々の菩提所也



れい清康君始過夫人西郷昌安入道女春姫此所へ葬ると在り今按るに茶毘の後三河に御分骨  
ありしなるべし引おくれたる諸軍勢思ひくくに歸ける道すから野伏一揆蜂起して岡崎勢  
の物具剣取んと喋けれ流石に廣き街道も通行ありかたかく爰かしこと山野にさまよひ忍ひ  
くくに心をくるしめ人持の歴々さへからきめに逢ひけれい小身ある石川四郎河部四郎五郎  
等か類いの同十日の暮方にやうやく今橋吉田の事(一)まで着しと三州にて後々まで森山  
崩れと云傳へし此時の事とめや

正校 三河後風土記卷第五終

正校 三河後風土記卷第六

阿部大藏赦免付三州井田郷合戦の事

贈大納言廣忠卿御幼名の仙千代君後に次郎三郎君と稱し給ふ(又竹千代君といひ千松丸君  
と申たりといふ)大永六年丙戌四月廿九日御誕生御母の青木筑後守貞景の女之御弟を源次  
郎信康といひ其次の大樹寺第十四世成譽上人又御妹の長澤の松平上野介康高の室にて後  
に酒井左衛門尉忠次に嫁し給ふ去程に清康君に隨ひ森山へまかりたる御普代衆阿部大藏  
定吉を生擒よして三州へ歸る清康君の御祖父道閑入道殿いまた御隠居にてありしけれい此  
次第を申上る道閑入道殿の仰けるは大藏に於てい曾て逆意を不可爲其上彌七か死骸を實檢  
する所に大藏か陳謝の狀并に起請文ある上は逆心なき事必定之然るを彌七か不慮に清康を  
弑する事大藏か罪にあらすひとへに彌七か卒爾あれば大藏をは赦免すへし彌七か仙千代に仕  
て清康か時にかはらす忠節を盡すへしと仰られしかは大藏虎口の難をのかれますく忠義  
を思ひたつ此時尾張國領主織田彈正忠信秀の清康君横死を聞より時を得たりと悦ひいさみ  
此弊に乗して岡崎を責取るへしと天文五年丙申二月始八千余人の軍勢を三州に差向て大樹



寺表に陣を取る徳川の御普代衆此事を聞よりも打寄て清康君御逝去有てもさすかに名將の所領なるを敵の馬蹄にかけて其儘に捨置れんや仙千代殿の御幼少なりとも清康君の御舍弟方歴々としてありしませは仙千代殿御名代として一軍すへしと三木の領主松平藏人信孝其舍弟鶴殿の領主十郎三郎康孝を兩大將に取たて其の勢わつかに八百余騎岡崎を打立て十四五町押出しこゝにて勢を二手にわけ井田郷に陣を取る織田方遙に是を見て敵の僅の小勢あるそかけ散して捨よと敵をあどるくせなれハ備へもたてす軍位も定めず思ひくゝに走かゝる兼て殉死せんと約せし岡崎勢あれハ皆討死と思ひ定め 各妻子の取付なけく鎧の袖を振切て出たつ此時本多吉左衛門忠豊か子平八郎忠高眞先かけて武勇を震ふ後陣の軍勢是を見て本多討す者共とて打つゝく輩に成瀬八郎正乘八國甚六郎詮重林藤助光政か子藤藏長政大原左近右衛門惟宗其外植村青山高力等我あどらしどかけじかハ酒井大久保石川榊原等の一統敵の大軍よ少しも恐れす十文字に破て通り旋風のとく追廻る織田の軍勢は敵を小勢とあなごり備を亂し思ひくゝ心よくに戦ひけれハ必死の勢に追立られまはしか程ハ戦ひしおぬまりに手まけく責られて右往左往よ逃走る先陣既に破れぬれハ二陣三陣こたハ

大三河志林藤藏長政とする時ハ忠長の父也

すしてとも崩して逃けるを少し是を追討し討取首をはかるに百六十余級手負の數ハ知れさりけり織田方の軍勢ハ只一戦に利を失ひ尾張の國迄逃歸る見くるむかりける有さまなりされど岡崎方にも本一とさへへたる林藤藏長政植村新藏高力備中守重直其子新三郎安長を始め隨一の勇士四拾四人討死す今度城へ歸り來りし者どもハ若君を見て泣出せば若君もどもに涙を流し給ふ御譜代君ハ仙千代君御家督始の合戦に大軍に打勝むハ先々物始めまじと祝ひけり井田合戦とハ此時の事ありとそ(大成記家忠日記大久保か記等にハ此時伊賀郷八幡の鳥居井田の郷の方ハ一同真中にすへみ又伊賀八幡の方より白羽の矢敵かたへ雨の如く飛行しとあり)

按するに武徳大成記に大藏の其子の天罪を聞て大きに驚き恐れいろき岡崎へ逃歸り清康君ハ森山にて討死あり若君を置まいらせん事然るへからず道関入道殿の御方へしハらく難をさけ給ふへし各ハ城の中無勢あれハ防戦の用意専らにし給へ不日ハ入道殿の仰をうけ國人を引つれ定吉後詰すへしと偽り御家人一人も具せず大藏壹人若君を伴ひ伊勢へ行とまるす是本文の説と大に異之阿倍入道か松平記にも岡崎へ行事さらすと



ある所を合せ見れり大成記に在る所や實ならんか

内膳正信定姦計付仙千代君勢州御立退の事

今度仙千代君の清康君御家督を繼給ひ岡崎に御在城あり御一族御家人何も昔にめらさず志をばげまじ忠勤して若君御成人を待所に清康君御叔父櫻井の領主松平内膳正信定の清康君の御時よりいつしか其志をひるがへし織田信秀に一味して岡崎を責取西三河を押領せんと内々思ひ企しに思ひもよらぬ清康君の横死に獨笑しけれども織田方井田合戦の後には岡崎へ手も出す事もなしかくての願みあし兎角老父道閑入道殿をわざむき仙千代君と和睦し其後計畧をめぐらし岡崎を奪ひ取らんと思ひ入道殿へすけるの我等清康と不快の事聞も及ばせ給ふべし去享祿三年宇理城責の時親盛深入して敵に圍れ討死せしを信定か不覺にて捨殺したりと清康衆人の中よて我を取がしむたどへ不覺の事有とも叔姪の事なればいかてかく取辱をあたふべきまして罪なきを我を恨心ならずも織田家へ荷擔せける之然れども今仙千代に於て恨なし速に和睦し家國の事後見仕るへし只今迄の不孝御免おれかし世々生々の本望之仙千代と不快により父君迄に勘氣を蒙る事是に過たる愁歎なしと種々

あさむき歎きける入道殿も始の程は承引なかりしか其後愁訴度重なりければ流石思愛に引れ入道殿も哀とや思ひ給ひけん穢人信孝を招き直ひけるの思息内膳先非を悔ひ仙千代と和睦して後見せんと願ふいかゞあらんと尋給ふ信孝めくと聞此事詮あかるべしと思へども信孝當時後見たれり今是を否とせん仙千代君の後見を争ふと入道殿推置めらんも恥かしけれの兎も角も御差圖られまじくいまよく御計ひ給ひるべしと答たり入道殿大に悦ひ給ひ信定か勘氣ゆるされて御後見と命せらるるかへりし後の御一族も御家人もみな信定か命令を守りひとへに家人の如く之信定次第に權威も衰り岡崎一圓押領しやかて仙千代君をも殺害せんと姦計をめぐらしければ阿部大藏こゝに幼君を置まいらせん事然るべからず悴めこそ狂氣して弑逆の罪をつくられたれ定吉の身命を捨て忠義を盡すべしと或夜ひそかに仙千代君を伴ひて岡崎を逃れ出勢州神戶へ趣き清康君の御妹豊東條右兵衛督持廣を頼み彼方に月日をおくりける持廣夫婦の我子のごくいとをしみやかて元服をなしまいらせ持廣の一字を授け二郎三郎廣忠君と稱せまいらせける加冠の持廣理髪の大藏のかままつる大藏心中より世か世の時ならんに御一族御家人是を賀し門前市をあすべきにかく密々の御



大三河志道州  
可隆齋か伯父  
勢州藤崎妙見  
齋に月餘在て  
翌五年春吉良  
か家より給  
ふ嗣官の春木  
大夫か家より  
を學ひ給ふと  
あり  
重修證  
持廣室信忠君  
息女瀬戸の大  
房

備式時世との云々から口おしき事とぞ思ひける(大成記に天文七年岡崎御師城御元服の  
りと記し又一説に伊勢にて御元服し給ふとす家忠日記の五年とす)持廣の何とぞして此君  
を岡崎へ歸しやたしと度々今川家へも頼れけるか程さく持廣も病死ありしかり大藏も君御  
微運の程を哀みける(松平記)志かのみならず持廣の死後の養子上總介義安志を襲ひ織田家  
へ内通し此君を擁にして信秀方へ渡さんと計略す大藏是を聞て大に驚き再び君を供奉し神  
戸の城を逃出て三州長篠に來り其地の郷民を頼み舟を求め遠州鍛冶か家より落着かせ給ふ此  
間の御艱難筆にも詞にも盡し難しかくて大藏の兎角して味方をかたらひけるか其年の暮に  
至り只一人駿河の國にをもむき今川治部大輔義元(修理大夫氏親か子)の家臣朝比奈駿河守  
氏秀にたよりしける、某の三州岡崎の城主三郎三郎清康か家人阿部大藏定吉とす者定  
て御聞も及のせ給ふらん主人清康不慮の横死により幼息仙千代當年十一才岡崎の城主とし  
て西三河を領すへき身か叔父内膳正信定姦計をめぐらし織田家へ内通し其身岡崎の城にお  
りて表に仙千代か後見すると稱しあから密々仙千代を弑せんとす是に依て其難を避んか  
ため某密々幼君を供奉し岡崎を忍び出勢州にをもむき内膳あるにより東條持廣を頼み彼所

に忍び居て時節を伺ひ本望を達せんとする所も持廣さへ卒去せられたれり今も頼みに思ふ  
者一人もなし今川殿と徳川家の代々のよむみわり今仙千代微運の程を御憐れりて哀れ御慈  
恵を垂れ給ひ、岡崎の君臣永く今川家の幕下に歸順仕るへし一日も早く御扶助を蒙りあ  
岡崎の二族家人に合せ信定を伐亡し本領安堵し其上に織田方所領を攻取て今川殿御恩  
に報ひやへしと涕を流ししける氏秀聞て君に仕ふる志さし誰もかくあるへしと感し其旨披  
露すれり義元是を聞定吉か忠誠の程感心あり其上徳川家の兼を舊好もあり先に吉良持廣よ  
りたのみ越たる事もわれり汝早く仙千代を伴ひ來るへし絶たるを繼廢れしを興すの勇士の  
本意之謀を帷幄の中に廻らし勝事を千里の外に決し仙千代を扶助して歸國せしむへしと  
頼母敢てされけれり大藏も大に悦びて掛塚さして歸りける

阿部四郎兵衛靈夢の事

阿部大藏定吉は駿州より掛塚へ歸り幼君を駿河へ伴ひまいらせんと心ばかりに用意せり爰  
に大藏か第四郎兵衛忠次の兄とこそしを同じくして幼君の御爲に染衣の姿とあり所々  
かけめぐり様々心を盡しけるか掛塚に参りて幼君に拜謁し西樂寺七社権現に宿願の事あ



りて直に御暇をすてかの社に参詣す是の此社二日に七度ツ、九十日足をはこへ諸願  
 圓満せすといふとなしと専ら世上に習しけれ九十一日社参して廣忠君岡崎御跡城の事  
 を祈念し又四月五日より殊更諸方の神社へ参籠して一心に願をか其月晦日に松平傳  
 十郎信勝（泰親君四代松平太郎左衛門信吉二子）を筆取にて同意の人々へ廻らし文を認め  
 送りしか其夜の四郎兵衛通夜の満願之其夜寅の二點に靈夢を蒙りけるこそ不思議なれ所の  
 三州大樹寺佛殿の北の端と覺しきに十二色の小帷子を其數十二掛たりおくて佛殿の唐戸開  
 くかど見みれ其丈二尺斗の神童三大顯れ出て掛置帷子を一々着て蓮枝の舞をまふ白洲に  
 群參する人々を見るに堂の左脇に松平内膳正信定從者廿余人具して見物して居たり其  
 時平澤新兵衛の權現七社の神使と稱し御旗竿を右の肩にかつき左の手に判形すへたる札木  
 を持來る四郎兵衛右座の様に只二人降階して居たるに新兵衛其御旗竿と札木を渡し是を  
 三州殿へ授けすへしといへは四郎兵衛受取御旗竿を左に持札木を右に持たる所に東の方より  
 鶴の置物長さ三尺より翼に眞紅の丸紐五寸ばかりに紐て弓手妻手の翼にかけて上座に置  
 又折公卿の着置二十膳程座上に並へたり是を見ると内膳大に驚きたる跡にて御旗屋の築地

をはね越て廿余人の從者どもに被田をさして行方迷らす逸失たり四郎兵衛御旗竿をかつき  
 是のくどやて關の橋まで行かと思へは夢の其儘覺にけりいかさま是の君御跡城あらん吉  
 兆あるへしと一味の聲にも語り其後岡崎加太山甲山寺多寶坊にて夢想開の靈應に阿闍梨  
 を頼みいよく祈念をこめ其五月朔日よりの山中へ赴き八幡宮へ祈願し一日に七度つゝ七  
 日詣を始しか七日に満する結願にの通夜しけるにまた寅の二點に靈夢を蒙りたり其夢の井  
 田若宮の門前にて御馬飼の彦太夫簀笠を着て居たりしか四郎兵衛を見てゆけるの岡崎様の  
 御馬飼我等一人にての中へ飼中事叶ひかたし御跡城はしめの御祝儀御客人方の馬三百疋餘  
 いかて手廻しかのふへき御馬飼大勢仰付られ下さるへしと頼りに願ひけるにより夢心にこ  
 たへたりしかのや所道理とて神足二十疋當座の引出物七御馬飼をは然るへき者二人も三  
 人も早く尋て召抱へしといひて四郎兵衛の井田より岡崎へ歸らんとするに鳥居朝日の方の  
 石へ尺杖を立てると見て夢覺たりかく重く靈夢の上の程なく御跡城疑ひなれと心中に悦ひ  
 五月廿一日より兄大藏本多平八織部等に語りしかの皆めてたしとて悦ひける（此一章の四  
 郎兵衛定次が自記并其家譜により原文に改む）



阿部大藏催味方 廣忠君駿州御下向の事

去程に廣忠君を阿部大藏定吉并御一族鶴殿十郎三郎康孝松平傳十郎信勝等遠州掛塚の餓  
 治か所にたのみ置御供の面々の三州に赴き各々味方を催促す四郎兵衛定次の再應の靈夢を  
 蒙り頼母敷思ひけれの三州所へ馳回り舊友共をかたらし此間廣忠君の御一人鍛冶五郎か所  
 にあわしけれの五郎もいたわり小島あど多く参らせ御徒然を慰めり此程に四人の靈の寶  
 塚をかたらし傳十郎の彼廻文に種々才覺を志たしめ四郎兵衛を使として所々へ内通しけれ  
 の松平善一郎本多猿千代坂部又十郎みな味方へ心を通ず其始十郎三郎康孝を其家隨一の  
 家人石川藤十郎内藤甚太郎兩人をたのみ内意を予入しめ康孝得心して兄藏八信孝をもす  
 りめて味方せしめ阿部甚五郎正宣藤井の松平彦四郎利長も味方とす其外松平彌十郎中山勘  
 左衛門築田平三郎同平九郎の四人の林藤助がすしめにより味方と成る又内膳正信定が結衆  
 と號する大久保新八郎成瀬藤三同又太郎大賀孫四郎をも藤助かたらし天野清右衛門植村新  
 六郎をば安部八郎五郎にかたらし河合隼人正同半次郎并御半間衆伴六左衛門孫五郎八郎  
 五郎等の四郎兵衛かたらしたりこれより先十郎三郎康孝の八質として其母を廣忠君の御方

へ兼より出し置たれども内膳正に深く頼まれしかりのいた味方にも一定せざりし時四郎  
 兵衛さまくすしめかたらし其上母君を永く置れすまじきと誓書を認め石川傳太郎植村新  
 六郎天野清右衛門内藤甚太郎林藤助此五人の方へ遣しけれは是より康孝無二の味方と成け  
 るなり其後大藏の廣忠君の御供して駿州へ下り石川新左衛門康盛をたのみ其よし披露しけ  
 れの今川義元對面せられ廣忠君御幼少といへども器量骨柄衆人よすくれ武勇の相あり志  
 かも聰明に渡らせられしかり義元も大に悦み實に英雄の將器とどさくもてあし又器  
 量の程を試んと折し近く招寄て物語りせられけり

廣忠君三州牟呂御入城 吉良西城落城并信定要盟の事

今川治部大輔義元の朝夕廣忠君を招寄て其器量を試られしに全く英雄の器にして其志勇  
 猛されは是家國を興隆すへき人ありと感稱斜ならず三州牟呂の城の年頃今川家の持城な  
 るを廣忠君へ進せらるかの城に移し追し岡崎をも攻取しめんと御家人のいふ迄もなし東三  
 河與力の國士大勢添て君を牟呂の城へ遷し参らせける是天文五年九月十日之(家忠日記)  
 御家人等先念願の叶ひたり是より岡崎を兼取ん事掌の中に有と悦ぶ事限なし去程に義元





廣忠君駿  
刈下回乃  
圖





の軍勢數百卒呂へ遣ひし徳川勢を先手として岡崎を乗取へき手始に先同國吉良西條の城を  
 貴取へしと下知せらる其頃西條の城主を吉良左兵衛佐義卿とて清康君御事有し後の今川  
 家の旗下をばなれ織田信秀よ荷擔す此に於て今度今川家より攻伐んとする所之徳川家御家  
 人等も幼君の御爲の云に及りす今川勢も勇をはけまし大手搦手もみ合を我先に攻破んと命  
 を輕んし合戦す吉良勢もこゝをせんと突出て戦けるを取かこんて一切て落し追なひけ  
 ての突伏る城兵若干討れければ義卿のはけしく戦て討死す其弟上野介義安(東條持廣養子)  
 の速に降参す一族荒川甲斐守頼時かねく今川に内通しければ今川より義安を駿府へ  
 呼どり駿田へ整居せしめ西條の城を義安の弟義昭にあたへて守らしむ(原書に廣忠君  
 西條を貴取給ふとしるす譯り甚し松平記に卒呂へ入城より前に西條落城をしるす大久  
 保記に廣忠君卒呂御入城前に吉良の織田方に成しかり今川より攻られて荒川の今川に降  
 り吉良屋形の強馬に乗り敵中に入て討死す吉良か子共の駿河へ付しかり大藏今川を頼み今  
 川受合て廣忠君其年卒呂の城へいらせ給ひしとしるせり)扱吉良落城すと聞へしかり内膳  
 正信定大に驚き御一統の御家門譜代衆只今迄の我命令に應すといへども此後の廣忠に内通

する者もあるまじとせすよし、普代隨一の衆彌我に歸順し志を變せざる様に起  
 請文を書しめ彼等にしめし合て味方の者共廣忠へ内通をふせくへしと計畧し大久保新八郎  
 忠俊平右衛門忠員彌三郎兄弟八國甚六郎詮實林藤助大原左近右衛門惟宗成瀬八郎政乗等を  
 伊賀八幡の社によび集め密に渡せしめ我等道関入道殿の仰を蒙り仙千代を補佐し國政を  
 沙汰する所に大藏といふ姦臣其子彌七か大罪其身にかゝらん事を恐れ罪なき我に惡名をお  
 かせ幼少の主人を盪出し伊勢神戸へ遊行其上に今又駿河の今川を頼み廣忠を人質として入  
 道殿を敵とし岡崎を奪いんとす今に於て廣忠の不孝大藏の不忠天地神明の憎みを蒙る所  
 之此道理をも知らず當家一門譜代の面々大藏にたふらかされ今川に内通し岡崎を賣んとす  
 るの尤不忠といふへし各に不孝不忠の廣忠大藏の味方となり入道殿に弓を引へき所  
 存やあると申ければ一同に入道殿かくてましませし離か主君を捨て今川家に内通するもの  
 いへき此儀の御心安かるへしと答ふ内膳正是をき各今の詞偽りならず大藏に一味し  
 廣忠を國に迎へからすとの起請文七枚したむへし入道殿御安心の爲御目に掛へしとて  
 硯料紙に午王をそへ社檀の前に出せける六人の輩もまた難くや思ひけん是非なく搦詞を



書て血判しければ内膳正大に悦び此後の此六人の眞の一味と心得内外の密謀隔さくかたらひける

廣忠君岡崎御歸城の事

其年も暮れ天文六年丁酉廣忠君の三河國牟呂城にて新陽を迎給へり岡崎よりも御譜代衆忍ひくくに参り仕へける(家忠日記)四月廿九日に大久保兄弟八國林大原成瀬等起請文の書れども要盟の神の請さる所之我累代の主君を捨て無道の内膳に歸順する道理有へきやと相談す其時大原左近右衛門守けるの譜代の主君を補佐し無道の逆臣を誅せんにかて神の答あるへき今更に疑ふへきにわらすといへり皆尤も同心す内膳正猶も大久保の心中心元あしとて又七枚づゝ三度十一枚起請文をうゝしめけり(大久保日記)起請文をかゝせし後度々大久保とともに牟呂の城を責ま來る大久保度々矢文を城中へ放込内通す其後成瀬八郎同志の輩にゆけるの今岡崎の松平藏人信孝同十郎三郎康孝兄弟城代せらる十郎三郎の始より無二の味方之藏人も内々の志を道せらるれり此兩人を語らひ戦はすしてやすくと岡崎を手に入んこそ良策なるへけれといふに面々是こそ良策あれと同意し此輩

ともさひ岡崎の城に赴き信孝康孝に對面し兼々内通せしとく内膳正信定の幼君を退出し清康君の御舊領を一圓に押領するのみならず御一門をも譜代の歴々をも其家の奴僕のとく驅仕し無道の沙汰のみ取行て驕逸の舉動前代未聞の姦人あり然るを御一門も御家人もかゝる無道の人の命令は服従して主君のとく敬事する其上累代の主君を敵とし弓を引へ天命人道に背所之速に内膳を追放し廣忠君を岡崎へ御歸城をさせずさんと思ふ之御計畧を廻らさるへしとやせば藏人は是を聞廣忠の我う甥之内膳の叔父といつれお等閑すへきにわらされども廣忠の正しく徳川家の正統あり尤陳意すへからす各忠義の志返すへきも祝着すさりかから我等此城を守護して有なから故あく廣忠に引渡しあひ道關入道殿思はれん所もいかへ所詮信孝の病氣と披露し豆州熱海に入湯すへし(大久保并阿部日記)に攝州有馬入湯とす大三河志も同じ其留守をはかり此城受取へしとて城門の鍵共を渡し其の後信孝は湯治に赴たり大久保大原成瀬林并八國等大に悦び此由牟呂城へや送り廣忠君御間に入置軍兵大勢ぬけくに岡崎に遣はし置扱兼て計りしとく六人の輩の岡崎に有りて彼軍兵を招かれ大久保新八郎同七郎右衛門同治右衛門同權右衛門成瀬八郎八國甚六郎林藤助等も岡崎城内に



入たり此時本丸の石川修理亮康長が三勇長右衛門康利同三郎四郎康定兄弟(石川四郎康繁か弟)其外軍兵十余人にて守居たりしが大久保を始め城内に隠居たる一味の義士共夜中不意に夜討をしたりければ石川兄弟も大に驚き防戦かなひかたく討死し其餘の番兵もわるひに討れ或の疵を請けたましく命助る者の赤裸にて柵を越矢狭間をくぐり泥まみれて逃うせたり斯所崎城を安くと乗取ければ廣忠君の御迎として阿部四郎兵衛定次足輕百余人を召具して念志原まで出迎天野清右衛門う人質又太郎并松平傳十郎等も相伴ひ櫻井寺迄参り五月朔日(原書六月とす今の大成記家忠日記に従ふ)朝辰刻に廣忠君の岡崎へ入らせ給ふ兼忠志を盡たる御一族譜代衆のや迄もかく新参の奴僕迄も悦ひいさむ事限りなし阿倍四郎兵衛の先の靈夢相違なくかく御歸城有之事不思議ありと皆人奇異の思ひをなせり此時の功臣等に御判物を賜りて其家の規模とせらる

今度入國の儀忠節無二比類一候然るを以田地方十五貫文ツ、可有二加増一もの也於三末代二不可有二相違一候仍而如レ件

天文六年十月廿三日

仙松丸花押

八國甚六郎殿

大久保新八郎殿

成瀬又太郎殿

大原左近右衛門殿

林 藤助殿

かくて石川四郎康繁御使として今川義元の方へも岡崎御歸城の事を告られける

内膳正信定降参の事

廣忠君岡崎御歸城有ければ元來忠節致せし御一族御家人の自然と上座して臂を張り内膳正信定に同意せし輩のものつから肩をちりめ手を束ねて時世を憚る其有様見苦しといふばかりなほ廣忠君の是より阿倍大藏等と評議し給ひ内膳正信定が櫻井の館を攻給んと御人敷を催さる信定も今の力盡て防戦せん術なけれど首をのべ降参せんとそ思ひ立ぬ老父道闕入道殿を頼みひとへにちのか罪を謝しけるにそ入道殿是をわかれみ廣忠君に信定助命の事を志きり又仰らる廣忠君是を聞召曾祖父君の仰違背有るにあらされども父清康君森山陣中不



慮の大變に逢給ふ事も全く信定の織田信秀に一味し阿部大藏も敵になるよし雜説云のせけるよりかゝる變も引出しける之然れ父の誓の信定ありいかてか不具戴天の仇を報ざるへき其上曾祖父君をわさむき廣忠か輔佐すると披露し亡父の遺領悉く押領するのみならず廣忠を殺害せんと陰謀を企てしに大藏か忠節にてやうく其難を逃れ大久保以下忠臣ども志を盡してこそ再度本領安堵せりかく無道の信定赦し置時のいかて國政を正しくせん早く信定か首を刎て亡父の墳墓に手向亡父黄泉の幽恨をも慰めやへき本意之此事に於ての御誕ありとも從ひ申へからすと仰ける入道殿も其理にせまりまばし詞も出し給ひさりしがやゝありて承はる所天理の當然之重てやへき詞もあし但し入道桑掬の齡既に傾き詮なき長生して子供か首刎らるゝをかく居ながら見聞せん事心うし願ひく信定より先入道か首切て後兎角心にまかせらるへしと涕と共に歎給ふ廣忠君も余り痛ましく思召御心あらする内膳正を恩免おれば入道殿も實に悦ばせ給ひけり内膳正度々不義の舉動しなから命あしさに降参すよくく聡知らぬ事よと岡崎中資賤爪弾して誹りしか翌天文七年十一月廿七日信定遂に病死せり又今度無二忠勤せし輩追々加恩褒賞行のれける中にも藏人信孝十郎三郎

康孝御叔父の事なれり廣忠君も格別よ禮遇を施され信孝先規の如く御後見とあり家國の政沙汰これ其權威彌盛ん之松平記に内膳正降参の此年六月八日ありとあり又大入保か記に今藤といふ御家人貧にて自身田へ出て早苗を植て居たるを御覽し我今少身おれの汝等をしてかゝる貧苦にわらしむるとて御歎きありまた天野孫七郎に廣瀬を切て來るへしと仰ありしよ天野手を負ひせ歸りしかば大濱にて五十貫の地を賜ひしも此頃とぞ

按るに阿部四郎兵衛定次入道か筆記安祥殿森山御横死を天文四年乙未十二月五日とし其年岡崎殿十歳とまると十三の御時(天文七年にあたり)阿部大藏御供して伊勢國へ御浪人なされ神戸にて御越年(天文八年にあたる御年十四とぞ)さて十五の御歳駿河へ御下り其年牟呂へ御入(天文九年御年十五とす)十七の御歳岡崎へ御歸國とまると(前の次第によれり天文十一年御歳十七と)然るに其記に岡崎御入城を天文六年六月廿五日とまると尤不審といふへし若岡崎御歸城を天文六年とせり天文四年十四歳の御時より中一年をへたて三年目に御齡十二歳の時御歸城ありしと大成記も阿倍か記によりてまるといへとも其年月の天文四乙未を岡崎殿十歳とし其年阿部大藏此若君を守護し



難を伊勢の神戸に遷れ同五丙申の年岡崎老臣等と計り神戸より遠州懸塚へあわじまされ爰に百五十日はかり渡らせ給ひて夫より所々の味方へ通じ今川を頼み同年の冬三州牟呂城へ入まいらせ其翌天文六丁酉の年岡崎へ入奉る此時御歳御十二歳とす兩書とも岡崎御歸城の天文六年老るす所あしけれの御十三歳なりし事ハ明らけし森山よて御父君御事有し後中一年を隔し事あるへし原書の阿倍記よりて十三にて伊勢へ渡らせ給ひ五年を経十七の御年天文十一に岡崎御歸城とす是古書に齟齬する物之今悉く大成記家忠日記に老たかひ原書を改めたり(大三河志大成記家忠記とあなし)

織田信秀安祥城攻付左馬助長家討死の事

廣忠君御歸城の後いまた御幼稚といへども聰明にして老かも武畧未だのもしく見へ給へは御二門普代の諸士悦事かきり各忠勤をばけみける程に徳川家御威光再ひかへやき織田家へ降参じたる三河士ともまた立歸り徳川家へ歸順せんとする者多かりしかは織田信秀大に驚き兩葉の時刈棄すいあるべからずといそき大軍を催じ三河士どもの眼を覺させ織田家の威風になびかじめんと天文九庚子年六月六日大軍を發し三州安祥の城を攻めこ

む此城主の親忠君の御七男左馬助長家さる勇士あれの少しも屈せず城兵を指揮し矢石を飛して防ぐといへども寄手の大軍城兵の少し餘方あくぞ見えにける廣忠君聞召安祥救ひていかさふまじと藤井の松平彦四郎利長御油の松平外記忠次岩津の松平甚六郎康忠林藤助内藤與一郎に御下知あり松平源次郎信康を大將とし安祥の加勢に遣はさる老かるに源次郎か馬つまつきて進み得ず城門に入時あくれけるを幸と寄手の大軍攻かこむ城兵左馬助此跡を見て門を開て切て出敵味方入亂れて力戦し遂に左馬助を始め源次郎甚六郎内藤近藤等思ひくりに討死し城の其儘棄とらるゝかど見る所に彦四郎外記よく指揮し渡部八郎三郎八右衛門矢石をばげしく放ち防げの織田勢も攻あぐんで城を巻つくして退参す

竹千代君御誕生 御母君御離別の事

天文十年辛丑正月三州刈屋の城主水野右衛門大夫忠政息女を以て廣忠君の北の方と定め給ふ此故の御父清康君はしめの松平彈正左衛門昌安入道か女子を以て北方とし給ひけるに程あく御離別有て青木筑後守貞景か女を迎へ給ひ此御腹に廣忠君をまうけ給ひ此北方うせ給ひて後右衛門大夫忠政か離別せし妻をめぐりて北方となさる(華陽院の御事)此北方忠政



か方におのせし時まうけ給ひつる女を以て今度廣忠君の北方にいなされし之(傳通院の御事)是みち阿部酒井石川等の老臣等がはかる所之翌天文十一年壬寅十二月廿六日若君御誕生まじくけれの君臣内外の歡大方あらず石川安藝守清兼の藝目を役し阿倍大藏定吉の竹刀の役す(大成記に酒井雅樂助正親胞刀を獻すと有り徳川歴代に大久保新八郎胞刀阿倍大藏鑿目とし家忠記落穂集等諸書皆正親胞刀清兼鑿目とす)やかて七夜の御祝ありて竹千代君と稱し奉る此若君御誕生ありし時さまくの奇瑞有し中にも三州風來寺峯の藥師に十二神の像とすの其一は**毗**釋迦如來毘羯羅大將(子の神、錫杖を持)二**毘**金剛菩薩招杜羅大將(丑の神、大力を持)三**毗**普賢菩薩眞達羅大將(寅の神、神鋒を持)四**毗**藥師如來摩唐羅大將(卯の神、弓を持)五**毗**文殊菩薩波夷羅大將(辰の神、七寶塔を持)六**不**地藏菩薩因達羅大將(巳の神、金輪寶塔を持)七**不**虚空藏菩薩珊底羅大將(午の神、金剛と持)八**不**觀音菩薩又摩利支天類彌羅大將(未の神、天花を持)九**不**觀音菩薩安底羅大將(申の神、金剛杖を持)十**不**阿彌陀如來迷企羅大將(酉の神、蓮花を持)十一**不**勢至菩薩伐折羅大將(戌の神、鋒を持)十二**不**彌勒菩薩宮毘羅大將(亥の神、白拂を持)此十二

神將の像を安置せるに今度若君の御誕生有し日より第三の寅の神眞達羅大將の像何地ともなく失たり是御母北の方峯の藥師に御男子御誕生御祈願ありて七日通夜まじくけれるか結願の曉に靈夢の告まじく十二神將の中眞達羅大將をもて授り給ふと見給ひしより御懷胎まじく天文十一年寅に當り御誕生殊に眞達羅大將の像失けるそ不思議といふもあまりあり(元和二年四月十七日薨御ありし日此像出現有て今其寺に安置す)應仁年中より百有余年四海一同に戦争の地と成り稻麻竹葦のとく亂れたる豊蘆原を一統し給ひ千万世の泰平を開き給ひし征夷大將軍從一位太政大臣今の世に日光山の神宮と垂迹し給ふは則ち是若君の御事之然るに此若君三歳の御時天文十三年甲辰御母君御離別あり其故いかといふに前年水野忠政の卒せらる(大成記天文十二年癸卯七月十二日水野忠政卒法名大漢賢雄)其後長子下野守信元の織田信秀に志を通せらるより廣忠卿我今川の與國として信秀に一味する水野と縁を結ん事本意よ背けりとの思召故なりとそ此時北方御病ありしけれの酒井雅樂助正親の家にとめ參らせしか御快あらせ給ひ彌水野家へ歸らせ給ふこととて御母子御別を歎せ給ふぞ理り過て哀なれかて北方涙ながらに岡崎を出給ひ刈屋に赴き給



金田惣八郎正祐阿部四郎兵衛定次其外士五十人ばかり御供せり(大成記に金田并淺羽氏として阿倍のなし編年に阿部金田并淺羽三太夫と三人に作る但家系によるに惣八郎正祐の與三左衛門正房の子之天文十五年九月六日上野の城責の時戦死す廿二歳)北方を御興に載て岡崎と刈屋との境に至りし時北方御供の人々を召て送り來りし輩下々迄わらひその此所に捨置てとくく歸るへしと仰られければ金田阿倍を始めこのいかざる御心にてかくの宜ふにや岡崎殿に道の程よく警固して刈屋まで送りまいらせよとこそ仰られければ是非御供仕るべしとすに北方聞し召いやとよ兄下野守殿の大方ならぬ短慮の人なれば汝達刈屋まで赴かば一々切て捨らるゝか又髪を剃て追放さるゝか此兩様をばこへさるへしともあらんにわらひこそ縁盡て兄の本よ歸るとも竹千代岡崎に残し置ゆへに岡崎の人々を他人どの思ひす其上にも汝達か下野殿に誅せられ竹千代成長ののる是を聞て下野殿を恨る事深かるへし下野殿と竹千代と叔姪の間なれ終に和睦せられんか汝等今誅せられ其時和睦の妨と成べしと思へば返すべも汝等をも誅したしと涕と共にかきぐと宣へし金田阿部をばしめ御供の人々も此上の仰をそむきがたしとて小川領の農民十四五人呼

出し此御興を刈屋に送り奉れどなくくサ合御暇すても猶心あらず人々ハ片山陰の林中に身を隠し御行衛を伺ひ居たるにはたして刈屋より高木善次郎衛秀水野太郎作清久をばしめ三十人はかり御迎ふ参りけるか皆馬より飛をり御興の前に踰躍して是の何とて岡崎より御送の者いひぬにや御供せし岡崎士を一々討殺せと殿の仰いひしとて羽織を脱は下らみなく具足を着したり北方聞召岡崎より送りし者共の郷民どもに興を渡し先刻ま引どりぬ今程の岡崎に歸り着しなるへしと仰らる是の追かけて討取事あるべきかとの御深慮成るべし刈屋の者どものかくてのせんかたきしと其儘御興を守護し刈屋に歸りけり高木水野兩人此頃の信元の家人なりしか後より御當家に召出さる扱其頃此北方の姉君ハ三州形原の松平紀伊守家廣の妻なりしか廣忠君北の方を御離縁あるうへに家廣も其ちあみの人に縁組べきにあらすとは是も刈屋に送り歸さんと士若干足輕中間十六七人供せしめ刈屋迄送りし所信元大に怒り送りの者共一人も残らず誅したり此時にいたり廣忠君の北の方の女性ながらもさる名將の御母君ほどまじくいみじき御思慮かなと世人聞傳へて後々にても感歎せしとぞ是れも後に傳道院殿容譽光岳知光大姉とや奉りし御方なり



竹千代君御兄弟 御母君御再縁の事

廣忠君の御子ハ竹千代君の外に御男子一人御女子二人ありしけれと昔竹千代君との御腹か  
 いらせ給ひける御男子ハ康元(始家元)とすけるあれハ御湯取の腹に生れ給ひけれと御胤又  
 疑ひあかりし故竹千代君御成長の後聞召とゞけられ御弟に定めさせ元服ありて家元と名乗  
 らせ後に康元と改めらる十三の年より兩足蹇て行歩叶ハぬハ生涯籠居して世に交り給ハぬ  
 ハ誰れ知者なかりしが慶長八年癸卯八月十四日逝去ありて正光(一に正慶一に正元)院殿  
 傑傳宗英大居士と贈りまいらす御女子三人の内多却姫とすハ櫻井の松平與市忠正に嫁し給  
 以内膳正家廣をまうけ給ひ忠正卒して後其弟與一郎忠吉ハ妻に定まり給ひ伊豆守信吉(藤  
 井松平伊豆守信一養子)左馬允忠頼をまうけ給ひ忠吉死後保科彈正忠正直に賜り正直ハ  
 本にて又二男四女をまうけ給ひ男子ハ保科甚四郎正貞北條出羽守氏重之女子一人ハ黒田筑  
 前守忠之の妻一人ハ小出大和守吉政ハ妻一人ハ安部攝津守信盛ハ妻一人ハ加藤式部少輔明  
 成ハ妻あり(藩譜保科ハ傳にハ此多却姫を傳通院殿久松ハもとにて生給ふを御妹になされ  
 事としるす)又市場殿とすハ平原助之丞正次ハ女ハ腹に生れ給ふ(市場殿ハ田氏の腹と

もいふ)吉良左兵衛督持廣ハ弟荒川甲斐守頼時(義虎ともあり)の妻となり給ひ女子一人設  
 け給ひしが後に酒井備後守忠利に嫁せらる荒川頼時失て後市場殿又筒井紀伊守政行に嫁せ  
 られ男子二人生給ふ主殿守政定左馬助政信と云又八田姫とすハ長澤の松平源七郎康高(後  
 上野介)妻と成り給ひ源七郎康忠(後に上野介)をもふけらる此康高ハ信光君御十二男松  
 平源七郎親則六代源七郎政忠ハ子ハ廣忠君ハ先の北方御離婚の後に三州田原城主戸田左近  
 政光ハ子彈正少彌康光の息女を迎へ給ひしか此北方にハ御子もまじまじす竹千代君の御母  
 君ハ岡崎より御離婚の後尾州知田郡阿古屋の領主久松佐渡守定俊に再縁し給ひ愛にて男子  
 四人女子四人まうけらる(原書久松を三州小川の領主とす小川ハ水野信光所領之今大成記  
 に従ふ)長子ハ彌九郎定員と云叔父治兵衛義春ハ爲に害せらる(備考にハ天正五年七月十  
 九日大坂にて自殺とあり)其次ハ三郎太郎康元後因幡守に任す(孫因幡守忠憲子なくして  
 家絶たり)其次ハ源三郎康俊(大成記に義勝とするハ誤りなり)其後ハ三郎四郎定勝後に  
 隱岐守に任す(松平隱岐守家祖)此輩皆永祿三年にいたり松平氏を賜はり御弟となされ  
 たり



廣忠君御災難付片目八彌の事

天文十四年乙巳三月徳川廣忠君不慮の御災難にあらせ給ふ（此事原書に三月廿日とす松平記に天文十五年丙午とし編年に天文十四年三月九日とす）是の御普代の士に岩松八彌といふものありしなり新田の末葉岩松氏ありしか此者たぐひなき剛強にて度々軍中に武功を顯す片目なる故世人片目八彌と呼しか敵方よても見知りてすや片目か出たるのといへば諸人は是を恐れける故其身も後の岩松といひ名乗すして片目八彌と稱しけるほどにやのづから片目といふ苗字よの成たり八彌此日出仕しけるか何の仔細もなく村正の脇差をぬき廣忠君を突奉りしか突損して御股を突其儘逃走る君も逃さじと御脇差を抜給ひ御門外迄追欠給へと御股の疵痛ませ給へし追付給ひす其時植村新六郎（系圖に其とありて諱をまるとす成績に持益と有り出羽守家政の父大二三河志永政とす）出仕するるとて御門外よて此跡を見て八彌と無手と組上へ下へ返し侍なる乾堀の底へまろび落けれども兩人とも組も離れず其折ふし松平藏人信孝是も同じく出仕するるとて此所へ來かへりしか從者に持しめし鎗取て高聲に新六其敵を放すへし信孝鎗にて突殺へしと云しを植村聞て是の大事の

敵なれり放すへからず其共に突殺されよと答ける植村も強力成しが八彌が力の猶勝りたりしに酒に深く酔ければ植村を組しく事も叶はず上に成り下になり轉ひける所を藏人兎角して遂に八彌を突しかり植村其首を討取る植村か詞の勇々しさを人々大に感じけり此新六郎の去天文四年十二月五日森山にて阿部彌七か清康君を弑したりし時其座にして彌七を討留し十六歳の時今又八彌か首を取二代の御主君の敵を討取し誠に其加の勇士なり（此植村新六郎を井田合戦に討死とする）誤之今度八彌か不義惡逆誰人に類れしにやと種々詮議有しかども叛逆の心にもあらす此四五日以前より狂亂せしにや罪なき家僕二人迄手討よし妻をも討んどせしに妻のやうく逃隠れ助かりぬ八彌元來大酒を好みしか此朝大樹寺にて先祖の法事いとあみじよ例の大酒を呑み其歸路に出仕じかゝる大逆を犯したれり狂氣酒疾のいたす所の顯然たりといへども其罪ゆるすべきにあらぬ其子一人有けるをば誅せらる六歳の孫も同じく誅せらるべきに定りけるを廣忠君御慈悲にて八彌在亂以前の度々忠戦して三心あかりしもの之其子孫を斷つべきにあらす孫の幼稚なり命を助くへし然しあから武士にのみすへからずとて越中の住人桃井の末孫に幸若小八とて舞太夫の有ける其



弟子に下され幸岩とよばしむ是本苗の岩と幸若の幸を合せて稱せしあり此者成長して與太夫といひ其子與三太夫う時にいたり三州御先祖の御事蹟并御家人の由緒武功よく覺へたるよしをいつしか台徳公御聞に達し御はなしの衆に加へられ舞々をゆるされ割髪して眞齋と號し其子忠八郎も舞々太夫をいゆるされしとそ(阿倍酒記に蜂谷と云て名りまらずと有さあらんには八彌といふ名にのあらざるへし又大成記より八彌隣國に頼まれ刺客とす)

酒井將監忠尙叛逆付藏人信孝改易の事

廣忠君岡崎御歸城以後の松平藏人信孝のいふに及ばす其余の功臣大久保新八郎成瀬又太郎大原左近右衛門林藤助等大に時を得たる其中にも阿部大藏定吉石川安藝守清兼酒井雅樂助正親權威肩を並ぶる者なく家國の政事藏人信孝鶴殿十郎三郎康孝に相交りて沙汰しける此頃酒井將監忠尙の物領家おれの我こそ執權の威勢を専らにすへきに鹿流の雅樂助かへつて權威をふるひ忠尙の其下知を受る事口おしく思ひ何うな阿倍酒井石川等の過失を見出し罪負さんと謀り天文十三年甲辰三月上旬忠尙の大原左近右衛門今村傳四郎を同道し岡崎に登城し大久保新八郎成瀬又太郎を取次にて上上げる酒井雅樂助石川安藝守等權威を専ら

にし主君を威如にし忠尙如き譜代の御家人を侮り近來無禮非道の沙汰をさす此故に御家人一同に恨を含む者少うらす是國家爭亂の兆之速に先彼等に腹を切せ給ふへしとすける廣忠君聞召譜代の汝等瑣細の事に恨をなし傍輩等に害心を狭むり家中騷亂の基ひあり早々私の宿意を捨て主君に忠節を盡す本意とし双方和睦し水魚の交を結ぶへしと仰けれの忠尙力あく退出せしか是より大原今村等をかたらひ内々叛逆の謀を企ける(原書に忠尙を左衛門尉忠次とす大久保か記にの太郎左衛門とのみあり松平記にも同じ新井君美か考にの忠尙か兄に別に左衛門尉といふ人ありて忠次の其人の子にて忠尙か爲にの忠次の甥と記す大成記忠尙叛逆の天正十三年とす年月の大成記によりて改き)是より先に織田方に一味しける三州上和田城主松平三左衛門忠倫(元の佐崎城主之又此書に今村傳四郎とあるを大成記に近藤傳四郎とす)と同意し岡崎を侵掠めんとす又同國碧海郡木領主松平藏人信孝近日權威専らに驕奢大方ならず岩津の松平太郎親長といふは(長親君庶兄)既に死去あり嗣子あくて家斷けれの所領廣忠君に收めらるへきを藏人權威につのり是を押領し其上三州に板倉八左衛門頼重か子八右衛門好重弟彈正重定三次郎重宗其子主水正重茲(重定か甥



にて御之(一)八右衛門好重か子左右衛門忠重等をかたらひ家人とす忠重か第四郎右衛門勝重  
 の後に伊賀守と稱し御當家佐命の功臣といわれりき(原書に勝重一人一族をばされ廣忠君  
 に仕ふと云接するに勝重寛永元年四月廿九日八十歳にて卒したれの天文十四年に生れし人  
 之此事を天文十三年とすれば勝重生前一年なり又其弟喜藏定吉の藏人に一味すどあり兄勝  
 重さへ生れず其弟いかて生れんや定重の天正二年討死の時廿八才之然れの天文十六年に生  
 か原書の誤り此類い多し)藏人かく不臣の振舞すれども廣忠君にも御歸城の時大功の人あ  
 れは少し(の過失の咎)きにあらずとて御優待ありけれの御一族も御家人も口をつぐんで月  
 日を送る所に此頃鶴殿の十郎三郎康孝も卒去あり康孝の尤御歸城の折から大功の人なれの  
 廣忠君も一とほ御哀惜深く御憐愍深とて康孝卒して家つかせんものさかりしかの其所領  
 をも藏人無跡に押領す(康孝か遺腹の子松平村民間にて成長し廣忠卿召れ御家人となり越  
 後守清吉と稱す今源藏義崇與右衛門清達此後之三松餘康孝か子八郎三郎康定とあり今の重  
 修譜にて改む)阿部大藏定吉の岡崎隨一の執事にて尤威權高く藏人とい不快之其故の藏人  
 常々憤りを含ける其趣の(大藏か彌七といふ國賊主君を弑したる其父大藏の執事して御

家人の上座する事返すも穢りしとあり大藏此よしを聞て大に恨みあられ其藏人(身)の  
 上いうなる珍事うあれしをのれ人々の領地を無理に奪ひ君を蔑如にしてありながら此定  
 吉を誹謗すること遺恨なれと思ひ或時酒井雅樂助石川安藤守植村新六郎以下腹心の輩を招  
 き面を何とぞ思ひ給ふと當時藏人信孝の驛逸日頃に超過す只これ御當家の主君とこそ見へ  
 たれ近日廣忠君を蔑如にし岩津の遺領を奪ひ其上鶴殿の一族をも押領す清康君御幼少の時  
 内膳正信定後見したりしに諸人收公の領地を押領して其身過分の所領を得たる後の遂に逆  
 心を企るよいたる御一門方所領多分なるの國家騒動の基なり只今迄の廣忠君へ對じとの  
 み疎意なきうとこしといへどもかやうの驛逸超過せば後々君の爲國のため然るべからず速  
 に藏人を追放じ彼所領を面々配分して然るべしつらく愚案を廻らす所道岡入道殿の御  
 逝去あり(天文十二年甲辰八月廿一日逝去)頼に思ふ鶴殿の康孝も卒去せらる藏人一人太身  
 にてゆく、岡崎をも侵掠し宗家を奪ふ計畧有まじとゆかたしといへり石川酒井何れも  
 尤と同意し彌其内職をどへの天文十六年丁未廣忠君の御病惱まじく駿河の今川  
 へ年始の御禮御延引あらんもいかになりとて藏人を御名代として駿河へ起らしむ大藏時を



得たりと悦び石川酒井と評議一決して藏人三木の居館を追捕し其資財を没入し其家僕どもを追放す郎黨ども大に驚き急ぎ駿河へ馳下り斯と告げの藏人も愕然として信孝罪を犯せし覺あし何故に改易を受く立歸り自身子細を尋んと三州へ歸りしが藏人の領地は岡崎より代官を置いてありへも寄せ付ず廣忠君へ書狀を捧げ訴へんとすれども取次人もあらされはむなしと持てと歸りける今へすべき様もいと再び駿府へ赴き今川家へ此子細を以て三州歸參の事を願ふ義元も不審して岡崎より本多平八郎忠高酒井雅樂助正親石川安藝守清兼阿部大藏定吉植村新六郎を替るく駿府へ呼よせ廣忠を諫て藏人歸參の事はからへと度々申されけれども此輩一同に信孝不臣の心をこぼしはさみ廣忠所領若干押領したる子細を逐一告る義元聞れ扱ひ廣忠が追放したるこそ道理なれとて其後の藏人か訴訟を取上さりとゆへ藏人の詮方なく織田方へ内通し上和田の松平三左衛門上野の酒井將監と會議じて岡崎をそ伺ひけるこゝに藏人か披官に内藤甚三といふ者元來御當家御譜代の者ありしか藏人か不臣の志をいたき織田信秀に内通するとも我又いかて譜代相傳の主君に叛く事あらんやとて大久保甚四郎を頼み同道して三木より岡崎へ参りける（大久保か記に大久保甚四郎彌

三郎が進めにて信孝に付し御譜代衆の各立去て岡崎へ歸りしかり信孝大に怒り大久保か一類の妻子共を皆申刺にせんといふによりて針崎の勝鬘寺に入てまばらく老のさけるとあり又大成記に内藤甚藏善教阿部大藏を頼み忠勤せんと願ふに天文十二年卯八月十日の御書を戴きたり然れども是は此時の事なるべし編年にて此御書十六年にのせたり従ふべし

三州清細手付渡理河原軍の事

是より先天文十一年十二月夜中俄に織田方より上野の城を責内藤彌次右衛門同四郎左衛門よく防て敵を追拂ひ御威を蒙る（家忠日記）天文十二年甲辰松平三左衛門忠倫織田方に一味心酒井將監忠倫も心を忠倫に合せ岡崎を討る其故如何といふも忠倫元來御一族にて佐崎の城を守りしかる頃岡崎へ降参せし松平内膳正信定も今へはや死し東條の領主松平甚太郎義春も死し其上此八月廿一日道関入道殿も逝去ありと聞て織田信秀大軍を差向再び三州碧海郡安祥の城を攻落し長子三郎五郎信廣を入置直に佐崎の城を攻んとす守將三左衛門忠倫の織田か大軍を恐れ忽に志を變し信秀の味方となり岡崎を侵奪んとす信秀大に悦び重て出張のためとて渡理筒針に砦を構へ軍勢をこめ置又上和田にも砦を構へ忠倫を守らし



む(三松録を案するも忠倫の信光君御九男二郎右衛門光親五世の孫にて父を清右衛門親次といふ者かれの能見よと出る所編年に信光君の孫彈正左衛門昌安の子とするの誤なり)酒井將監忠尙と上野の城に有て忠倫に與力す此時岡崎はかり孤城とある翌天文十四年己の春廣忠君の安祥の城を織田方に奪れしを守からぬ事とて矢矧川を渡り清細手よて織田勢と合戦し打勝て直よ安祥の細手にいたらんとす信秀援兵を出すにより岡崎勢戰勝れ引取兼しに大久保四郎五郎忠政十六歳初陣にて敵の侍大將を射倒ふ此の忠政後ち阿部定次か養子となる又本多吉左衛門忠豊扇の御馬印を請清細手よて討死し其ひまに岡崎の君臣共に引取たり(此扇御馬印忠豊か嫡子平八郎忠高へ相傳し忠高討死の後其子平八郎忠勝か時に再度召上らる)此頃古内膳正信定か子内膳正清定も上野の城に入て酒井將監ととも岡崎に叛く廣忠君是を征伐あらんとて是年上野に還向ありしに清定謀を以て防ぎしめ御味方大に敗軍す植村出羽守(新六郎の事)大久保新八郎忠俊堤上に踏留り苦戦して味方やうく引取事を得たり翌天文十五年九月六日再び清定か上野の城を責らる金田惣八郎正祐中根甚太郎某討死し岡崎勢打勝たり其頃岡崎の士淺井半六といふ者あり天文十六年丁未

藏人信孝岡崎を叛し後半六密に謀をめぐらし廣忠君を弑すへし采地の印書下さるへしと藏人へや送ける藏人聞ていやく廣忠に恨なし若大藏を刺殺て來らし知行の折紙授くへしと返答す半六の大藏を討事のかなりざるにや其後の沙汰もあし賊に危き事共あり其特の知る者あかりしか月日へて露顯しけれの半六岡崎を逐電す切も松平三左衛門松平藏人酒井持監等の織田信秀に一味し此三人謀し合せ此年九月廿八日大軍を引卒し藏人が岡の城より打出て渡理河原に陣取り(家忠日記并編年渡河内とあり従ふへし)廣忠君聞召敵に足を留さずとむづかに小勢よて彼所に馳向ひ辰の刻未の刻迄四時の間合戦あり敵大軍なれり岡崎勢をとりこめ我討取んとひしめく岡崎勢も命をたします戦へとも廣忠君も敵にたすれ既に危く見給ふ此時御油松平外記忠次(始の彌九郎)其弟喜藏信次(彌右衛門忠長か兄)鳥居源七郎元繁(始の忠宗伊賀守元信か子彦右衛門元忠か兄)踏止て力戦し討死す此間君もやうくのがれ給ふ外記忠次の藏人か家士鳥居久兵衛(家忠記并編年への渡理守將鳥居又次郎に作る)討とる外記と久兵衛の従弟にて有けるか外記か帶したる青江の刀を分どり此刀の彼家重代の責されの形見の爲とて外記か子ある彌九郎景忠かもと贈り返じけるは情



やさしく覺ける又源七郎元繁の是も藏人か家士松下清兵衛討取しか此松下の其始外記か家士之近頃主を恨る事ありて浪人も藏人に仕へしか翌天文十七年戊申より再び外記か子彌九郎方へ歸參せり今度渡理の合戦の尾州かた大勢ありければ定て勝利なるへきと思ひの外鳥居伊賀守忠吉奮戦し尾州裏崩して逃しかり勝へき軍に打負たりとぞ聞へける

寛平三郎刺殺松平三左衛門一事

今度渡理の合戦織田方思ひの外敗軍せしと聞へければ織田信秀大に怒り松平三左衛門忠倫へ藏人將監等と彌評議し岡崎を責取て汝か所領とすへと若勢を出さば尾州よりも援兵を遣はすへしと下知す三左衛門忠倫大に悦び彌岡崎を攻取て己一圓に押領せん藏人將監と軍議をこらし近日岡崎へ發向せんとて猶も同志の輩へ廻文を送り軍勢を催促す此事岡崎へ聞えければ廣忠君ひそかに寛平三郎重忠(大久保記に圖書に作る)を召て汝も定て聞つらん織田信秀の渡理の軍に負腹立て近日三左衛門忠倫藏人信孝將監忠尚等を當國の案内とて岡崎を乗取んと大軍を催すよしなり若大軍にて向ふ時の防戦ほとんど難義之信秀か頼む所の三左衛門登人あるべし汝のうのかみ三左衛門と斷金の交りありと聞及ぶいかにもして上和田

へ起き一味せんとあさむき近寄て忠倫を討て來れと仰合め給ふ寛の君命いかで辭退すへき畏り直に上和田に赴き忠倫か近臣を頼み密々入けるに平三郎年頃岡崎に於て忠勤するといへとも大藏の姦臣忠貞を思ひまきりに讒して忠志空敷上に達せず廣忠君に恨なけれど阿倍酒井石川等を恨る事深しあられ織田家へ勤仕せばやと存るあり和殿と我の其昔斷金の交りす若其上の契りを忘れ給へすに織田方へ推舉を頼み參らせたと誠敷たり三左衛門は兼てより岡崎衆の一人も引付度思ひし折から平三郎かくやて來るへと聞いそき立出て對面し悦ぶ事限なし此後の平三郎を腹心の味方と頼み日夜傍を離さず岡崎を攻る軍議を委細にかたらし我岡崎を乗とらば其地一圓所領すへしと織田殿御ゆるしわれの御邊も今度忠節あらんに所領加恩まいらすへしと懇にもてなす平三郎も今かく御味方に參るからいかて力を盡さん岡崎の案内と御家人等の剛愎の程の知り透してゆへに尤計るに安かるへしと事もあげにいへば三左衛門いよく悦び心をゆるし親昵にそたのみける天文十六年十月十八日夜宵の程の寛と共に酒汲かしの例のとく軍議をあらし夜もやうく更しかの忠倫の寢所にいり寛も其の近所に臥しむ寛兼て案内の見置たり廣忠君より賜りたる脇差



を腰にし忠倫か寝所へ忍び入脇坪を二まで刺通して逃出る(編年には忠倫か枕脇差を以て討しとあり此刀の平安城長吉としるす)兼て示し合せけるにや弟平十郎正重(後に助太夫)城外に來り立忍んで居たりしか兄平三郎をともあひ岡崎へ逃歸る忠倫か篋に刺れし時一聲わつとうめきたりしに近習の者ども大に驚き火を燈して來り見れば忠倫の朱に染みてそ伏したりける定て篋か所爲ならんと上和田の者共我もくんと追欠しかども篋兄弟の先刻走り去り追付得ず手を空敷して立歸りぬ平三郎岡崎に歸り斯とやせの廣忠君御感のあまり羽粟といふ所にて百貫の知行に御感狀を賜ふ其文の

今度三左衛門生害之儀忠節無比類一以此忠於子々孫々一忘間鋪以然て爲給恩一方正知出置以雖爲何義於未代不可有相違一在所別日記出置以也(編年には方正の知を百貫の地につくる)

天文十六年丁未十月廿日

廣忠

寛平三郎殿

竹千代君人質の事

松平三左衛門忠倫横死の事織田家へ注進ありければ織田方の力を落し岡崎方の勇み就事彈正忠信秀の是を聞て大に怒り此上のみづから大軍を引卒し岡崎を攻べしとて人敷を催す此事岡崎へ聞へければいかいして是を防んと軍議専らある所に岡崎の老臣等當家先年よりして今川家へ一味なれり駿州へ援兵を請給ひ然るへしと一同にすより石川安藝守天野甚右衛門御使とし(伊東記)今川家へ加勢を請給ふ岡部次郎右衛門并大原和尙(原書泰源に作る成績に大原和尙崇學雪齋と號す義元諸父)取次にて披露すれば義元聞れ加勢の事へ心得たり遠州勢を遣すへしさりなから徳川家の事の疑ふべきにあらすといへとも當世のならひし軍中の法式あれり人質を中受へしと返答あり廣忠君此よし聞召義元のいひる所道理至極せり人質進らせんとて御嫡子竹千代君僅六歳なり給ふを天文十六年駿州へ送らせらる御供に石川與七郎數正天野三之助(伊東記又五郎とす三郎兵衛か事)上田慶宗金田與三右衛門松平與一忠正平岩七之助平岩助右衛門柳原平七郎江原孫三郎等すべて廿八人雜兵五十余人之阿倍甚五郎正宣か子徳千代(後に善九郎正勝伊豫守に任す)同新四郎といふ者あり是も六歳之日頃竹千代君御伽にて片時も御側を離れぬ是も御遊の友として御興に同



しく乗せて遣はるる(伊東記に岡崎御發興の天文十六年丁未八月二日とす)こゝに三州  
 田原の城主戸田彈正左衛門康光(原書頼光に作る系圖頼光といふ人なし編年憲光に作る是  
 も誤り之憲光の永正十年十一月朔日卒す神祖御繼母君の父の康光あり今改む)の廣忠君の  
 當時の北方の御父之此由緒もあり陸地の敵地多ければ舟にて送りやさんとて西郡より吉田  
 (伊東記)に入せ給ふ今川家よりも御迎として飯尾勘助此所迄参り向ふ時に康光か子五郎政  
 直の俄に心を變じ織田家へ内通し鹽見坂に伏兵と置御供人を追散し竹千代君を奪ひとる御  
 供の輩も随分と戦ひけれども大勢に小勢あれは與三右衛門正房を始數人討死す(伊東記に  
 戸田鹽見坂に假屋を設て御馳走す田原へ御供やたり此時森平太と云者實事を告しかど御  
 供人信せす翌朝に至り戸田たばかりて熱田へ送ると志す又原書に金田惣八郎御供すとす  
 成業并に編年等に此御供に金田與三右衛門正房とありて惣八郎と云者なし重修譜にも此時  
 御供せしは與三右衛門正房之此時戸田偽り舟を以て熱田へ送りし後金田の若君の御歸國を  
 計りしか露顯して織田信秀か爲に誅せらる鹽見坂にて合戦のなし戸田巧言をもて御供人を  
 あざむき舟にて送りし方實あるへし大久保記同じたし原書の松平記によりて志す所と

見へぬ)後康光の五郎政直と心を合せ竹千代君并徳千代を船に乗せて尾州熱田に送り織田  
 方へ守けるの此幼息の三州岡崎の二郎三郎廣忠の嫡子之今度今川義元へ人質に遣はす所兼  
 て内々守上しとく遂に奪ひ取て此幼息を人質となし召置れば廣忠を御旗下にささるゝ  
 事かたかるべからすと守けるに信秀悦び大かたならず是の當座の恩賞とて戸田五郎に青銅  
 百貫を授じとぞ(原書の注に永樂百貫又永樂五百文に作る書われど此頃の小田原の北條關  
 八州は令し永樂を撰用ひしむ上方錢の京錢と稱し關東に用ひす駿河より西の京錢のみ用  
 ひて永樂は用ひす尾州にて用る所京錢にて永樂にての事と云)角て討殘されたる御供の  
 輩の只ぼふせんとのみして居たる所に天野三之助をのが從者をひそかに故郷へ返し此始末  
 を告じとぞ(伊東記)其後竹千代君徳千代も共に熱田の地下人加藤圖書順盛といふ者の方に  
 翌天文十七年迄置まいらせ此時高野藤藏といふ者の君御幼稚にて志らぬ境にさすらへ給ひ  
 見も馴給ひぬ田夫野人の中におひすをいたわり朝夕さましくいとあし小鳥など参らせあ  
 らさめ奉りければ後御成人ありて藤藏を召出され知行給ひり昵近せしめられしとぞ織田  
 信秀のやがて使者山口惣十郎弘孝を岡崎へ遣はし守けるの竹千代君の信秀たしかみ預りす



たり今に於ての今川一味をばなれ信秀と和睦して水魚の交りをせらるへし若又其事叶はずといへんに御幼息の一命賜らんかとなり廣忠君其使者に對面し給ひ御直に仰られける兩雄久しく國を争ひ取をいどみ今に於て止時なし廣忠か小勢を以て織田家の大軍に對し軍を破る事數を知らず遂に一度も雌伏せざるの恐らくの廣忠か武畧の致す所あらんか然に何の爲よか織田家へ人質を送るへき思息事子細ありて今川家へ人質に送りたるを大慾無道の戸田五郎線者の上しみを思はず中途にして盜取其方へ送しなれば廣忠心より出せし人質にあらず我等今川義元と多年の舊好變ずべからず一子の愛に溺れて不義のふるまひすべけんや思息か存亡の信秀の心にまかせらるへし聊か恐るゝ所にあらすと思召切たる御返答に使者も再應ずへきとばもかく其儘立歸りしかくどやけれの信秀一旦の憤りけれども廣忠君の御實義を感じ今若竹千代君を殺害せば遂に味方となり給ふまじ助け置ものからば終よりの子の思愛にひかれ味方又屬せらるゝ時もあるへしと其後の竹千代君并徳千代と共に尾州名護屋万松寺天王坊に召置て禁番嚴重つけおきける

三州小豆坂軍の事

かゝりしかば天文十七年戊申三月織田信秀の三河を併呑せんと大軍にて押寄るよし聞へしかり兼約を變せず今川義元遠江并東三河の軍勢加勢として差向らる大手の大將の駿州陣濟寺の雪齋和尚副將の朝比奈備中守泰能搦手の朝比奈小三郎泰秀岡部五郎兵衛長教を大將として向ひしむ其由兼て岡崎へも示し合せられければ岡崎より御家門御家人を催され御出軍あり徳川今川兩家の勢遠州今切本坂へ出張し此所にて二手に分れ岡部五郎兵衛先陣として山中藤川に陣を取る八日しの矢矧川の下の瀬を渡り上和田に押上り頼田郡小豆坂に陣を取る織田信秀もかくと聞て庶子三郎五郎信廣并弟津田孫三郎信光等に四千余騎を差添是も同日尾州清洲を打ち笠寺嶋海をへて八日しの三州安祥に着陣し上和田の砦に移る同十日に馬飼原に押出し備を立物大將信秀もやがて尾州より着陣し安祥にいたり弟孫三郎信光を軍將にて小豆坂を押登らんとす此時今川勢と織田勢と兩陣の間わづかに一里余なりしかども山道にて互に先途を見分ざる故今川勢と織田勢と兩家の先手小豆坂を登るとはしなく行違たり時に織田方織田遺酒允信房左右に下知し敵の頗る大勢なるを味方の小勢を見透されてはかならず合戦仕にくゝあるべし早々坂の上に押上り合戦せまど下知する所に



今川勢の坂のうへより旗を作りをしめ入り入亂れ戦ふ信秀の弟與次郎信康同四郎次郎信實同孫次郎信次三人赤川彦右衛門神戶市右衛門ひまなく下知して合戦す尾州方内藤藤助よき敵を討とる川尻與四郎(後肥後守鎮吉)駿州方伊東某と組んで首を得たり其外織田方永田四郎右衛門重宗名護屋孫五郎秀方等の力戦して討死す織田方隨一の土鎗武藤三位入道小瀬修理太夫直澄川崎傳助友勝土肥孫左衛門通平大久保半助乘忠等身命を塵芥に比して合戦す此半助は度々の戦に勇力をあらはしければ時の人異名を附て今櫻槍とぞ呼ける此時今川家の軍將朝比奈小三郎泰秀の一番に鎗を合す徳川勢も今川勢を救つんと先手に進み左を討右を破り織田信廣を退崩し逃るを追ふ事三丁余り此敗軍の勢ども信秀の旗本へ崩れかゝりける程に旗本ももみ立られ盗木戸迄引退く此時に至り津田孫三郎信光織田造酒允信房岡田助右衛門直教(一本重吉)佐々木隼人佐勝通其舍弟孫助勝重中野曾知(後又兵衛忠利時に十七歳)下方孫三郎匡範(一本貞清後に左近時に十六歳)此七人一度に繰と返し合せ追來る今川勢に一度に鎗を合せ散々に突立たり其中にも孫三郎造酒允は今川勢の中に馳奔て命をとおしめす突取すれり残る五人の輩は此兩人に越れける無念さよと憤り同じく進み戦ふ今川

勢の此七人に突立られまばらと猶豫して進み得ず織田勢是に力を得て二の備まで守返し駿州勢を突崩す小豆坂の七本鎗と世上名高く傳へし此七人の事之けり今川はや駿州勢惣敗軍と見へし所は徳川勢の中より松平太郎左衛門信吉弟傳十郎信勝林藤五郎忠満小林源之助重次以下横合よりかけ入て織田勢の馬の諸膝平首かけて切て落し胸掛太腹草摺を當るを幸と突立苦戦して討死す此時に織田勢も徳川勢も若干討死す岡部五郎兵衛是を見て尾州勢は疲れたるそ息を繼せす責よとてまつしくらに突てかゝる爰に織田方の物頭鎗武藤三位と今川方小倉興助正孝引組て伏たりしか興助ついで三位か首を取る兩軍互に引かじと戦かひけれども織田方小勢故終に軍をかへして上和田の城へ引返す其後津田孫三郎信光に上和田を守らせ安祥の城には織田三郎五郎信康を残り置いて信秀は尾州に歸りしとそ此合戦初度は織田方の勝後度の今川勝ければ軍は午角と見へしかども織田方は芝居を去りしゆへ今川方の勝なりと世上には評論しけるとかやかくて尾州勢既に退し後雪齋和尚と朝比奈備中守泰能のまばらと三州に滞留し諸事沙汰しける其間大樹寺に參詣し寺の由緒を尋けるに勅願寺たる事明らかになり其證文の



大谷知恩院末寺成道山大樹寺之事勢舉上人爲二開基松平一門令二建立一至于今象  
彼助縁一僧住寺玉譽上人抽二修造之功一再與證九神妙也今度爲二本末一勸願寺并勸願之  
事被二執申一者之彌可被致二天下安全懇祈者  
天氣如此悉之以此狀

十一月一日

權左少辨在判

大樹寺住持上人

兩人是を拜見してかくての私營の寺院にわらす尤狼藉をいましむべしとまた連判の狀を  
出す其文にいふ

大樹寺之事勸願所之上の爲二不入之地一本末田畠直務祠堂以下如二舊規一不可有二相  
違者也右中興殿宇御修造專要以恐惶謹言

備中守泰能在判

雪齋在判

魯耕鎮舉上人御房

雪齋和尚も泰能も諸事沙汰し終りければ今度の勝軍を悦び諸軍勢を引つれ駿府へ歸ける岡  
崎方の此取に大勢討死しけれども武威はいよく盛にあり歸順の輩多かりける

三州大明寺村合戦付藏人信孝討死の事

天文十七年戊申三月小豆坂の合戦織田方うち負たりと聞へたれ織田方へ内通の徒の  
大に愁ひ恐る其中に櫻井の松平内膳正清定(原書に信定に作る信定の天文七年又死す故に  
改む)の是より先父内膳正信定姦計をもて廣忠君御幼年の時追出し奉りて岡崎一圓押領  
しけるを忠義の御家人力を盡して廣忠君を岡崎へ歸し參らせたる其時信定既に誅せらるべ  
きを道閑入道殿を頼みさましく罪を謝し漸々首を繼れしが程なく天文七年十一月廿七日病  
死すかくて清定家を繼しかども父の罪を以て其身も終りに安泰あらじと思ひ去る天文十四  
年にも上野の城にて叛逆し討負て降參し櫻井に盤居しつる所今度藏人信孝も叛逆し酒井將  
監忠尙今村傳四郎太原左近右衛門等も異心をさしはさめ清定再ひ叛心を萌して上和田の  
三左衛門山中の權兵衛等に一味同心し織田方へ内通し岡崎を傾んと姦謀をめぐらしける  
に三左衛門が横死せしより此徒大に膽を冷しけり藏人信孝のいつ迄かくてあるべきぞよ



し、信孝が一手にて岡崎を乗取て我武威を顯りさんと思ひ立五百余騎を引卒じ四月十五日三州大明寺村に出で、魚鱗に陣を取る（大久保記に小豆坂合戦前に岡崎御家人等圍入坊に昇りて小田の加勢来るかと見物して居る中藏人の岡崎を襲はんと出けるを見付大明寺町よりすがふ川へ出るを待て射取るといふ）廣忠君のかくと聞召酒井雅樂助正親石川安藤守清兼に貳百余騎を添て馳向らしめらる此御軍勢の敵思ひしより大勢なれば陣を張ていまた軍をば始めす廣忠君のかさねて大久保新八郎忠俊其子五郎右衛門忠勝石川新九郎正綱に御下知あつて精兵の射手七十余人すぐり出し大明寺村の敵陰にある小塚の間を埋伏せしめ敵兵隊に乘て此所まで追來らば俄に起立て射立へしと定らる依て射手共矢打つぐへ待掛たり信孝の五百騎と酒井石川か二百騎と掛合て戦ふ程に茲に手負討死し兩方にさつと別れ人馬の息を助く藏人士卒に下知しけるの敵のわつかの小勢なる息な繼せそ只攻立よと大明寺を打出て青山へ寄ける所に岡崎方の伏兵持設けたる事され俄に起て鯨波をつくり鐵を揃へて射立たれ死生の知らず忽に四十余人射落され四度路にありて進み得ず大久保石川氣に乘て馬を蹴立敵の真中に馳入て一文字にかけ破るやがて大明寺村を菅生河原迄切

拔又取てかへし二手に別れ敵の前後より散々に射立たり酒井石川も是に氣を得二百余騎にて討て掛る此時藏人大明寺村の民屋に火をかけ軍勢を引とらば岡崎勢も追欠る事叶はずして人数を引取へしよと暮ひ戦ふともさのみ勝利もあるまじきに藏人不忠の天罰にや大明寺の町に備て戦んとせし程に岡崎勢二手に成り前後より矢襲作りて射立たり藏人方への射手は少し楯のあし的に成りて射られ開き合せて戦んとすれば町家にて道狭し藏人が軍勢の如く重りて先手ばかりの戦へとも後陣の勢のいたづらに旗の動くと味方の兵の胃の鏝斗りあかめ居てあす業更にあかりければ後陣の勢は身をもんで掛よくとよばれ共先手の勢の射すくめられ一足も進得ず忽に大勢射伏らる其時流矢飛來り大將藏人か左の脇腹にわたり矢先白く射通したり藏人の老バしもこたへす馬より眞逆に落たりければ上田兵庫元信其首を取る岡崎勢是を見て彌勝に乗すれり藏人かたの大將討れ士卒もあまた討取られ散々に亂れ民家の裏へ逃入て垣を破り藪をくぐり命斗り助りともあり或は日頃高名と武勇にほこる徒も雜人の手にかへり討る者數不知岡崎よりの四五町の間を敵とくく逃去けれり岡崎勢の藏人の首を始め都て首共百三級持歸り實檢に入けるに廣忠君に御家



人の軍功甚感し給ひける中にも大久保石川が戦功拔群之と賞美し給ふ乍去藏人信孝の  
清康君の御弟我に叔父之随分最初より忠節を盡し吾身岡崎歸城の砌の勤勞少なからざり  
しものをとて御落涙御袖を滋し給ひければ御側の輩その御仁心を感じけり

山中落城の事

爰に三州山中の城主松平權兵衛重弘の兄三左衛門忠倫横死を口おしく思ひければ彌叛心  
をおこし織田方へ内通し岡崎を侵奪んと三州加茂郡山中の城に其舍弟左近忠親清藏親成  
三藏忠就并左近か子宮内親乗等を始め與方同じく郎黨等たて籠る廣忠君聞召て三左衛門既  
に討れぬれ山中城の者共の力を落し氣を失ひはかしくしき事あるべからず押寄て攻よと  
て同年十一月酒井雅樂助正親石川安藝守清兼大久保五郎右衛門忠勝（此時父忠俊の新八郎  
と稱す）大手搦手の大將にて三百余騎押寄てもみ合せ息をもつかす攻立ければ城兵若干討  
死し防戦叶ひ難く思ひしにや夜中城中に烽火多く燒捨權兵衛を始とし左近清藏三藏宮内其  
外討殘されたる城兵共閑道より扱々に落失たり寄手は是を夢にも不知翌十日卯刻より鯨  
波をつくり攻寄しかども城中には人音もなしいかさま是は偽り引寄て討んとはかる者なる

へし油断するも下知し門を破り堀を乗り攻入て見れば人はなし思ひしよりも安々と山中  
城を攻落し岡崎へこそ歸りける

按ずるに原書に此合戦を天文十六年とす大久保か譜并松平記編年よの皆十七申年と  
す今是に従ふ但松平記に四月朔日とも編年に信孝大明寺村合戦より後の事とす信  
孝討死四月十五日山中落城十一月九日之神社尾州熱田にましくけるの天文十六年未  
にて此前年之畢竟織田信秀か三左衛門横死を聞て急に大軍を儲し岡崎を襲んとしけれ  
ば神社を質とし今川か加勢を得て小豆坂の軍あり其後信孝も大明寺村にて討死しけれ  
ば權兵衛も山中にたて籠りしかり原書の年月の誤りある事を考るされは今其次第を改  
たむ

廣忠君逝去付岡安祥兩城軍并竹千代君人質替の事

去年より廣忠君は御心地例ならずわたらせ給ひし所次第に重らせ給ひ天文十八己酉  
の年三月六日御齡廿四歳にてかくれさせ給ふ未盛りにとへみち給ひぬ御程にてかゝる事有  
へしと思ひよらす御一族も御家人も愁歎やる方もなし扱かくありて詮なければ上下泣き



くも御遺骸を大樹寺にて御葬禮行はる(大樹寺大林寺松應寺等の記によるに此時織田方は岡崎を攻んとす依て今川へ加勢を乞給ふ時節故此君の御逝去を敵方へ聞へん事御家人等憚る故に常々御歸依の法藏寺教翁と相談し御城近き大林寺へ密々送り内葬して能見の原に密葬し其後今川へも其旨注進して大樹寺にて表向御葬禮は行はる慶長十六年能見原の御葬地に一字建立し給ふ是今の松應寺ありと云松應と云は神祖八歳の御時御墓詣し給ひ其地に松を植給ひけるか其松繁榮するにより寺號とせられし之又御忌日を原書六月とす祐天物語とかいふ雜書にも六月とす皆誤る御年譜等皆三月之從ふべし)御法號は瑞雲院殿應政道幹大居士と贈り奉る又慈光院殿とも稱せり(原書よればしめり瑞雲院殿後に慈光院殿と改めらるゝと志るす法藏寺の記慈光院の御内葬の時はじめ法藏寺より進せし御法號にて其後瑞雲院と改めらるゝよし之)慶長十六年にいたり大納言御贈官の時大樹寺殿と贈らせ給ひしとぞ今川義元の御此逝去をきゝ然らば彌兼約を變すべからすとて雪齋和尚を惣大將とて駿遠三の軍勢七千余騎十二手に分て天文十八己酉年十一月朔日駿府を發し五日岡崎よ着して軍議をなす(伊東記)岡崎よてり阿倍大藏定吉木多平八郎忠高久保新八郎忠俊等

今度の我身にかゝりたる事あれは先手に進んとて一番に岡崎衆二番朝比奈三番雪齋擲手の鵜殿岡部三浦葛山北口の飯尾と定め丹下善照寺中邊の寄合組二万余騎松井を大將にて惣押とし六月の早天に押寄たり安祥城の守將織田三郎五郎信廣も城兵に下知して防戦す岡崎方の松平玄蕃松平主殿松平勘四郎同右京亮島居伊賀守天野甚右衛門其外木多酒井石川米津等を先鋒とし安祥に取かけ既に二三の丸を攻破る信廣も流石によく指揮して防く其中に前島傳四郎とて精兵の射手ありしか是が矢に當り死する者多し本多平八郎忠高の眞先かけて勇を震ひしが前嶋が矢に中り惜むべし青年廿二にて討死す(忠高が討死を系圖にり天文八年三月十九日安祥の戦ひとすいぶかじ)榊原藤兵衛も同じ所にて討死せりされども岡崎勢の短兵急に攻つて本丸斗残りければ守將信廣を生取へしといさみたり今年三月三日織田信秀も卒去し今の其子上総介信長家繼も信長安祥の後誥せんと大軍を引つれ尾州を發し鳴海の邊迄出陣せしか安祥方にあたり黒烟り上るを見てはや落城と察し軍をどいめひかへたり其時駿河方の惣大将雪齋はからひ信長の先鋒林佐渡守正成平手中務政秀へ書札を送り安祥既に落城し三郎五郎信廣今の切腹せらるべきを先留置たり其方へ留置れたる竹千代を



此方へ歸されば信廣をも渡し進らす互に入質替すべきのいかゞにとり送る信長大に悦び早速同意ありしかり十一月十日尾州名護屋萬松寺天王坊に留置たる竹千代君をかへしやさんと相従ふ織田方への織田玄蕃允信平同勘解由左衛門信業又信廣を引渡すために付添たる岡崎士の大久保新八郎忠俊同五郎右衛門忠勝同七郎右衛門忠世雙方三州西野等寺にて引かへたり此威に恐れ岡の城に籠りし酒井將監大原左近右衛門今村傳四郎三人も降参す岡崎の御家人のさらへ土民とても竹千代君御歸城を悦びける所に今川義元の竹千代殿幼年の程の義元駿州へ呼取て諸事後見すべしとて竹千代君岡崎へ僅十日斗あつし十一月廿二日に御首途あり駿州へ赴き給ふ此御供に天野三之助平岩七之助阿部善九郎酒井與四郎高力與左衛門阿部新十郎内藤與三兵衛榎原平七郎渥美太郎兵衛植村新六郎從ひ奉る義元の少將の宮町に新館を構へ爰へ迎へ福嶋(大成記に久嶋に作る)土佐守正資を付置て諸事あつかはしむ君今軍の八歳にならせ給ふ是は十九の御歳迄駿府よわたらせける其間の御艱難やもなかくをろかなり

伊東法師が物語に廣忠君御逝去の時御家人評議まろくとなりしに石川伯耆守本多肥後

守天野甚右衛門等の織田方へ一味して早く幼君歸國せしめんといふ石川安藝守酒井雅樂助等の先代の御旨に随ひ今川へ一味せんといへば衆議いまだ一決せず其中に今川はや廣忠君逝去と聞朝比奈備中守岡部次郎兵衛鵜殿長門守を頭とし三百餘騎在番として差越たり岡崎衆は是より是非なく今川に従ふ義元の群臣を集て今竹千代の尾州にあり織田より三河を合せん事疑ふべからず又織田信秀の死て其子信長わつか十六歳なり此折から我出張せんといひて大軍をおこし先安祥を攻落し熱田へ入て竹千代を此方へ引取べしと令せしと見へたり

按るに原書に小豆坂の戦ひを天文十一年八月二日とす大藏記に十一年八月とす十七年と二度として二所に記す然共其戦の有様いかにも同ければ一事を兩事と誤年を隔てしるしたる者と志らる家忠日記大久保が記等にみな十七年三月十九日とす今是に従ふ又家忠日記并落穂集に安祥城賣落を二月十一日にし神祖信廣と入質替に成り廣忠君引つゝき前約を變じ給へす神祖を駿府に送り給ふと志るす原書にも是に同じ然るに御年譜に安祥の城賣を十一月八日と志るす廣忠君逝去の三月六日なれり入質替の逝



去より後ありし事明らかへ又原書よりの人質替の事平手より申來るとあれど伊東并大久保か記にハ雪齋より林平手かたへ申遣ひすとて今是等の説にまたかひ原書を削正す

正校 三河後風土記卷第六終

正校 三河後風土記卷第七

神君御官位次第の事

神祖君御諱は家康贈大納言廣忠卿の御長男天文十一年壬寅十二月廿六日三州岡崎城に於て降誕まします御置名竹千代君御母ハ水野右衛門大夫忠政息女之弘治二年丙辰正月十五日御元服御加冠ハ今川治部大輔義元御理髮ハ義元妹蟹關口刑部少輔義廣つかふまつる二郎三郎元信と名乗給ふ時に十五歳弘治三年丁巳藏人元康と改め給ひ永祿五年壬戌又家康と改め給ふ永祿九年丙寅十二月廿九日從五位下三河守に叙任し給ひ同十一年戊辰正月十一日左京大夫にうつり給ひ(御年譜)同十二年己巳正月三日松平氏を改め徳川と稱せられ(編年)足利將軍義昭内書を進らせ元龜三年辛未正月五日從五位上同十一月侍從よ任し給ひ天正二年甲戌正月五日正五位下同五年丁巳十二月十日從四位下に昇り給ひ同廿九日右近衛權少將に任せられ同八年庚辰正月五日從四位上同十二年癸未十月五日正下の四位に階せられ七日左近衛權中將に轉じ給ひ同十二年甲申二月廿七日參議をかけた從三位に昇階し給ふ同十四年丙戌十月四日權中納言に任せられ十一月五日正三位にうつり給ひ十五年丁亥八月



八日從二位權大納言にわけられ十二月八日左近衛大將をかけて左馬寮御監になり給ひ慶長元年丙申五月八日丙大臣に昇らせられ正二位に叙じ給ひ七年壬寅正月六日從一位よわかり給ふ八年癸卯二月十二日征夷大將軍に補せられ右大臣にうつり同日淳和辨學兩院別當源氏長者午車兵杖宣下あり元和二年丙辰三月十七日太政大臣にならせらる其時勅使の廣橋大納言兼勝三條大納言實條同廿七日駿府城にて鳳詔を拜受し給ひ其四月十七日駿府に於て神さらせ給ふ御壽の七十五（以上御傳の御年譜による）駿州久能山に納め奉りて安國殿一品大相國德運社崇聖道和大居士と贈り奉る此時三州大樹寺にても千部法會行れ本多豊後守康純同總殿助康俊水野隼人正忠清松平和泉守乘壽丹羽勘介氏信等奉行し尾張中將義直卿よりも御追福様く行ゆる元和三年丁巳二月廿一日勅して神靈を東照大現權と崇め給ふ三月九日正一位を御追贈あり其十五日神祇を下野國日光山にうつし奉り是御遺教による所之本多上野介正純土井大炊頭利勝松平右衛門大夫正綱板倉内膳正重昌秋元但馬守泰朝成瀬隼人正成安藤帶刀直次中山備前守信吉柳原大内記照久等供奉し四月四日山に登り同八日神柩を廟塔に納め十四日神靈を假殿にうつし奉る宣命使の中御門宰相定衡奉幣使の清閑寺

宰相共房參向あり正保二年乙酉十二月三日大猷院將軍家の御時にいたり後水尾院より殊更宮號宣下あり是より東照宮といつきまつり奉る此時の勅使の菊亭大納言經季卿よりて此御祝に將軍家より菊亭にの加恩千石つかのされしとぞ  
 接るに流布の本に此時勅使飛鳥井大納言雅宣菊亭大納言經季高倉大納言永慶の三卿へ千石宛御加増下さると記す大は誤りを傳へし之今史局の記録によるに此時の勅使の菊亭一人にて正保二年十一月九日拜謁せられ勅使院宣を聞え上られ其廿五日菊亭に千石加恩賜ひ官務大外記等へも賜物若干あり飛鳥井高倉二人此時參向せされの加恩の事もあしよりて本文改正したり

尾州鹽江城責七本鎗 神君御元服の事

神君八歳の御時御父贈大納言廣忠卿御逝去有しかの直に御家督たるへき所今川治部大輔義元此君御幼稚の間の御所領をば義元預り置へしとて駿府より城代并代官を付置たり（成績基業に岡崎にの石川右近阿倍大藏を城代とし鳥居伊賀守忠吉能見松平二郎右衛門重吉を奉行とすと有）こゝに於て岡崎譜代の衆甚以て迷惑しあから數年をふる程に所々合戦の



度々今川は岡崎衆を先手とすれば名ある岡崎衆郎等迄も過半討死すかくて竹千代君の御  
 行末いかゞ御家人悲歎やる方なし其中に徳川家を離れ駿州に在勤し時におもねり世に  
 媚る者松平和泉守親乗松平内膳正清定酒井將監忠尚同左衛門尉忠次等數おほし(岡崎物  
 語に君駿府御住居の間万事は御不自由之鳥居伊賀守岡崎奉行あり亡故忍びくじに糶米を  
 御藏へ詰置て其後岡崎へ君御馬をよせ給ひし時御手を引て見せ奉り今より後君あまたの武  
 士を扶助し給ひ方々討取給へど君臣共に落涙す此時鳥井の八十余なりとそ)弘治元年乙  
 卯八月三日今川義元尾州織田民部か守る壘江の城を責んとて岡崎衆松平和泉守親乗等を先  
 手とす親乗家人松平久助同新助同隼人(松平記藏人)鈴木佐右衛門今井加兵衛梅村喜八郎等  
 先陣亡中にも川合帶刀の鎧を合せ其弟才兵衛の組討し武井角左衛門三宅覺右衛門大橋新三  
 郎の討死す譜代衆に大久保新八郎忠勝同甚四郎忠員同七郎右衛門忠世同治右衛門忠佐阿  
 部四郎五郎忠政杉浦大八郎五郎吉貞其子八郎五郎勝吉此徒の味方敵に突立られ既に敗軍  
 せんとする所を此七人取て返し敵を突立て遂に城を攻落す尾州壘江七本鎗といひ此七人の事  
 とそ(大成記に治右衛門忠佐を除く杉浦父子三人とす)義元是を聞今に始まる事あから岡

崎の譜代衆武勇拔群なりと感せらる翌弘治二年丙辰に神君十五歳にあらせ給へは御元服  
 有べきなりとて義元みづから加冠せられ理髪は義元妹御關口刑部少輔義廣ぞつかまつる  
 (編年)に吉良上野介義安理髪とす)義元か諱の一字進らせ三郎三郎元信と名乗らせ給ふや  
 がて親永の息女を以て神君の北方にぞ定らる則義元の姪にて後に築山殿とせしめ是に  
 御一族も御家人も大によろこび岡崎より駿府へ参りて是を賀する者道もさりわえず其頃三  
 州に神原兵部丞と稱する者あり其父祖の公家衆ありしか三州よさらへみまかりし人あり  
 其人三州よて設たる子浪人して兵部丞と稱せしが此者馬を好みあまた駿馬を養置たり今  
 度の賀儀とて兵部丞鹿毛といふ駿馬を神君に献す此馬無雙の逸物ありければ義元取次ひて  
 神君より京都將軍義輝卿へ進上し給ふ將軍悦給ふ事大かたからず御自書に名劔一振を  
 へてをくり給ふ其文又いふ

遠路使者差越殊更御馬一匹鹿毛獻之御満足に被三思召御自愛不斜以爲三其方嫁娶  
 之祝儀御太刀一腰(來國光)被下し猶細川右京大夫可申也(此右京大夫の晴元之)

五月十六日

義輝



松平藏人との

駿州石打付大河内孕石の事

是より先神君(天文二十年)御歳御十歳にあらせ給ふ時兼々駿州の風俗に五月五日端午の祝  
 として阿陪川原に土人群聚し雙方に立別れ勝負をす是を印地打といひならしめたり神君御  
 幼稚なれば御附の人肩に負ひ奉りて此石取を御覽じ給ひんとてありしぬ其時左右にわか  
 れし人数一方の三百餘人一方の其半程なりしかば河原に集り見物する者共皆三百餘人の方  
 に行て見物したるに神君の人数少なき方にて御覽有べしと宣ふ何故にかくの宣ふぞと問奉  
 りければ人数多き方の多勢を頼み衆心一致せず進退かみならず亂るべし人数少き方の心一致  
 し力を用る事まさるべし夫故我の人の少き方へ行て見分せんと思ふぞと仰せられ人数の方  
 へありして御見物有しに果して三百餘人のかた多勢を頼み衆心一致せざりしにや大に打負  
 散々又敗走す爰に於て諸人虎の生て其毛斑ならざれども牛を食の氣あり此若君いかなる名  
 將にかあらせ給ひんと舌をふるひて恐れけり今川義元も是を聞れ龍は龍を生ずとて大に  
 感心頼母しく思ひれけるとぞ

案るに印地打の事神君御幼稚より御器量の尤すぐれさせ給ふ事なれば諸書にも多  
 く記したるを原書にの脱漏せり今の大成記により加ふ

また其後のまばく御鷹狩にわたらせ給ひけるに或時孕石主水といふ者の庭へ御鷹の鳥取  
 て落しかば神君其庭へいらせられ御鷹を据あげ給ひしを主水の大に怒り三河の悴めにあき  
 はてたりと罵り此のちも事にふれてまばく悪口せしに神君も怒らせ給ひしにや遙に年を  
 へて後高天神落城の時主水城中又有て生取られしに主水の兼々我にのあきはてたるとやた  
 る者之我に用さき者なれば腹切らせよとて切腹せしめらる又大河内源三郎の常々よくいた  
 りりまいらせたりしが御幼稚の御心にもきりめて奇特なる者と思召れたりしが此者も高天  
 神もありて孕石とあなじく生取とありぬ然るに此者の昔の忠勤を思召出され助命せらるゝ  
 のみならず若干賜物ありて恩澤に浴したりとぞとて駿河にまします間萬事御不自由の  
 とありしかば三州阿古屋にあのしませしける御母君(傳道院殿)より平野久藏竹内久六といふ  
 者をもて御衣服御調度をも送り給ひ又々時々魚物菓子なども進せられ御寓居のつれづれ  
 をもなぐさめ給ひ御外祖母(水野忠政室大河内氏)玄應尼公も尾州より來り給ひてひろかに



今川家の權臣等になげき給ひ御幼稚の間介抱まじくける此尼公の後に華陽院殿と永祿三年五月六日駿府にてうせ給ひける神君御代まろしめして後其御葬地駿府の知源院を殊更造營まじく寺料をまた寄られ今其寺を華陽院といふこれ尼公御慈育をわつく感じ給ひし故なるべし又今川の岡部次郎右衛門正綱も御幼年の間よくいたりまいらせしかば後所領をまた下され御家人に召加へられき

按るに原書に是等の事をしるさす今家忠日記大久保が物語等によりて書加ふ

三州日近城軍付同國福谷砦合戦并神君岡崎御歸城の事

弘治二年丙辰二月廿日に三州日近城主與平久兵衛貞直（久兵衛の與平監物貞勝の弟九八郎貞能にの叔父之原書にも編年にも貞直に作る誤あり今家譜にて改む）を責られんとて神君御一族東條の松平右京亮義春（長親君第四子始の甚太郎といふ其子家忠にて家絶ぬ松平周防守康親東條家の臣にて後に一家を興す）を御名代として馳向ひ其子甚太郎家忠をば東條に残し置其身の二百余兵を引卒して攻取ふ貞直も郭外より討出で終日戦ひ暮しけるが晩に及んで貞直利を失ひて城中に逃入所は義春氣にのつて付入よせんと進んだり然る所に城中

の兵ども門塙櫓々より矢炮を雨のとくに飛せけるか玉一飛來りて義春か胸にあたれば義春馬より眞倒に落て死す大將既に討れしかり軍兵の死骸を肩にかけて東條として引返す義春討死ありしうへに敵勝に乗ずるとわらんかとして三州尾州の界福谷に（一本福具）俄に砦を搦へ酒井左衛門尉忠次渡邊八左衛門正綱大久保五郎右衛門忠勝同治右衛門忠佑阿倍四郎五郎忠政杉浦八郎五郎勝吉大原左近右衛門惟宗寛助太夫正重等が徒として守らしめらる是より先尾州織田備後守信秀の天文十八年三月三日卒去し嫡子上總介信長家繼よりますく兵を強し國を富する計畧を専らとす或時家臣等を集て評しけるに當時岡崎城主徳川藏人の齡もいまだ若年なり殊に其身駿州に有て三州の空虚あり然るに彼家人ども福谷に砦を搦へ軍勢少く籠置よし聞ゆ早く軍勢を差向其砦を責落し勢に乗して岡崎をも乗取らん何の難きと有べきと評定既に決しければ柴田權六郎勝家荒川新八郎頼季を部將とし其勢五百余騎差向（基業千余騎）まづ福谷を攻圍む（家忠記に福谷の正月とし日近を二月とす）城兵僅に百騎に過ざりしかども此者共の度軍功をあらはしたる徒されの少しも騒がず遠き敵をば矢炮を飛し百余人打倒し寄手是に色めき立て四度路も成る所を見濟し木戸を



開き鎗袋を作り突出ける寄手随分と力を盡しけるが魁兵早川藤太は渡邊入右衛門義綱が矢にあたり大久保五郎右衛門に首をとられ柴田勝家の阿倍四郎五郎忠政が矢にあたり深手を負ひしを従者やうくと馬に助のせて退く時大久保忠佐鎗さしのへ其馬の三頭を突勝家わつかに死を連れて逃る又荒川新八郎衆を勵む進み責るといへども杉浦渡邊阿部等の城兵嚴しく防ぎ寄手の兵百四十三討取しかば新八兵を納て尾州へ引返す其由岡崎より駿州へ注進すれば今川義元大に感ぜらる神君に義元へ對し仰けるの某年既に十五にあり漸く初陣の時至れり其上幼稚より御膝元に慈育せられいまだ本國先祖の墳墓にも參詣せず法事追善もいとあまざる願くの一度古郷へ歸り先祖代々の墳墓をも拜し亡父の追善をも致度願くはまばしの御暇を賜り三州へ起度よし宜ひけれの義元聞れ御孝志の深切を感じ尤なるやされ條かあ急ぎ本國に立こえ給ひ先祖の供養追善いとあみ給ふべしと免されければ神君御悅斜ならず急ぎ御歸城有て御先祖代々の御追善ともいとあみ給ひ鳥居伊賀守忠吉等の古老の臣等にも御對面あり(岩淵夜話に神君此時我輩若年なれば二丸に居べし本丸に山田新右衛門を其まゝとしとき給ひ諸事意見をも受やしたしと仰ければ今川義元さてく分別あ

つき生れつきの仁ありとかんせられしよしのせたり山田新右衛門と云ひ其比今川より岡崎へおきし城代(一)伊賀守の我倉庫に軍糧多く貯へ置たり今より良士多く養ひ給ひ威名を四方に振らせ給へとやて老涙袖を濕しけるとぞ(大成記基業)

三州寺部廣瀬率母梅坪伊保軍の事

神君に岡崎へわたらせ給ひし翌弘治三年丁己の春駿府へ歸らせ給ひ御名を元康と改め給ふ是御祖父清康君の英武を慕せ給ひての御事とぞ聞えける(御年譜弘治三年歸岡崎弘治三年往駿州)翌年改元あつて永祿と號す永祿元戊午の春ふたたび義元の許を得給ひ三州へわたらせられしに同國加茂郡寺部城主鈴木日向守重教近頃吉良義昭をかたらひ内々今川家を叛き織田内通とる聞へれば先是を誅伐有べしとて神君御齡十七酒井雅樂助正親石川安藝守清兼を先手として二月十二日寺部の城へ押寄らる重教も郭外に出防戦すといへども岡崎勢の此君御初陣なれば面々氣をとき勇を震て苦戦し岡崎方本多作右衛門重次其弟九藏重立并松平二郎右衛門重吉が弟般若之助重茂名倉總助等討死し能見松平二郎右衛門重吉深手を負といへども寄手あまざる(以上基業成績に志



るす所同じ今是に従ふ原書より日向守利を失ひ城に逃入る神君此一城に限るべからず所々に織田與力の輩多ければ若も後詰する事あらば味方の難義となるべし先其枝葉を斬取て後に其本根を断べしと仰ければ酒井石川等我々戰場より年をふるといへども是迄の所に心付ず然るを若き大將今度御初陣にかゝる遠慮のわたらせ給ふ事誠に希代の名將かなど大に感じ仰に老たがひ夫より直に城外を焼拂ひ軍勢を引揚しとあり参考の爲注文に附す今川義元御初陣の軍功を感ぜられ御舊領のうち山中三百貫の地を返しまいらせ腰刀を授け奉る(基業成績同じ原書に石が瀬軍の時とす誤るに似たり)夫より直に織田家の部將佐久間某が守る廣瀬の城を攻られ大久保忠世の城兵庫田兵庫を討取江原某の神戸甚七を討取急に城を攻んとす其時寺部翠母丹下中島等の諸衆より兵を出し後詰せんと聞えければ石川清兼我君今度御初陣の大勝是よ過たる大慶のいはず早々軍をととのへ引返し給へと諫ければ其旨にまかせ軍勢を整へて歸らせ給ひかさねて板倉が守る翠母梅坪伊保等の城を攻給ふに其軍令指揮妙を古老の御家人等驚歎して感せずといふとなし(大成記)此頃の事にや岡崎の老臣石川安藝守本多彦三郎天野甚右衛門等駿府に赴き元康すてに歸城する上の所領もとのとく

歸し下され今川家より付置る役人を御引取有べし岡崎家老其人質は是迄のとく駿府へ参らすべしと義元へ願ひけりされども義元我近年のうちに尾州へ發向せんと思ふ之其時又境目を正し舊領を引渡すべし夫迄待べしとのみありて時日を送られしかば岡崎老臣どもせん方なく愛憤せり(伊東日記)

按ずるに伊東法師物語に弘治二年丙辰二月上旬岡崎に御歸城有て其十二日梅坪城を責られしを御初陣とし同十七日廣瀬の城を攻城の加勢津田兵庫助を大久保七郎右衛門討取神戸甚七を江原討取御初陣兩度勝軍して駿府へ歸らせ給ふ義元も満足斜ならず打取進らすと有原書に弘治二年より直に岡崎御在城の如く志るせし誤り之此後度駿府より岡崎へわたらせられて直に駿府へ歸らせ給ひ永祿三年より實に御歸城の有し之依て今本文を改む御初陣を弘治二年梅坪とするは伊東の誤と知らるれば原書のまゝ弘治三年寺部を以て御初陣とす御年譜大成記もあなし

尾州石が瀬合戦 科野城軍松平信一夜討の事

神君御母方御叔父水野下野守信元の父右衛門太夫忠政卒去後の織田方に紐し尾州石が瀬を



守らる神君是を攻給ふべしとて軍勢を催され既又御馬を向給ふよし聞えければ水野下野守  
 此由を聞れ藏人の若年にて軍の此頃が始之何程智謀才覚有とも合戦の道に未熟あるべし其  
 上彼の我甥なり然るを城に押寄られ居ながら彼と戦ひぬ余所の聞へも然るべからず打出  
 て勝負を決せんと軍勢を催し石が瀬の城を出て地利を求め陣取れば岡崎勢も押寄たり神君  
 みづから先登に進給ひ士卒を下知し給ふ御有様わたかも神變不思議に見え給へば信元大に  
 驚き是凡人にのわらず今少し年齢長じなれば日本無双の名將と成ぬらん然りといへども寄手  
 の小勢あり何程の事かわらん一めてくみてみんと下知し水野勢三百余騎真しくらに掛入り  
 寄手の中央を破らんとす神君此跡御覽ありて忽に下知を加へ給ひ歩立の徒鎗の穂先を  
 揃へ水野勢の馬の太腹胸掛平願をわたるをさいわいと突立る水野が先手の馬斃れ道を塞け  
 の跡より是に乗掛たる者共悉く馬を馳倒し落る所をおこもたてと討ほどに水野勢大に  
 辟易し四度路にあるを見濟し岡崎勢騎馬の輩うけ立くもみ立ける備荒けたる水野か軍  
 勢立足もなく敗北して討る者七十余人はふく城へ逃入ける此時渡邊半藏守綱衆に抽  
 て高名す(成續)岡崎方度く小勢を以て大軍に切勝たるを見聞して近邊織田家與力の國人と

も大分今川方に心を通る者多くありて尾州智多郡の邊の多半は今川方に屬したり上總介信  
 長の先度石か瀬の合戦に水野下野守が岡崎勢の爲に敗北せしと聞へたりいざや岡崎の一族  
 勘四郎か籠たる科野城を攻落し城兵一と皆殺にして梟首し此懲罰を散せんと軍勢千余騎を  
 さしむけ科野城を稻麻の如く打かこみ向城を嚴しくかまへ夜盡とあく三日三夜攻ければ城  
 兵もこゝを専途と防戦すれば寄手の手負死人百八十余人に及ぶ今此城力攻に陥るべし  
 す少し虎口を退て遠巻してぞゐたりける城中にもかくての糧盡て籠城かあふべしらす岡崎  
 に加勢のとをやつつかいすにも寄手道路を取切たれば如何せんと愁悶せり其三月三日風雨烈  
 しうりしを勘四郎信一は是天の時を得たりと悦び敵陣に一夜討して敵を追ちらすう我々首  
 をとらるる二の間に勝負を決し運の程をも試んと味方合詞相符を定め丑の刻に至り寄  
 手の構置たる向城も忍び寄て火を放ち陣屋を焼立煙の中より三百五十騎の軍勢鯨波を作り  
 おめき叫んで攻入りたり織田方に今夜敵の打出んどの思ひも寄らず帯劍解てゆるく臥たり  
 し事なれり大に狼狽弓よ太刀よとひしめく所を突伏切伏する程に敵味方を分兼て同土討す  
 る者多く終にの柵を越へ堀を渡りて悉く敗走す織田方に竹村孫七郎長方磯田金平貞秋



戸崎平九郎治弘瀧山傳三郎(原書傳藏)以下究竟の士共五十余人枕を並べ討死す信一の難  
なく敵を追散し其旨岡崎(注進すれ)神君甚其勇略を褒美し給ひ今川義元も是を聞信一  
が武功を感ぜらる(家忠日記成績編年科野城を守り織田勢を破りし)松平内膳正清定が子  
監物家次とす但し家忠記の一説に原書に信一と信二とす(是年三月中旬神君岡崎を發し  
駿府へ還らせ給ふ)

信康君御誕生附是の字占の事

斯に吉良上野介義安か先祖を尋るに足利左馬頭義氏より出たり義氏の鎌倉右大將家三代の  
將軍に奉仕し其子上總介長氏始て吉良を稱す長氏の嫡男左衛門尉滿氏其子左京大夫貞義其  
子左兵衛尉俊氏其子三郎左衛門尉義尚其二男左兵衛尉義元其子三郎義堯といふ義堯に男子  
三人あり嫡子の義卿二男の義安三男の義昭といへり(大系圖并寛永系圖)二男義安の東條  
持廣に男子あり故に養子となりて其家を繼げる所に兄義卿是より先今川家を叛き織田に屬  
しければ義元に攻られて討死せり其時義安も織田方よて今川勢に攻られ降参しければ駿州  
駿田に押籠られ盤居す其弟左兵衛督義昭の始より今川方にて忠戦しければ義元より東條西

條どもに兼領せしめらる仍て義昭の西尾の城に住し東條をは番手替りに守らせけるが此  
義昭いかいしたりけん近頃織田信長にかたられ今川方を叛き其身の俄に東條に移り西尾  
の城に牛久保の牧野新次郎成光を呼入て岡崎を乗取んと日夜旦暮に謀をめぐらしける  
に其頃上野城を酒井將監忠尚守りけるか先此城を攻めとれと義昭隨一の家の子富永半五郎  
忠元を將として瀬戸彌三郎河上兵衛太夫大河内右馬允以下數百騎差向んとせし所城 中興  
議出來てしばらく延引せし程に年も暮ぬ明れば永祿二年己未三月御臺所駿州にて御安産  
若君誕生まじける御悅大方ならず竹千代君と名付給ふ後に岡崎二郎三郎信康君とや奉  
りし此君の御事なり岡崎御一族も御家人も一同に歡ぶと限りなし其中に阿部大藏定吉一  
人眉を擡て愁情面にあらわれければ人々怪て其故を問ふ大藏答へけるの今度御物領の  
若君誕生の事我いかて悦ばざるべきまかじ我心にかゝる一條ありて此若君御身の上行未  
かにも思ひ煩ふ之其故の弘治二年我君駿州より始て岡崎へわたらせ給ひつる翌晩の御夢に  
たどへば大内の南殿と覺えき所又我君一人まじける其所へいつちどもなく神童二人忽  
然と來り御側近くよりて如何に徳川殿御邊に天下代々の寶物を參らせんと袖より出すを



見給へば是といふ字之君左の御手にて其文字を請取給ふ其時三童子のよく握り給ふべし開く事大事なるそと示して立歸らんとす君かく教へ給ふ御身の誰人にわたらせ給ふると問せ給へば二童子我々の是日天子月天子なりと答へて其まゝ東をさして飛立給ふかど見給へば御夢の忽にさめ給ふ君の曉早く起上り給ひ御夢判じ参らせべき博士やある召連來るべしと仰ける其頃三州佐崎に阿部兵部丞泰茂といへる者京都より來り寓居せしが此者卜筮の妙を得て掌をささか如しと聞ゆれば大藏やがて泰茂を伴て御前に参る君この御夢を委細よかたらせ給ひ判断を問せらる泰茂まばらく思案して誠に目山度御事之御一生の中に必ず天下の主とならせ給ふべき御靈夢にては其故の是といふ文字を分れり日下人の三字と成る日下の人を掌に握らせ給ふの天下の主の外有べからず又其所の大内と御覽ありしも目出たしかならず天下大將軍の宣旨を蒙らせ給ひん吉瑞ありまた告給ふ神童の日天月天之日天の陽なり火なり天なり月天の陰なり水なり地なり天下天地ありたし能握り給へ開くと大事ありと示し給ふ所に深き御慎みあるべき儀あり君の御生年を承るに天文十一年壬寅の御誕生といへり寅より指を屈して十二支をばりるに寅卯辰巳午といふまで指を屈し握

れり御子多くいとも自然と此次第を以て御家督とあらせ給ひり五代の天下安泰あらん未といふより指を開けり未の年の君の御代の尤も重き御慎み有へしとの御告あり午未の御二代よく御慎みあらば申酉戌亥子丑と代り天下の守護職にあらせ給ふべき御瑞夢疑ひなし代り御子孫十二支の順に次第に御繁昌有べきとを日天月天の告させ給ふ所之と占ひたり然るに今度御誕生の若君の卯辰巳午をこへて未の御年なり然れば此後御家督を繼せ給ひん事覺束あしと苦勞に思ひるゝと語りけるはたして此若君英武にすぐれさせ給ひければ後不慮の御災難にて織田信長のために世を早くし給ひ御次男秀康卿も御家を繼せ給ひす天正七年己卯御誕生ありし御三男(台徳公御事)御家督とあらせ給ひしも不思議の事と後にぞ人と思ひあひせける

按るに三州滿珠山龍海院の記に享祿三庚寅年正月元旦の曉清康君左の御手の掌よ是字を握り給ふと夢見給ひ大澤龍海院の住僧撰外惟俊和尙に問せらる撰外答けるは是の字の日下の人といふ字なり天下を掌握に歸せられんと君の御身にあらざるべし御子孫に有らんと占ひけり清康君大に悦給ひ別に當寺を御建立あつて後に酒井家の菩提



所たらしめらるよし見べたり諸書に載る所も大畧皆同じ原書お此御夢を神君の御夢とし又是を占たる者を安部恭茂とせるものなし阿倍大瀧記臆の誤りなるか又作者の杜撰あるかいづれにも龍海院の説によるべき者也

織田信長籠二兵于諸城の事

今川治部大輔義元の敗世の勇威を震ひ駿遠三の三ヶ國を押領し國富兵強ければ彌權勢超過し雄威關東に輝かす仍て日々月々に驕奢増長し武備怠慢し其子上總介氏眞も歌連歌香蹴鞠茶湯等の風流遊興にのみ長じけるほどに一族家人までも軍慮のはげみたゆみけるころなげかはしけれこゝに又織田上總介信長は亡父信秀の策囊を繼ぎ益國を廣くし兵を勵まし天下の旗を立んの大志あれば先伊勢美濃近江等を切あひけ終に今川を討亡駿遠三まで押領せんと朝夕軍謀密策に心をあやましける義元かくと聞さらば其信長を討亡し京都に旗を立天下を一統せんと思ひ立兼て鳴海笠寺等の城々への軍勢を籠置ぬ其身もやがて大軍を引卒し尾州へ發向せんとぞ催たり信長も又是をき、鳴海近邊敗ケ所に砦を構へ先丹下城(原書丹家)に水野帶力忠廣山口海老原廣憲(成績守孝)柘植玄蕃允友顯二百四十三騎善照

寺の砦に佐久間右衛門信盛并に第左京亮親盛四百五十騎中島の砦に梶川平右衛門重實(成績正繼)津田右近助長繁二百五十騎九根城に佐久間大學季盛(成績盛重)山田藤九郎秀親百五十騎鷺津城に飯尾近江守致公(成績定宗)弟隱岐守致衡(成績子信宗)織田玄蕃允信平五百二十騎智多郡中村の山口左馬助弘家鳴海城に其子九郎二郎弘高に守らせける山口父子の織田方を抜き今川家へ内通し大高沓掛の守將をも誘引し今川方へ降参す仍て義元は鳴海に岡部五郎兵衛長教を籠め智多郡大高城愛智郡沓掛城に鵜殿長助長持を籠め笠寺城に葛山備中守勝吉(成績播磨守)三浦左馬助義就飯尾豊前守致實淺井小四郎政敏等を籠め尾州の押とす然るに大高城の敵地に狹まれ兵糧乏しければいかにして兵糧を運送すべきやと義元大に愁悶す

大高城兵糧入の事

大高城兵糧乏しれば唯今の跡にて此職吏に抱へんとかあふべからずと駿府に急を告ぐる事願なり今川義元諸老臣を集め今味方の中に大高へ兵糧を故なく納んする者あるべきかもしも小荷駄を運落されなば味方の大害となり然りとて糧米を送らされば大高城持抱ふべか



らず徳川藏人こそ若年といへども智慮凡人ならず其上所屬の徒老練武功の輩多し彼人を頼み糧米を大高へ送らんと思ふにいかにも有けるに今川家の者共己々が身に難義を引受ん事をいとへば何も仰尤然るべしと返答す仍て五月十五日夜に入て(一説四月とす編年の五月之)義元の神君を招て其由かたらのれければ神君仰けるは是程多き宿將剛兵の輩みなくかちひ難しと辭退する一大事の兵糧入を弱年のそれがしならでかならずとの仰承るこそ面目され是にも限らず此後とても人々かちひ難しとゆさん事をばそれがし若年役に幾度も相勤すべしと英氣鋭く宣ひて座を立給ふ今川家の者共是を見て元康乳臭の少年にて只今の大言身の分限に過たりと誹る者多し其中に義元諸將勇士を召集め大高兵糧入の事種々評議し給ふ所に彼城の敵地の間に狭まれ其上織田信長も近日出馬有よし聞て老将等孰も此事かならずとて御請する者一人もあき中に元康少も辭退の氣色なく唯今の口上尤いささよく英氣鋭く聞へたり此人かちらず兵糧無難に運納すべし天晴器量ある少年侮り難しと評する者も有どかやかくて神君御館に歸り給ひ鳥居四郎左衛門忠廣石川十郎左衛門知綱内藤甚五左衛門義教杉浦藤次郎時勝内藤四郎左衛門正成(内藤兩人其業による)を召て仰けるは義

元よりそれがしを呼て大高城兵糧入ん事を頼れたり彼大高といふ敵の間に狭まれたれば兵糧入ん事尤大事之汝等急ぎ彼所へ馳行敵の形勢地形の難易道程廣狭よく見定て來るべしと仰られ此輩畏りて馳行其跡に杉浦八郎五郎勝吉御前に參れば是に早く見て歸り來るべしとてつかいさる鳥居石川等(其業に内藤二人とす)やがて馳歸りしけるは信長の勢多く道筋に陣取たればも兵糧を入んとせば必小荷駄を追落され味方甚難進すべしと申所へ杉浦勝吉馳歸り大高に兵糧入ん事子細有べからずと申上る神君聞召汝何を見定めかくの申すと仰らる杉浦答けるは信長の軍勢敵の旗を見たとへ山上に備たりとも山より麓に引下し敵を待べき之然るに山上に陣を引上る様子を見るに戰を待たる敵にあらざる幸に道路も廣ければ小荷駄を中央に引付て軍勢前後左右より取かこみ段々に押通らん子細有べからずと申せば神君汝が申所尤なりと仰られ先寺部梅坪の兩城へ人數を遣はされ城邊の民屋を燒立て給へば鷲津丸根の兩城の番兵共寺部梅坪の兩城敵攻落さると思ひ是を救はんと人數を押し出す(其業)神君の兼て小荷駄備立を下知し給ひ先軍勢を三ツに分て一備を四民の正陣の如くに三段に備させ本陣たるべき所に兵糧付たる小荷駄を立て



其備立五の目に似たり一備の其間半町を隔て遊兵を置き五十騎を一手として弓銃炮を組合せ左右前後に立らる敵横合より討てかゝらば右の一手を以て彼敵をおさへ次の一手の横合より入べし遊兵前後の軍兵等の合戦に少しもかまはず小荷駄を守護して左の前後二手を随へ打通るべし敵なを小荷駄をしたらん左の手より救て敵を討て右の手に入替り此間に右の手は又遊兵も随て小荷駄を守り通るべし左の方より横入するも又先のとくに取て前後左右の軍勢たがい心を示し合せ助合て取ふべしと明細に教諭し給ひ小荷駄に兵糧を負かせ大高へぞ遣りさる

大高兵糧入の圖



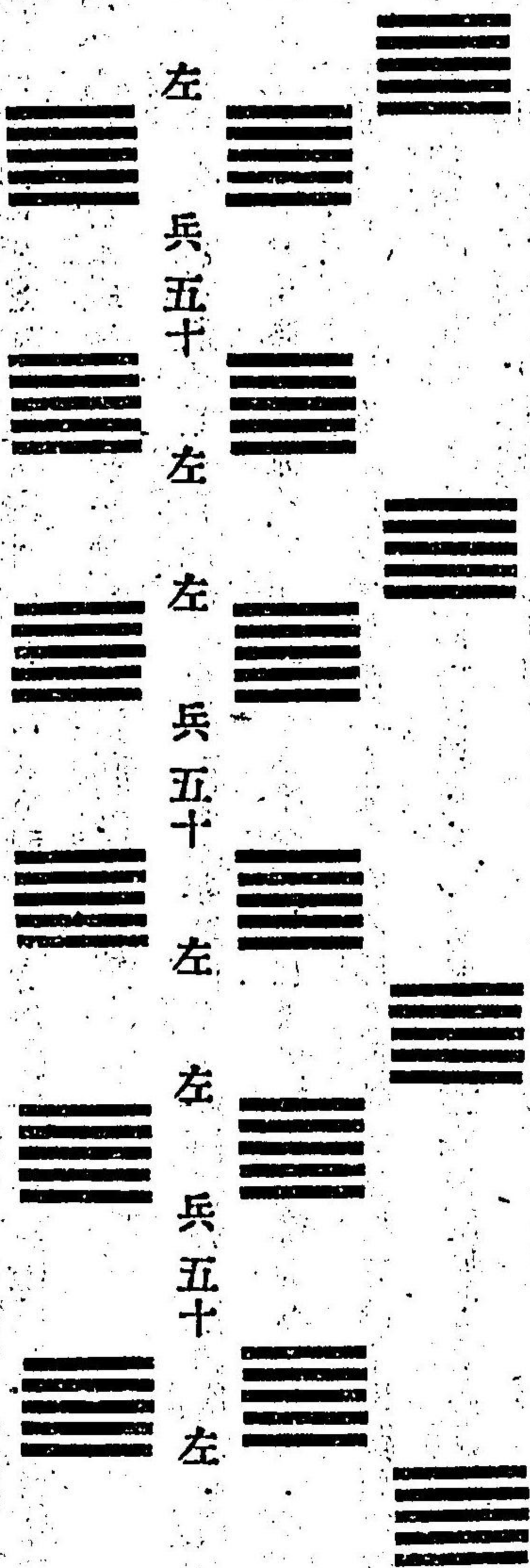
大將平岩七之助

大將榊原七郎右衛門

大將酒井雅樂助

大將平八

遊 百五十此間半町○小荷駄 軍 遊 百半町○小荷駄 軍 遊 百半町○小荷駄 軍 遊 百五十



以上三段の備にて人数都合八百人三所の小荷駄百五十疋米四百五十俵一駄に三俵付馬一疋に口付二八づ、都合口付三百人物人数千百人敵の寺部梅坪の放火に氣を奪われ周章狼狽其



ひまに難なく兵糧を大高へ納たり敵も味方も是を見て嗚呼名譽の兵糧入やと感ぜし聲の  
志はし止ざりけりかくて神君兵を返し給へば信長も尾州へ引返す義元も是れを聞れ大に感  
ぜらる神君此時十八歳にあらせられしが是そ軍略の御始にて今の世迄も大高兵糧入と傳  
ふる此時の事とす此後も義元の下知により神君の寺部梅坪廣瀬等の城々を攻られ岡崎へ  
かへらせ給ひ又駿府へむかせ給ふ(伊東物語成績基業)

按るに大高兵糧入と一宮後結との神君御若年の時第一の御名譽と世に傳ふる所之然る  
に原書にの寺部梅坪放火の事を志るさず今諸書により本文に書川へたり爰又武家閑談  
に載る所尤詳なれば今爰に附録して参考に備ふ其説信長は寺部學母廣瀬の三城へ  
兵を籠めて今川方よりも大高へ兵糧を納んとせば鷺津丸根兩城と示し合せ大高へ兵  
を出し遮り留んの計略あり此事神君の早く察し給ひ先鷺津丸根兩城を捨て酒井石川等  
をして寺部城邊を放火し城を攻るの跡を示し其ひまに大高へ兵糧を納給ひしなり此時  
信長方の寺部を援けに赴し故此ひまに難なく糧を運び濟せしなり伊東法印物語も大  
同小異之編年にの寺部を鷺津とす又案るに此兵糧入御年譜等の正史に永祿二年五月と

す義元桶狭間敗死の翌永祿三年庚申の五月なり共に五月の事故に原書に混して一年の  
事とす今改正して兩年に別てり

今川義元尾州發向 鷺津丸根落城の事

永祿二年も暮て三年庚申にうつりぬ今川義元の軍備既に整ひければ駿遠三の大軍四万余を  
引卒し五月十日駿府を出馬し先鷺津丸根の兩城を攻落せと軍令を下し義元藤枝に着陣あ  
れは先手の嶋田大井川を打越へ佐夜中山日坂に陣を取る十三日に池田の原にて諸勢を揃  
へ本坂今切兩手に分て押行十五日に義元既に岡崎へ着陣あり丸根の城より守將佐久間大  
學是をき急ぎ信長へ注進すれば信長も速に軍勢を催し出馬せんとのる所に家臣等諫め  
けるは今川方若干の大軍と聞ゆ味方わづかの勢を以て平陽の合戦然るべからずたゞ要害に  
引籠り敵を待て防戦然るべしと様々にすといへども信長更に聞入らず直に出馬の用意専ら  
去る程に十七日に義元池鯉鮒に押寄せ桶狭間より着陣あり十九日に義元先陣朝比奈備中  
守泰能井伊信濃守直盛に鷺津の城を攻む城の守將飯尾近江守并弟隱岐守織田之蕃允等四  
方を下知し弓鉄炮雨霰のごとく射出し打出し防戦すといへども奇手の大軍新手を入替て息



麗永謂貞幸書  
上家忠記附補  
等丸根若城十  
八日とす又丸  
根實謂貞書梓  
山又房山とあ  
り蓋同一地異  
者か

をも繼せず責立しかば守將飯尾近江守はじめ城兵多半討死し残る徒のひそかに城を逃て  
散々に落失たり又丸根の城に神君むかひせ給ふ此時神君は御下知有て松平又七郎家廣松  
平彌左衛門松平又八郎伊忠を正兵と定め松平勘解由左衛門康定に松平玄蕃清吉松平信一を  
添て遊兵とし酒井忠次同重忠石川數正等を御旗本守護とせられ石川家成酒井忠次に軍令を  
司とらせすてに丸根の城にのみ給ひ城兵の小勢之寄手は大勢之城兵かたく城を守りて防  
戦すべきを城兵只今切て山んとする有様の必死の一戦を心掛ると見ゆるぞ味方みだりに戦  
ふへからず弓砲をもつて挑戦し透間を見て城を乗取れと下知し給ふ(成續)城の守將佐久間  
大學勇氣たゆまず矢砲を飛せきびしく防戦すれば眞先に進んだる寄手大草松平善四郎正親  
(編年父善兵衛三光につくる)松平莊右衛門重利高力新九郎重正寛又藏正則等討死す神君の  
時至れり掛けや進めやと采配ふつて下知し給へば忠を拙んで勇を勵む岡崎勢討るれども  
子の願みず主討れても其死骸を乗越く攻取ふ其中にも高力清長與平九八郎貞能高名と城  
將佐久間大學を討取惣軍進んで旗を城上へをし立賢掃部民信先登すされば今川方の鷲津丸  
根兩城難く攻落し佐久間飯尾をも討取勇氣十倍して勝誇りかくて信長を討取事日を経

へからずと悦びける又義元鶴殿長助長持久しく大高城に籠り苦勞せしを憐み大高の敵地に  
近く大事の所なればとて長助を呼歸し神君に大高を守らせ不日は尾州を手よ入て近江に發  
向し佐々木を攻めし京都に旗をたて天下を掌握せんと義元驕逸限なく陣中酒宴を催しける  
伊東法師物語に神君丸根に向ひ給し十九日未明に城兵も路迄出張しけれしかば  
る奴原に味方討せてかなふまじと矢軍にて打散し直に城に入て御旗を立てる其後己刻  
に遠江衆東三河衆にて鷲津をば攻取りたり義元も神君を摩利支天の乗移らせ給ひしと  
賞美せられしとあり原書丸根城攻尤杜撰あり今大成記によりて改正し又参考のため此  
説を附す

信長田陣并熱田社願書の事

織田信長の鷲津丸根落城の事を鳴海表にて聞かれ彌軍勢を急んと令せしむ林佐渡守今川  
勢の勝を乘す當國の切所に待請て合戦然るべしと諫れ共信長聞入すいうさ立れける(伊東  
物語にいふ十九日未明に信長清洲を打立れしが神君大高へ御入城有と聞て岡崎殿さへ引は  
なれまの義元の討安しとすこれしとぞ其先陣の織田造酒允信房山室長門守貞孝長谷川橋之



助好秀佐橋藤八兵衛與世山口飛騨守弘縣加藤采女正教正同彌次郎教明河尻右馬允鎮祐同與  
 兵衛鎮吉鏡田出羽守政綱佐内藏助成政池田勝三郎信輝織田大隅守信廣織田四郎次郎信實  
 等之(原書佐々木承禎より加勢の事を記す妄説ゆへ削去る)信長既に熱田旗屋口に至る頃退  
 馳來る軍勢一千余騎後陣に備ふ信長の熱田大明神の社に參詣再拜して後士卒に向ひ只今  
 内陣にて物具の普しつるを汝等聞つるやと問れたり近習伺候の輩皆く承りぬとヤ  
 信長また神前を再拜し我丹精まのあたり神慮に叶ひ只今の奇瑞不思議なりとて武井肥後入  
 道夕巷を召出し一通の願書を老たぬ神前に於てよみ上しむ其文にいふ

敬白所願之事

夫以當社大明神者累代聖主義祖朝廷鎮護靈神也為守三家國元永久殊為定三夷狄之  
 凶徒一垂迹於東海邊城一安置八劍於社壇然則當於人王百有七代御宇一世既及二親瀧一  
 瑞鳳不至祥麟不出人心不淳姦邪並生四夷舉兵革八荒動干戈一更不聞有二理世  
 安民之政一矣信長苟為平相國綿々瓜瓞一生於弓馬之家一僅繼三笑裘之業一以來遠悔二先  
 祖之無道一近愛二叔世之極亂一再欲與二帝都表微一治三國家之後亂一救二君於堯舜一救二民

於塗炭之外一素懷非他矣而一日片時不置二心於泰山之安一造次於三是顛沛於四是于茲  
 源義元起三駿豆之間一振三威遠三之兩國一犯三近里遠境一破三却神社一燒散三民屋一任三我  
 意而不三敬三敵慮三不用三武命三妖孽月盛也日茂也萬萬相連無三奈三之何一者也兩葉不  
 去却而用三斧柯一今既如此而猶至三於強大平彼多勢及三四方有余一此無勢僅三三不三足  
 矣以三寡對三衆一恰似三蟻三蠅三車三轍三同三蚊三子三咬三鍊三牛一敢非三賴三當三社三神三力  
 爭得三勝三之平傳聞尊日本武古亡三東夷於蒲原一也嘉兆如三合三符契三速三誅三戮三凶徒一於  
 日擊之間三必三矣三仰三冀三水火三兩三右三隨三宜三施三靈三職一八劍之銳三刃三斬三元賊之首一立  
 處滿三所願一伏捧三一矢之鏑一以准三西三麟之輪祭三嶺三藥之尊一者也今此舉三義兵一全非三私  
 利私慾一而為三下起三王道之衰一救三民之危一也立鑑莫三誤三仍三願三書三如三件

永祿三年五月十九日 平信長敬白

熱田大明神 寶前

と高らかに讀上て其願文をば鏑矢に卷て寶前に納め信長の社檀を下り馬に打乘進まる所  
 に白鷺一双社頭より飛來り信長の旗に先立飛行けれ信長の二度馬より下り神前に向ひ再



拜せられ軍勢にむかひ面も見聞かなく先刻内陣にして武具の音さめき今又白鷺一雙我  
 旗先立て飛行躰彼といひ是といひ神威の程わらへれ奇瑞一方ならず全く熱田大明神擁護  
 の御手を垂給ふと疑なし誰か勇氣を屬さるべきたとへ敵の何十万騎あるにもせよ八万四  
 千の軍神味方に加勢し給へば今度の軍勝利ならずといふことあらずめや者共とてみづから  
 勇み進まるれば今朝迄も此軍いかゝ有んかど危ぶみし者共も社壇の奇瑞只今の靈驗其上大  
 將の教諭に夢の覺しとく心中すしく勇み立仰にや及ぶべき義元が武威何程の事かあらん  
 只一刃の勝負にありと勇氣百倍せしとぞ後に聞に信長あらかじめ熱田の大宮司をかたらひ  
 内陣に武具と人を隠し備信長軍士を引つれ參詣せらるゝ時物の具の音神殿鳴動が如くひび  
 かし又鷲の飛行するを神威の致す所とて諸軍勢に勇氣をばけまじたる計器凡人あらずと其  
 頃世上に沙汰せしとぞかしかるがら明神ましまさず信長もいかでか此方術を施すべき人  
 の神によりて運を添るのとへりと思ひおられかこけれ

桶狭間合戦 今川義元討死の事

信長既に旗をすゝめられしが折ふと濱手へ湖滿て人馬通行安からずとて笠寺の東ある細道

をめぐり善照寺の東にあたりける山の麓にて勢揃し五千余騎を二手に分て押すゝむ信長方  
 先登に進たる佐々隼人助正通千秋四郎太夫(成續新四郎)真文山室長門守の信長の窠の紋の  
 旗真先に立て進みたる所よ今川方の物見役石川六左衛門待讀で戦ひ佐々千秋山室を討取是  
 をもつて桶狭間の本陣へ持参し義元の寶槍に備ふ義元の今朝熱津丸根の兩城を攻落し今  
 又敵の先手三將の首を見て軍神の血祭より我鋒先に天魔破旬もたまるまし唄へや舞へや  
 と酒興に乗じ更に敵の備を設けす信長の先手三人が討死を聞て彌鞭を揚て急がるゝ所池  
 田勝三郎信輝林佐渡守秀就(成續道勝)毛利新助秀詮柴田柁六郎勝家等信長の轡をひかへ敵  
 の目に餘る大軍殊に今朝熱津丸根の兩城を賣落し今又味方の先手三人を討取敵の大勢の  
 勝に乗じ味方の小勢の氣を失ふ此儘戦ふとも利有べからず只要害に引籠り敵の不意を計り  
 て伐にむく事あしと異口同音に諫言す信長聞れ我所存の今宵忍て義元の本陣の山の後へ廻  
 り不意に軍を仕掛んと思ふに其故如何といふに敵の今朝熱津丸根の城賣に疲勞し又晩景に  
 の漸山際よて苦戦し只今又雨降來れり夜討を用心して夜も安隱に眠るべからずして心神  
 共に疲るべし其上度々の軍に勝て大將驕り士卒怠り敵を恐るゝ心きく油斷するの必定之軍



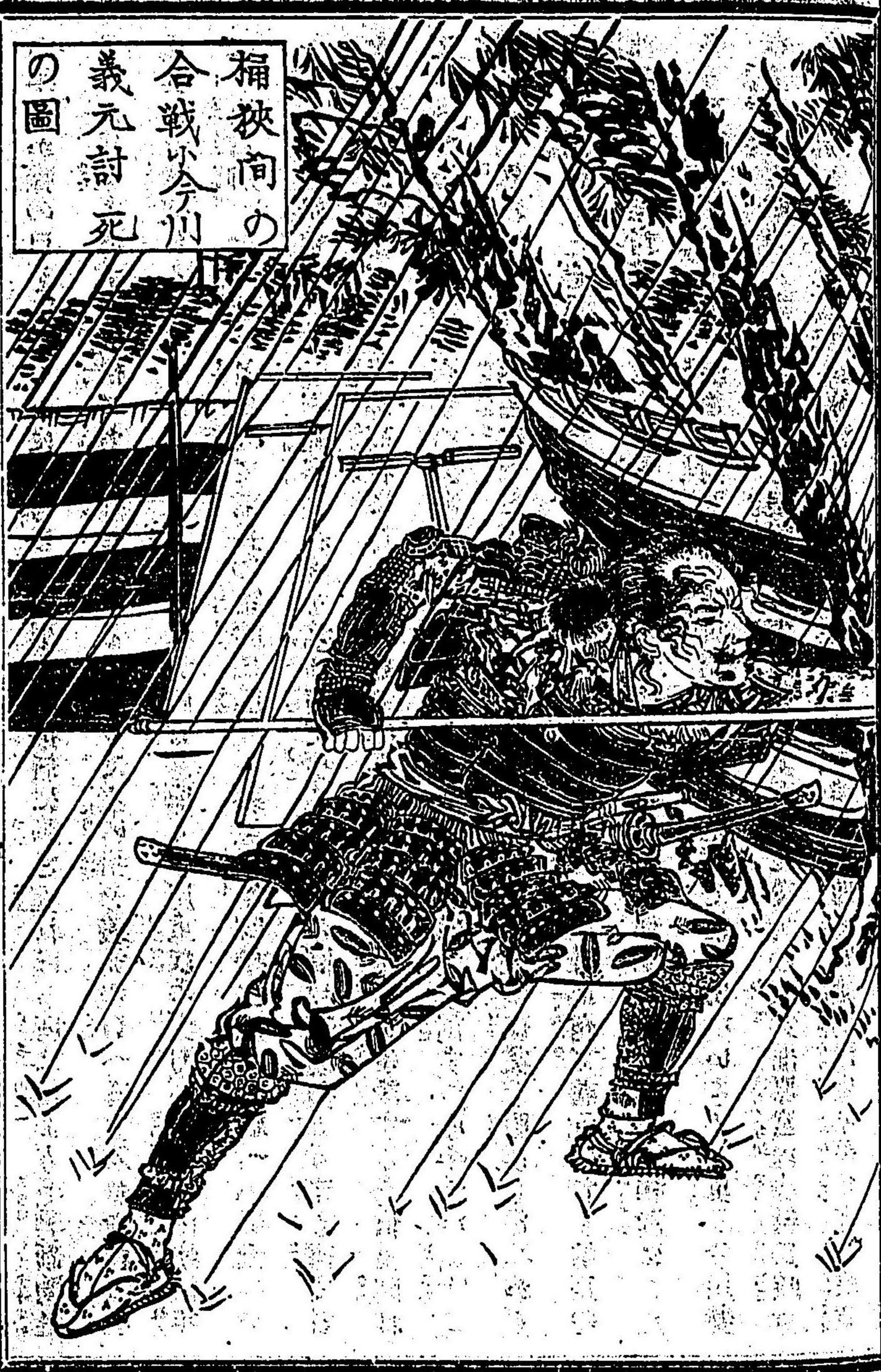
略の敵の不意を討にあむ進めくと下知あれば篠田出羽守政綱仰御尤も只急かせ給へ  
 といひて(伊東物語)旗を絞り腰符をおし藏し馬の轡を紙にて卷馬の舌根を結び嘶さる様  
 に用意しひそかき桶狭間の山の後へ押廻す道の程にて夏の夜はや明しかども猶兵を山に  
 隠し敵の不意をぞ伺ける翌廿日の昨夜よりの大雨車軸を流しけるに今川方に義元を始  
 とし諸軍勢昨夜の酒宴に前後も知らず酔臥たる所へ信長の旗本より前田又右衛門利家(幼  
 名犬)援應して首級を得たり其外木下雅助嘉季中川金右衛門秀胤毛利河内守秀頼同新助秀  
 詮佐久間與五郎致實等思ひくんに馳付て首取信長の實檢に入れば信長悦斜ならず早馬  
 を進ませて敵の屯したる山の腰より押廻せと下知せらる篠田出羽守仰御尤にては敵の昨日  
 鷲津丸根兩城を責落ししまた陣取を改めず此道筋を押寄ばあらず敵の後に出て大將を討  
 取事を得べし只急かせ給へと進るに信長益悦んで彌馬を進らる義元の桶狭間田樂が  
 坪といふ所に陣取昨夜よりの沈醉に起るあからず大雨の降り敵只今此所へ逆寄せんと思  
 ひもよらざるに信長の先陣織田造酒之亮信房林佐渡守秀就毛利新助秀詮森三左衛門可成中  
 條小一郎信忠遠山甚太郎秋忠河内守秋季策田出羽守政綱等一手にかり鎧をふるつて馳向

ふ森可成がゆけるの敵の若干の大勢之味方の小勢歩立に成て押寄ば今川勢備を散ふくべし  
 味方の内馬強からん若武者達敵陣を懸破り敵の周章騒ん透をはかり大將を撰み討に討取  
 べし大將とだに討取ならば敵勢たどへ何千万騎有共敗北せよといふとあるべからずとやに  
 ぞ信長を始として是尤と下知われ先登の驍士百餘騎義元の帷幕近く馳付て各馬より  
 下り立ちめきさげんで敵を突伏せ責入て東西に破り南北にくだき須臾に變化し八方にわた  
 れば今川勢の義元を始とし味方の四万五千餘騎織田方の五千に過ぎる小勢あれば信長たど  
 ひ心の猛しきもよも是迄押寄ると有べからずと思ふ所義元の旗本へ無二無三に討てかゝれ  
 ば弓取者の矢を知らず鎧の着れ共鎧もかけず兜を取て着人も忍の緒を縮る暇なければ其  
 儘にて前後不覺に周章と思ひくんに取て大將の在所も知らず折節雨の篠を突が如く黒雲  
 覆ひかゝり闇さの暗し暴風烈しく今川勢に吹向て顔面を打眼に入れれば咫尺も分たず信  
 長誠天の時を得たりと云べし義元漸く起上り床机に腰掛狼狽する士卒を下知して居たる  
 所に信長の家人服部小平太忠次の走りより是ぞ大將軍と見れば大身の鎧をもつて義元の  
 膝頭を突たるに義元太刀引ぬき小平太が背負の鎧の柄を太刀打より切折あから走り掛りて





桶狭間の合戦、今川義元討死の圖





小平太か膝の口をした、かに刺付られ小平太の後居に動と斃れける所に傍より毛利新助透さすかけ來り義元を突伏て首を搦んとする時誤りて左の指を義元の口へさし入れたれば義元其指を喰切らるされども新助兎角して義元の首を取り今川重代の太刀（落穂集山蛭編年）に松倉卿を分取し首に添て信長の實檢に備たり義元今年四拾二歳之其處へ小平太もやうく來り最前某義元を給付たれども痛手負て少し猶豫する間に新助後より走り寄て首を取りさふら得ども某か高名にさふらふとて小平太と新助が前後を爭論するを信長聞れていふやう小平太か給付すの新助首取る事かあまじ新助が義元を討すの小平太の忽よ討るべし然れば相討の高名なりとて二人共に感状をば授けず常座の褒美を賜ひしとこかくて義元討れしとを敵味方いまた知らず猶入亂て戦ひしに林佐渡守心付て義元の首を信長の旗の蟬木に結付高くさし上大音聲にて敵の大將今川義元を服部小平太毛利新助相討にしたるる殘る駿州勢二人も泄さず討取れと呼叫たれば是を見聞て信長勢いよく勇み今川勢の力を落し四角八方に逃走るを追討する事數知らず其中に義元の叔父蒲原宮内少輔氏政并義元の甥久野半内氏忠同妹登淺井小四郎政敏旗頭三浦左馬助義就旗奉行庵原美作守元政軍奉行吉田武藏守氏好後軍の旗奉行葛山播磨守長嘉同乾安房守元清義元の一族に江尾民部少輔親良給奉行伊豆權頭元利左衛門の部將岡部甲斐守長定前備の部將藤枝伊賀守氏秋先陣の部將朝比奈主計助秀詮此外齋藤掃部助利澄庵原右近忠春同將監忠縁同彦二郎忠良半禮主水正春卿西郷内藏介俊雄富塚修理亮元繁松平攝津守維信富永伯耆守氏繁四宮右衛門佑光匡松平兵部少輔親將温井内藏助實雅松平治右衛門信輔由比美作守正信石川新右衛門康盛關口越中守親將井伊信濃守直盛嶋田左京進將近飯尾豐前守顯茲澤田長門守忠頼岡崎十兵衛忠實上和田雲平光範金井主馬介忠宗平山十之丞爲行息長瀬吉兵衛長行平川左兵衛秋弘福平主税助忠重以下隨一の勇士五百八十三人義元の討死と聞て其場を去らず枕を並べ討死す今川の同朋權阿彌（伊丹系譜に虎康今川同朋にて權阿彌と稱す義元討死の時下方九郎右衛門を以て信長に見へ今川方にて討死せし諸士の姓名詳に答ふ信長褒美よ刀を下されて駿府に歸さる氏眞の世に剃髮して權太夫と改め後に大隅守と稱す天正十年七月御家人よかへらる原書并伊東物語林阿彌に作るの誤り）を下方九郎右衛門春親生捕て信長の前へ引來る信長大に悦ばれ今日討取首共を彼に見せらる權阿彌懷中より帳面取出し其姓名を首に引合

後風土記卷第七



せて銘に書付て出しければ信長大に感ぜられ一命を助て駿府へ送り返されたり是より先山口左馬助并九郎二郎二人の信長の方ありしが義元へ降参するのみならず大高沓掛兩城迄手引して義元へ忠勤せしを義元いさかしの怒りによりて山口父子を誅せし餘り非道の事之行未いかにも思ひしに果して不慮の討死の至く天の不仁を罰せられしあらんと世人専ら評したり信長の思ひの儘に大勝して討取首共實騷有しに都合三千九百七級(大成記家忠日記二千五百餘級とす)凱歌を唱へて歸陣せらる今川方大軍なれども大將を討れ茫然とてあきれ迷ひ吊軍せん心も付ず瀬名駿河次郎親範朝比奈備中守泰能同小三郎泰秀三浦右衛門佐義忠等の池鯉鮒沓掛等の城を守り居たるが一戦にも及ばず城を捨て駿州へ逃歸る信長わづかに五千の勢を以て四万五千の今川勢を切崩し大將義元を始め名ある侍大將數百大討取事古今に稀ある名譽の大勝桶狭間の合戦とて後世迄もかくれなし

神君大高城御退去の事

神君の今川義元の命により大高の城に入て鴨殿長助に替り守り給ひて義元討死の事をいまだ老ろしめさず然るに廿日黄昏に及び義元の討死し沓掛池鯉鮒笠寺等の城々を守る所の

駿州勢の將卒とも皆逃去りしよし風説聞へければ(伊東物語)御家人等大に驚き此事もし實ちらば信長勝も乗じ諸城の人數引まどひ當城へ取掛んの必定なとどひ手強く防戦するとも此城元來敵地に狹まれ糧米の乏し寄手の自國の案内者味方の他國不知案内とて龍城かあふべからず敵に道路を取切られざる先に本國へ引返すこそ良策なれ其上は敵本國へ寄來るとも本國にて合戦ならんに織田勢大軍ありとも恐るゝに足らずと評儀して其旨申上る神君聞召かゝる時に難説多き者之敵方より問者を入れ今川殿討死有しと浮説を流傳する事も有べしいまだ實事を聞定ぬ間に此城を退去せん事人口の嘲をまぬがるべからず今まばらく取静て世上の風説を聞定て後兎も角も計ふべしむし其時に望み郷民等鋒起して道を妨ぐとも蹴散して通らんに何程の事か有ん若又今川殿實は討死有て信長此所へ押寄んにいそ天命之城を枕とし今川殿のために吊軍して討死せんは何の恐れかあらんと仰らるれば人々義のわたる所道理に服む皆仰にぞ従ひける其時御外戚水野下野守信元(伊東物語に四郎右衛門とす)より淺井六之助道忠といふ者を大高城へまいらせ義元に今日晝頃桶狭間にて討死せられ駿河勢の惣敗軍と成り候織田殿の軍勢いまだ道路を塞がざるうちに早く三州



へ引歸し給ふべし日既暮ぬ織田家旗下にて毎度神君と雌雄を争ひ互に半盾の中ながら流石外戚のちなみ捨難くかく密事を告られけるとぞ知られける神君も此上の今夜當城を退去すべし但し只今退去の事を聞知て敵兵追來る事も有んか猶城中に猶籠る跡を郷民共に示すべしと御下知有て旗少く立並べ日暮はて、旗鏃を餘多燒夕闇を過じ廿日の月の出るを待せ給ひ静しと大高城を出給ふ(原書にいはは夜雨降道暗しとあるす岡崎物語に御家老衆の少しも早く御引取を急しに夕闇の間の前後差引なりがたしとて月出で引取給ふ誠よくまづおらせ給ふ大將也とすやけるとあるし大成記も此説に同じければ本文を改む又落穂集に此時水野信元より注進有しかどもかゝる時の縁者といへども其心ばかりがたしとて一向籠城の用意有し所へ岡崎より鳥居伊賀守が注進來りしかる此上のとて引取給ふとあるす)伊奈の本多修理光忠の父助太夫忠俊が手の者引具し御供しけるが後陣をば某つかふまづらんとて進みけり(藩譜)神君の諸士卒に向へ給ひ案内をたる六之助の長松明を馬上に捧け持て巷毎に打振へし然らば後陣の聲の徑わりと心得て先の松明に従て道を失ふ事なかるべし一町間に騎馬の者長松明を馬上に捧け後陣の兵の指南とせよ一盲衆盲を引習ひ一人道を

違ふ時の大勢必道に迷ひん又歩兵の松明を持へからず必邪摩となるべきとと委細に御下知ある御馬廻り前後列を並へ三千餘騎相印相詞を定らる是の夜中敵に逢時も同士討させじとの御事と又難所にては先手に進む騎士一人長松明を捧持て切所の邊に馬をひかへ此所の難所有るぞ或の堀沼川ありと段々に敵へ順路を示し押行ければ大勢一人も過なく池鯉鮒の驛に出たりかゝる所に刈屋邊の一揆共落人を打留んと千餘人ばかり池鯉鮒の邊に出張して道を遮る一揆の部長上田半六一番に進んで夜中此道にかゝる何人ぞや是の一揆の大將上田半六なるぞ一人も通すまじと高聲に名乗けり淺井六之助兼て半六とい知音なり幸かちと六之助馬をかけ寄松明さつと振上こゝに來る半六ぞやかくすの水野殿家人淺井六之助あるぞ殿の仰を蒙り織田殿の加勢に赴き桶狭間の一戦に義元を討取只今又三州勢の落行しを追討せよとの仰にて道を急ぐ卒爾するなど呼れば半六是を聞爰に來るの味方なり過すまじと下知するにぞ一揆共道を開て通しけり(岡崎物語に上田半六の刈屋衆なり君の御名を聞て今道迄送らんとす)是より後は道を妨る者もなく岡崎へ歸り給ふ六之助の案内の功を褒美せられ鞍置馬御太刀等下さるのみならず所領地迄賜りしと



そ神君より天文十六年丁未の初秋に岡崎を山給ひ永祿三年庚申五月廿三日十九の御歳誠の御歸國有ければ國中士民一統悦ぶと限りき今川より入置し三浦上野飯尾の義元の討死よ驚き逃去ければ(伊東物語)人の捨し城さらば拾取るべしとて御入城ましくけるぞ

大久保日記○伊東物語并大成記には此御師路岡崎城よは義元より岡部三浦飯尾等を入て守しむ義元死とも卒爾に城に入り義にあらすとして大樹寺に三日御滞留し給ひ彼等逃えて後廿三日岡崎へ入給ふとあり成績も同じ甚業に今川より兼て岡崎の城代に武田上

野介山田利右衛門を入置また尾州出軍に及び三浦飯尾岡部三人に岡崎を守らしむとぞ岡部長教刈屋城責并鳴海城軍の事

今川家の近習頭岡部五郎兵衛長政の義元の命を請鳴海の城を守りけるが義元討死を聞とも少しも屈せず織田方水野下野守信元が刈屋の城を乗取んと計畧をめぐらしける刈屋に水野藤九郎忠近(信元の弟忠重の兄)大久保日記に今川より刈屋城を取し義元討死より遙以前の事とす守りたり然るに義元既に討れぬ其外駿州勢の城を捨て皆逃歸るたましく鳴海城討りいまだことふといへとも定て一兩日の中に陥べしと山斷し刈屋に然る

べき軍士の一人もなく足輕計百人餘り籠りたるのみなるに岡部長教究竟の忍の者二兩本を刈屋城中へ入置城中の躰を伺いしめやがて岡部が輕卒伊賀の徒をさしそ軍士百餘人潰逸の方より押寄風上より火を放ち急に城を攻れば守將忠近大に驚き防戦の術を失ふ寄手の彌勝も乗し突伏斬伏城中に亂入て散々に攻戦へば忠近もみづかき切て出けるも天勢で突伏て首を取る守將討死すれば殘兵の愛がじこに落して城の忽ち落たりけり小勢は此城拘がたくや思ひ鳴海の城を呼迎んとする所に忠近が家老牛田を善助八郎五百餘人かり備ひ城を取返さんと攻寄る岡部方に小勢にて畢竟此城拘へ難しと評議して城を捨て鳴海に歸る牛田の忽に主人の守りたる城を取返したるのみならず駿河勢がまた討取主人忠近の首をも返取し主人の取辱をすしきけり其後岡部五郎兵衛の猶も鳴海を持かへししかば信長より佐を内藏助に千餘騎添て攻かこまじめしかども岡部ちつとも應せず防戦し度々切て出寄手を惱すまは聞えければ信長其勇氣に感じ和睦の扱をかけたる岡部をわらんだるに生義元の首骸を返し賜るべし其備かなひ難しとあらば此城を枕に討死忠臣主黄泉の供仕たむと忠誠詞に願はれ返答す信長彌勝せられ望の如く義元的首骸を函は納め禮を厚くして送られ



しめけ五郎兵衛も悦、大方ならず其首骸を請取城を引渡し首骸を興にのせ先に立入敷一人もあらざるして駿州へぞ歸りけり義元の侍、大將大勢の中に此岡部一人の敵國の中に有て少しも屈せず主人の首骸を返返し難なく本國へ歸りし事天晴の武士とて其名譽を稱歎せざる者いな、義元の子氏真よりも同く六月八日感狀を受け褒美せしこと

久松子供賜松平氏事

永祿三年五月神君尾州御出陣前に同州智多郡阿古屋の卿主久松佐渡守定俊(後俊勝)が家に立寄給ふ佐渡守が妻の神君の御生母にて御父廣忠卿御離婚の後定俊がもとへ御再縁有て御子おまた設給ふ神君三歳まで御母君に別れ給ひ今年十九歳まで絶て久しく御對面もあはれ互に戀しく思召渡らせ給ひしに今度尾州御出陣のよき折柄なれば是非御立寄御對面有てと内々仰進らる御母君も悦ばせ給ふ事斜ならず佐渡守の當時織田方與力水野下野守の旗下され共水野とても他人にあらず正しき御舅姪の御間柄何か苦しかるべきと御母君兼日より御用意とく待せ給ふ神君やがて御來臨まじく御對面有ければ御互にとまめたの事ども御物語有て御嬉きにも御目出度にも御涕のせきめへ給はず其時御母君御側に小冠者

三人幼女一人並び居たり神君御覽してこの向者に候ぞと問せ給へば是ころ皆めらりの腹よ設たる子供に候と答へ給ふに其名を問給へば御母君兄の三郎太郎康元次、源三郎康俊、其次を長福定勝と答給ふ神君聞召て扱ひ皆我弟のいかにか餘所に見候べき三人の冠者の某に賜ひるべし某が弟とて家號を授遣ひさんと仰られければ御母君大に悦び給ひ此兒どもの事ゆともかくも御計らひにまかせ進らるることて又仰ける、此兒共の兄に彌九郎定通とやが、いひしを佐渡守が弟の助之丞定重(後に民部)治兵衛義治十郎左衛門吉次とや者共いかにある遣恨有てや彌九郎を討殺しけり此怨今に晴がたしとて且怒り且歎給ふ神君聞召定て子細のい事なるべし後日穿鑿書へしとてやがて其家を辭して歸らせ給へり程あく三郎太郎等兄第三人の岡崎へ呼寄給ひ御弟と稱せられ松平氏を授られしが後に三郎太郎の叙爵して因幡守に成り源三郎の豊前守長福の隱岐守よき所領あまた下されたり彼助之丞治兵衛十郎左衛門三人始の程の三州に住けるが三州、悉く神君の御手に入し後の三州に徘徊もなし兼て三人とも諸國を浪流せり助之丞の姓名をも木藤民部丞と改め世を忍び居たりしが其子彦右衛門忠次に至り父助之丞の彌九郎を討し兄弟の相談にの加ひらざりしこの事精しく聞へ御



勘氣御免あり其時久松の苗字ハ由緒あれが断絶せざらん様に忠次稱すべしと仰る蒙り木藤  
を改め久松に服したり此久松の家ハ天穂日命より十四代野見宿彌宇庭の一男遠江守故八よ  
り四代普贈大相國道眞(天満宮御事)より二十六代久松次郎左衛門定義が嫡子今の佐渡守  
定俊之(寛永系圖)此時定俊が家人平野久藏竹内久六郎をも召ひて懇に懇勞し給へ定俊も  
大に悦び進刀并螺貝を献上せしとぞ(基業成績)

三州拂楚坂軍并沓掛放火の事

神君ハ五月廿一日岡崎へ歸らせ給ひても定て織田信長押寄すべし敵に取語られ籠城せん事  
いひ申變ちし城を打出て寄手を待快く一戦すべしと大樹寺邊迄出張して待給へとも寄  
來る敵もなければ長陣せんも無益とて岡崎へ引取給ふ然れども近邊ハ信長與方の軍制據  
するを捨置時ハ畢竟味方の害とて逆寄し追拂ふべしと先三州學母梅坪を攻給ふ廣瀬の城  
主三宅右衛門佐此事を聞よりも士卒を引具して城中を打て出拂楚坂に陣取要害に據て軍を  
はげむ岡崎勢眞先に進みたる足達金彌鉄炮にわたり討死す三宅が勢是に氣を得勝に乗じて  
岡崎勢を迫立る神君みづから鎗をとらせ給ひ御旗本の勢を進め三宅が陣をわけ破り給へば

大森與八郎同く鎗を揮て三宅が勢の備を突破るに御旗本一統勇み進んでかけ立る三宅が勢  
此驍勇に辟易し散々に逃走れハ岡崎勢勝に乗じ城下迄責付凱歌を唱へ引返す神君は是より  
直々尾州沓掛に攻寄給ふ城主織田玄蕃亮信平打て出戦ひしが是も一戦に利を失ひ城中ハ逃  
入れハ城下迄押寄近邊の民屋に火を放ち焼拂ひ引返さんと志たまふ所ハ玄蕃亮是を喰留  
とせしが城中結句騒動し攻ハ必定落城すべし見へし所信長大軍を以て救ひ來るよし聞え  
しかハかゝるてハ急に落城すべし手分をよせ引やとて軍を三段に分ち大久保新八郎忠俊  
ハ殿させ軍を全くして岡崎へ歸らせらる義元既に討死せし上の徳川殿も自ら信長ハ  
降参有べしと思ひの外敵の城を責動し尾州沓掛迄放火せらるハ事天晴の大將海運第一の弓  
取のなご威せぬ者ハあかりけり

右瀬沓掛十八町寺部學母長澤島屋根軍の事

廣瀬の三宅右衛門佐拂楚坂にて敗北し尾州沓掛城邊迄放火せられしと聞へければ織田信長  
大に憤り水野市野守信元に御身の甥元康を早々討取て出すべしと嚴に命せらる信元辭  
するに詞あふ出張すべしと聞へけるにを岡崎方にも横根村石が瀬に軍勢を押し出し挑取



ひけり時の六月十八日松平勘四郎鳥居四郎右衛門大原左近右衛門矢田作十郎蜂屋半之丞杉浦八郎五郎高木九助太田甚四郎松井左近大久保七郎右衛門弟治右衛門等先登して鎧を合す  
 (成績)水野が方にも矢田傳十郎水野藤助同藤次郎瀬見彌平次高木主水堀川五左衛門清水權之助久永金左衛門利谷新七劣らず鎧を合せ追つ返しつ奮戦す松井左近の眼を鉄砲に打れおがら其敵を討取算圖書の深手を負ひ大岡助十郎の討死し大久保喜六郎の敵の首を取る翌日刈屋城邊十八町 賊に信元出馬して合戦此兩家將率も或の親族或の朋友互に取ある中なれば筋力を盡し命を限りて苦戦を味方杉浦八郎五郎勝吉弟八十郎勝重村越平三郎討死又大久保五郎右衛門忠勝喜六郎忠豊七郎右衛門忠世太田甚四郎吉勝等首級を得る(成績)水野が勢とも追立られ遂に刈屋に逃入れ討取首級四十七を十八町に懸並ぶ此戦を醒すまで夫より直に寺部舉母兩城に攻寄らる城兵共の氣を吞れ引籠り出て戦ふともせされ其儘捨て置王山の寨を攻らる久松佐渡守定俊先手として肩に深手を負ふがら攻入て寨を放火し攻抜たり(成績)夫より東三河八名郡長澤鳥屋根の城を攻らる守將精屋善兵衛城を出て防戦す御家人榊原彌兵衛衆に抽んで一番に早く進んで鎧を合す神君其神速を感じ給ひ準之助也

名付給ふ職に武門の譽といふべし城兵の外郭を破られて本丸に逃籠り更に出て戦す

本多一黨由緒の事

當家普第佐命の功臣本多家の由緒を尋るに大職 冠鎌足二十三代の孫彦四郎助秀が子右馬亮助定等持院殿(足利高氏)將軍家に仕へ尾州横根の郷并栗飯原郷を賜り志村某を討ける功によりて御教書を賜ふ其子小八郎助政其子定通其子定忠其子彦二郎定助といふ定助に二人の子あり平八郎助時八郎正時といへり此助時の平八郎忠勝が祖之正時が子を小八郎正助といふ其子八郎正忠其子隼人佑忠俊其子隼人正忠次其子縫殿助康俊之又小八郎助政の子に定政といふあり其子定吉其子彌八郎正明其子忠正法名學禪といふ其子彌八郎正定其子佐渡守俊正其子二人嫡子の彌八郎正信後に佐渡守にゐる其弟三郎正重といふ又正時が二男二郎九郎信正其子作右衛門重正其子四人嫡子孫右衛門重富の其子孫越前家に仕ふ二男作十郎重次後に作右衛門と改む三男與十郎重定四男九藏重玄といふ又小八郎助政が子に定正といふあり其子彦三郎正吉其子豊後守正恒其子豊後守秀清其子修理太夫清重其子豊後守信重其子彦三郎廣孝後に右兵衛佑又越前守又豊後守に任す藤波暇ふて高名にける此廣孝之本多一



族繁盛なりとも此家より支流廣く分れしあり(寛永系圖)

永祿四年辛酉二月水野下野守信元は織田家の下知を守りまばく、刈屋小川の兵を出せ近郷を侵掠しければこれ捨置べからずと神君岡崎より御出馬あり再度石が瀬にて戦を挑み給ふ石川伯耆守數正水野方の高木善次郎清秀と鎗を合す二人互に知り合ふ勇士雌雄を決せず相引にす本多肥後守忠直植村莊右衛門正勝松井右近忠次等力戦せり肥後守忠直深手負ながら七度鎗を合せければ人呼て七度半鎗と稱しける又去年石が瀬の戦に矢田作十郎敵の金鯉の兜を所望して得たるを峰屋半之丞貞次又是を請受て今日の戦に此兜を着し出ければ敵も味方も峰屋定て一番鎗を合すべしと思ひの外石川數正に先登せられければ敵兵大に是を笑ふ作十郎大に憤て峰屋を罵る峰屋甚赤面せしか此事恥かしくや思ひけん此後毎度先登したり(此一戦原書に脱す今大成記基成成積による)其頃板倉彈正重定は織田家に與力し三州八名郡中島郷に些をかまへ其郷同水主重基其父三太郎重宗と共々籠り近郷を侵掠む(阿部が記弘治二年とす誤)神君是を征伐し給はむとて松平大炊助好景をさし向給へ

正校 三河後風土記卷第七終

正校 三河後風土記卷第八

石瀨再戰付中島軍の事

永祿四年辛酉二月水野下野守信元は織田家の下知を守りまばく、刈屋小川の兵を出せ近郷を侵掠しければこれ捨置べからずと神君岡崎より御出馬あり再度石が瀬にて戦を挑み給ふ石川伯耆守數正水野方の高木善次郎清秀と鎗を合す二人互に知り合ふ勇士雌雄を決せず相引にす本多肥後守忠直植村莊右衛門正勝松井右近忠次等力戦せり肥後守忠直深手負ながら七度鎗を合せければ人呼て七度半鎗と稱しける又去年石が瀬の戦に矢田作十郎敵の金鯉の兜を所望して得たるを峰屋半之丞貞次又是を請受て今日の戦に此兜を着し出ければ敵も味方も峰屋定て一番鎗を合すべしと思ひの外石川數正に先登せられければ敵兵大に是を笑ふ作十郎大に憤て峰屋を罵る峰屋甚赤面せしか此事恥かしくや思ひけん此後毎度先登したり(此一戦原書に脱す今大成記基成成積による)其頃板倉彈正重定は織田家に與力し三州八名郡中島郷に些をかまへ其郷同水主重基其父三太郎重宗と共々籠り近郷を侵掠む(阿部が記弘治二年とす誤)神君是を征伐し給はむとて松平大炊助好景をさし向給へ



板倉一戦に利を失ひ岡の城へ引退く爰にもたまかぬ東三河に逃入たり又大炊助好景今度の軍功拔群ありとて中島長良の兩城を賜はり好景中島城に居住す又其頃今川氏眞は東條の義安をば駿河駿田村にらしこめ置其弟義昭(義諦又義顯)を東條の城主となし牛窪の牧野新二郎成定を西條にうつし相討りて岡崎近郷を掠奪せしむ依て神君志はく此兩城を攻給いしに大炊助好景并其弟勘解由左衛門康定等奮戦して高名す(大成記成績甚業)

徳川織田兩家御和睦の事  
織田土總介信長の思ひの儘に今川義元を討取し後の武威日頃百倍して近國の輩震恐せすといふ者あり其中に徳川殿の少身といひ且義元の討死し其子氏眞の關弱にして頼みと成らず鬼神を欺く英雄たりとも獨立せん事叶ふべからず定て練立求め和を乞ふて來り給ふらんと織田家の君臣緩々安んじて月日を送る所に思ひの外結句織田家持分の城々を賣落し尾州の地へも度々押寄燒討し尾州の徒多く敗走するを見て信長天に感じ入賊に猛勇英雄といへ徳川殿の外有べからず去々年大高城兵糧入の働は老練の宿將の及ぶべからず奇變の妙策世以て稱讃する所なまた義元討死ありし後の外に救援する者もあし江邊に繋がざる舟岸頭に根を離れたる草よりも猶危き身を以て兜を脱ぎをはすし降参するがと思はば結句我が持分の城々へ押寄攻働く舉動實に前代未聞といふべし我此人をかたらし味方となし天下に旗を立てる補佐とせん物ぞと思ひ定め瀬川左近將監は相談し笠原新左衛門を以て使とし石川伯耆守迄其趣や送られしが猶心元あややせられけん水野下野守信元も兼て外戚のるあみ有事を信長よく知られければ重て下野守を以て信長志の程懇懇に申演られたり神君聞召仰の趣の忝悦入以志かしながら今川の先代より善好淺からず某又幼少の初義元の介保を受しり世人皆知る所之氏眞が亡父の吊軍せん時催促あらんに某辭退すべきあわらず眞先かけて尾州へ攻入義元の善好に報ひんと思ひ定め以へば只今和睦の仕兼いと又餘儀もなく御返答ありければ信長益々其信義の篤を感心せられ猶も下野守を使とし度々和睦を結ばんとせらる神君又仰ける氏眞武士の志あらば父の仇報はんといふ志のいかでなかるべき某方より度々使を立て義元の吊軍片時も早く思ひ立給ふべし其時は某も信長に向ひ鋪矢一筋も射かけて年頃の善好に報せんぞ申送るといへども氏眞さらには心せず此狀にては氏眞とでも同心有まじきにや今少し氏眞の志をも見定て後ともかくも返

る舟岸頭に根を離れたる草よりも猶危き身を以て兜を脱ぎをはすし降参するがと思はば結句我が持分の城々へ押寄攻働く舉動實に前代未聞といふべし我此人をかたらし味方となし天下に旗を立てる補佐とせん物ぞと思ひ定め瀬川左近將監は相談し笠原新左衛門を以て使とし石川伯耆守迄其趣や送られしが猶心元あややせられけん水野下野守信元も兼て外戚のるあみ有事を信長よく知られければ重て下野守を以て信長志の程懇懇に申演られたり神君聞召仰の趣の忝悦入以志かしながら今川の先代より善好淺からず某又幼少の初義元の介保を受しり世人皆知る所之氏眞が亡父の吊軍せん時催促あらんに某辭退すべきあわらず眞先かけて尾州へ攻入義元の善好に報ひんと思ひ定め以へば只今和睦の仕兼いと又餘儀もなく御返答ありければ信長益々其信義の篤を感心せられ猶も下野守を使とし度々和睦を結ばんとせらる神君又仰ける氏眞武士の志あらば父の仇報はんといふ志のいかでなかるべき某方より度々使を立て義元の吊軍片時も早く思ひ立給ふべし其時は某も信長に向ひ鋪矢一筋も射かけて年頃の善好に報せんぞ申送るといへども氏眞さらには心せず此狀にては氏眞とでも同心有まじきにや今少し氏眞の志をも見定て後ともかくも返



答致しと仰ければ下野守も度々此使に來り信長も禮を厚くし詞を遠く慰む和を乞はれ  
 ければ神君にもさればとて酒井石川等の諸老臣を集め此の事いめあらんを評議し給ふ老  
 臣共一同に申上げるは當家元來今川が一族被官にもまじりて其昔廣忠卿後幼雅にて他國  
 へ難を避給ひし時御家人共のはからひにて一旦義元を頼みしより兩家善好とはなりぬる之  
 然るに義元もとより奸邪私慾の人にて我君の御後見致すと偽り御所領悉く押領じ我君に  
 は艱難を極めたまひ御家人どもは毎度義元に驅立られ合戦の度々毎度先手に用ひられ討死  
 をせし者も少からず我君をも丸根の先手とて大高の留守とせらる是皆危難を犯させて敵の  
 餌とせし者之義元畢竟の君の仇にて味方にはあらずまじて今の氏眞開弱昏愚にて君舊盟を  
 變じ給はず吊軍をすゝめ給ひ其外日夜苦戦して敵の城を攻取給へとも氏眞一度も慰勞の使  
 り遣はさず其身父の吊軍の思ひもよらず明れの蹴鞠茶湯暮れは酒宴亂舞のみ飯は遊女白  
 拍子兵庫躍に月日を送るたどひ氏眞昏愚ありとも十八人衆など名聞へたる古者の歴々  
 ぞと諫言をせざるにや畢竟の一兩年の中に今川の所領は相州の北條か甲州の武田に奪はれ  
 て其家滅亡せん事疑ひなし君天下に御志ましまさば早く天の人望に應じ今川と手切して

信長へ一味し給ふこそ御尤もあれと申ければ神君も領がせ給ひ我幼時に普代の士共多  
 く討死せしは吾終身の怨ありとて御涙にむせび給ひければ是を聞人一同に感涙を流しける  
 依て御同意の御返答に及ける(大成記岩淵夜話等に此和陸水野信元が信長をとめてより  
 信長淺川一益を便として申入れられ水野が使も添らる又此方にて和議をすゝめし第一酒  
 井忠次ありとしるす)織田家よりは林佐渡守通就瀧川左近將監一益鳴海に至り石川伯耆守  
 數正高力與左衛門清春に會し尾三の堺丹下鳴海沓掛廣瀨舉母梅坪大高寺部鳥屋等の城々  
 の守兵をば皆引取城を悉く引渡して歸る神君の御領内所々の守將へは植村莊右衛門正勝  
 を使とし此事を告ぐる酒井將監忠尚は上野城より岡崎へ來り申上げるは廣忠卿已來の舊好  
 を捨て御入魂の筋目を御違へし事の大事の弓矢に疵が付しと諫む神君仰に弓矢に疵の付と  
 付ぬは我心に有り汝殿府に出置人質の我が妻子と死生を共にすべしと宣へば將監悦ばずし  
 て退出す其容狀不審に見へければ鳥居忠元本多廣孝平岩親吉等逐掛て討果さんとせしを神  
 君彼が申所一理なきにあらず必殺すべからずと留給ふ(大成記成績基業夜話)神君今度  
 陸の御しるしに清洲へわたらせらる(大成記伊東法師西語には正月とす然れども石瀨の軍



徳川織田  
知陸西公  
御對面の  
圖



月利



二月あれば正月にはあらざるべし三月の頃あらんか石川井酒植村天野高力等わづかに百人計供奉す清洲よりは林佐渡守瀧川左近將監菅谷九右衛門熱田迄御迎に参り正満寺に御休息有て清洲に入給ふ其時見物の雑人城門遙に充滿して喧噪せり本多平八郎忠勝時よ十四歳大長刀を揮て三河の元康参着す汝等何ぞ無禮あるとのしりしかば衆人覺へず膝を屈して静まる信長自身二九迄迎ふ出られ本丸へ導き禮義尤嚴重之其時植村新六郎家政御刀を持て神君の御側に有り衆人は是を咎む新六郎の主人の刀を持たり何の怪む事あらんといふ其所を信長見られ我久しく植村が武勇を聞及ぶ汝等怪むべからずと制止を加へらる扱信長神君に向ひ和味と一のひ喜悅是に過す今より共に水魚の情深く交り兩旗を以て天下の亂を治むべし信長天下を一統せば徳川殿旗下となり給へ徳川殿天下を統御ましまさば信長御旗下に屬すべしと互に盟書を取かはし給へ信長悦あゆめならず善美を盡し響應し長光の刀善光の脇差を進らす又植村新六郎を信長近く召て今日其方が舉動焚燬が鴻門の會に有にせんとらすと稱美せられ行光の刀を授けらるかくて神君御歸の時信長も清洲町はづれ迄送り給ひ林瀧川菅谷の三人熱田まで送り奉る翌日林菅谷兩人岡崎へ使して信長懇懇に昨日御

來臨の云きよしを謝せられける（原書には本多勝忠植村家政が事を悉く脱して去るさず尤遺憾といふべし大成記基業成績によりて爰に補入す又織田と和睦を永祿五年とするは誤なり大成記成績によりて補ふ）

今川氏眞使者并御返答の事

徳川織田兩家御和睦既に調たりと駿州今川方へ聞へければ氏眞以の外憤り西郷内藏助俊雄を使者として岡崎へ來らしめ難詰しける其詞には徳川殿の御事は先考廣忠卿より今川家無二の味方にて忠勤をばけされ亡父義元信義を厚く介保せし其恩を捨て忽に舊盟にそむき代々怨敵たる織田へ一味せられしにや義元以來徳川殿に對し怨恨を含まれん覺悟あり返答に應じ氏眞存る仔細有との事之神君彼使者に御對面はなく酒井雅樂助正親を以て御返答有しは御口上の趣承届い去年五月尊考義元不慮の討死し給ひし後敵方の威勢十倍も味方の魂を失ふることき中に某一人敵の中に狭れ若一所も攻取られず却て敵の持城數箇所賣落し千辛万苦し粉骨を盡す定て近年には義元の吊軍に尾州へ發向し給ふらん其時は某先陣して義元の舊好を報せんとの志にて先日より度々其事勤めりといふとも今に以て



吊軍の催も聞へず某旦暮戦争して苦めども加勢せらる、沙汰もなし信長大國を領し軍  
 強く隣境に接し日夜戦を試て三州を并吞せんとす某小勢を以て幸に一旦の勝を得ると  
 いへどもいかで始終、寡を以て衆に勝事を得いへき故に一旦の計策を以て急難を通れんが  
 爲信長と和睦すといへども是眞實の志にあらざる今にも氏眞義元の吊軍として尾州發向の  
 らんには其眞先かけて信長に鎗矢二筋射掛て義元の嗜好を報じいはんと仰遣はされ其後又  
 成瀬藤五郎を駿府へ遣はされ氏眞が無二の寵臣三浦右衛門佐義忠にたより駿府に妻子を人  
 質に進らせ置上りいかにか疎意有べき信長と和睦せしは一時の急難を救ふの計策のみと  
 怨懣に陳謝あり氏眞聞て徳川殿すさる、所尤道理あり其上成瀬を以て陳謝せらる、上は  
 疑ふべきにわらずとて其後の意解て更に疑ふ念もあかりしとさきあり

松平大炊助好景討死付本多彦三郎廣孝藤浪 暇高名の事

其頃松平大炊助好景の中島に居住し又本多彦三郎廣孝の小牧の砦を守らしめ松井左近忠次  
 には津平の砦を守らしめられ日、東條の吉良義昭を責て合戦更に止時あり此四月十五日吉  
 良の人敷を出して酒井將監忠尚守りたる上野の城を攻かこむ其事岡崎に聞へしかば大炊助

好景が嫡子主殿助伊忠に命ぜられ上野の城を救はしめらる吉良義昭の主殿助が中島の人敷  
 過半引具して上野に向と聞しかばさては中島が無勢あらん其虚に乗じて中島を乗取らんと  
 出馬して中島をとりかこむ大炊助此時の澤澤に有けるが義昭が中島を襲ひ攻ると聞て早  
 深溝より中島に馳歸る義昭方には此事をきり中島の町裏に軍兵三百人餘伏置たり大炊助の  
 その事夢にも知らず僅に五十騎計にて馳來る所に伏兵起りて攻戦ふされども大炊助の名を  
 得じ勇士なれば力を盡し奮戦し幡豆郡長良善明丹宮の堤の上にて敵多く討取て勝に乗じ逃  
 るを追て戦ふ所に敵の牟呂(成績基業土呂とあり)邊より大勢進み來り大炊助が小勢を前後  
 より取めこんで攻戦ふ大炊助勇をふるひ縦横に馬を馳て力戦する所に馬の韃切れて鞍  
 動きければ馬より飛下りし時尾崎修理が矢にあたり深手負しを山岡築醫走よりて首をとる  
 大炊助時に四十四歳此人の信光君より、五代の孫弓矢とりての名高きのみにあらず敷島の  
 大和歌さへよくよみければ其討死をおしめぬものなし其弟十郎左衛門忠次太郎左衛門定清  
 久天夫景則新八郎忠憲孫十郎定政(此名みゑ系圖以纂よて改む)又郎等には板倉八右衛門好  
 重同三郎九郎松平内記岡田孫四郎原田傳助近藤平兵衛を始として一族及郎等三十騎同じ枕



に討死す吉良義昭の中島を乗取て番兵を置て守らせ上野城をば巻つくし東條へ兵を納む神君の大炊助好景が討死を歎かせ給ひ其子主殿助伊忠を嗣とし深溝の城を守らしめられたり。あゝに荒川甲斐守頼持（荒川が名義廣義弘頼持又の頼時義虎等區々にみゆ度と改名せしにや）の吉良が一族にて殊更この頼時の持廣が弟なりしが義昭と不快なりしかば荒川が酒井雅樂助正親にたより降参して正親を荒川が城へ引入たり依て酒井と荒川兵を合て牧野新次郎が籠たる西尾の城を攻んとす牧野防々事かあひがたく夜に紛れて西尾を落て牛窪へ引退く西尾城への雅樂助正親入替り直に兵を進めて東條を攻んとす吉良義昭是を聞て敵の僅の小勢なり待て戦ふ言甲斐あしとて吉良が隨一にたのみ切たる剛者富永半五郎忠元（編年には景連とす）時に廿五歳無双の勇力之此富永を大將とて十六以上六十以下都合其勢三百六十餘騎城を拂て討て出藤波暖又備へたり爰に於て小牧の砦を守りし本多彦三郎廣孝の富永が小牧へ取掛らんとするを見て砦を出て酒井と兵を合てどもに戦ふ小笠原三九郎松井左近も糟塚津平の砦を出て是を助く敵方も牧野新次郎牛窪より來て富永と共に合戦す牧野が郎等須瀬宮内進んで酒井正親に突てかゝれば正親大に怒り忽ち宮内を突伏て郎等

に其首を取らしむ阿部忠政の射手なれば爰を専途とさしつめ引つめ敵を射斃す事若干なり（基業）富永伴五郎此砦を見て大に怒て馳出て鳥居平六に打てかゝり忽に平六を切て落せば大久保太郎八走寄て富永を切る富永切られながら又馬をかけ寄せ太郎八を切る太郎八是を請流し刀を捨て無手と組馬より落る富永大力なれども痛手負たれば終に大久保に組伏せられ既よ討れんとする所に思ひもよらず義昭の軍勢若干かけ來り終に太郎八を討取富永を救て引包み東條として退んとす其時本多彦三郎廣孝逃すまじと馬を馳來り群がる敵を追ちらし富永伴五郎を突伏せ郎等本多基四郎に其首を取らしむ（基業成績は富永廣孝を射る廣孝鎗を揮ひ富永を突伏とす）富永既に討れければ東條勢の散々に取走す味方勝に乗じ追討して討取首ども都合七十八級藤浪暖に棹結わたり掛並ちへ凱歌を奏して歸陣せり（藤浪細手の軍を大成記九月とするの弘治三年九月とせるを襲ひし誤之此後六月に酒井正親に西尾を給ひ七月に長澤の城攻あり夫より以前此戦ひあるは九月にあらざる事明か之又御年譜に永祿三年九月十三日の事とするの益誤れるべし）

吉良義昭降参付酒井正親本多廣孝恩賞市場殿荒川家許嫁之事



酒井雅樂助正親本多彦三郎廣孝の藤浪磯の勝に乗じ敵の臆病神醒たる中に東條へ押寄て吉  
 真義昭と責むる時日と移さず東條へ攻寄せ金鼓を鳴らし関を作り攻めれば義昭頼み  
 切たる富永もあらざれば忽に兇を脱て降参す依て義昭をも岡崎へ召寄られ東條をば高居  
 彦右衛門元忠松平勘四郎信一も守らしめられ六月に至り今度勲功の人と勲賞を行ひる先  
 雅樂助正親に西尾の城を賜り城主とせらるこれ御家にて城を賜ふの權興とぞ又富永伴五  
 郎が所領との本多廣孝に下さる其時期のりし御書あり

今度於小牧取出被成儀祝着以爲勲功富永伴五郎跡職并同心衆之跡共如書  
 立一永令領掌事

一彼地誰人雖有ニサ様一切不可令許容一寺社領に至迄其方可爲計事

一無事之儀以共以他之地相當程可進惣別彼地方に入組有之由改次第可有所  
 務之ニ事

一件五郎同心衆の中に於津平給分所置之旨彼地餘人を出置之間草賀二郎右衛門以  
 跡職一相當程可被取し事

右代々依有ニ忠節一彼地進置上は永不可有ニ相違ニ者也

永祿四六月廿七日

源 元 康

本多豊後守殿

此御書の寛永系圖より補ふ但し廣孝從五位下叙爵せし天正十一年之然るに此御書よ  
 豊後守と遊ばしたるを見れば此頃御ゆるしありて叙任前豊後守と稱せしと見ゆ  
 又松井左近忠次には津平の村を給ふ荒川甲斐守頼持の今度一族をばあれ軍忠を盡しけるを  
 稱美し給ひ異腹の妹君を許嫁せられ其内室とせらる此妹君の廣忠君の女よて平原氏の御腹  
 に生れ給ひ(戸田氏ともいふ)後に市場殿とすせし此御事とぞ

按るに原書中島の軍より藤浪磯ならびに酒井本多が恩賞迄を織田家御和陸の前にある  
 す尤錯誤といふべし今大成記成績基業等の書より次第を改正す又原書に形原松平佐渡  
 守親忠が降参の事を吉良降参の次に記す親正の其譜によるに天文十年十月三日に卒去  
 す然れば神君御誕生より一年前に死せし人なり其子紀伊守家廣の傳通院殿の姉君に添  
 ひし人なれば其年齢の相違推て知るべし其次に荒川頼持先手とて西郡宇土城を攻て城



主松平勘八郎といふ人逃去よしを記す是又諸記録に見へるとなしむと翌年西郡上郷の城を攻られし事を誤れるにや故に此三條は削去る

長澤落城の事

同年七月には神君牛窪の牧野新次郎成定を攻られんとて散樂甚三郎に其備を設められ又御自身も三千餘騎を引具して牛窪に向はせたまふ其頃今川方の精屋善兵衛宗益小原藤十郎鎮吉(肥前守鎮實の子)三州寶飯郡長澤の城に有て近江を侵掠するより松平勘四郎信一石川日向守家成等をして是を攻しめらる折節神君の牛窪より御歸路に長澤邊を御通行ありけるに山路險隘あればもし長澤の城兵等歸路を遮らんと打て出る時味方進退難義なるべしとて軍勢を二手に分て一手は山下の大路を通行し一手は御旗本に從屬して山南を通行すべしと御下知ある御人數二手に分れ通行する所長澤城中出火して騒動大方あらず山下を過る一手の人數は山南を通行の一手城を攻て火を放ちたると心得我劣らじと急に城を攻かれば山南を通行の御旗本勢もなしく競ひ進み二手とも一手になり無二無三に攻立る最初より城攻に向ふ勘四郎日向守が軍勢も神君御加勢ありと見て喜勇み攻登れば城兵の

防戦かなはず散々に敗北と本多肥後守忠貞の敵を突伏しが甥の平八郎忠勝に其首取れといひけるに忠勝僅に十四歳我の人の力を借て高名せずといひて別に進み敵を突伏て首を取る渡邊半藏守綱の城の守將小原藤十郎を討取て御威を蒙る精屋善兵衛の漸く城を退出て駿河をさして落行ける又本多忠貞も忠勝少年ながら鋭氣拔群なるよし聞へ上しかば神君も末頼母しと悦ばせ給ふ(此條原書誤り多し其業によりて補入す)

西郷落城鵜殿長照生擒 信康君人質替の事

永祿五年壬戌二月神君の去年東條西尾長澤等の城を攻落されし其勢に乗じ今川方鵜殿長助長持が西郡上郷(成績基業浦形に作る)城に有けるを攻らるべしとて松井左近忠次を其大將に命ぜらる忠次直に打立ける所物頭三原三左衛門(一説石原三郎左衛門)チける此城要害險阻に據れば力攻にせば味方多く損ずべし幸御旗本に江州甲賀衆所縁の者あり其縁について甲賀の徒を招き城内へ忍びを入置然るべしと諒ければ忠次尤と同じ甲賀より伴太郎左衛門資家をはじめ忍びに馴たる兵八十餘人招きて此徒を所々に伏置て三月十五日の夜城内へ忍び入らしむやがて城内櫓に火をかけ奇手はわざと聲をも立ず透間な



く乗入て切て廻る城中には反忠の者有と心得散々に敗走す城の守將長持の城の北方護摩堂の方へ逃行所を伴與七郎資定懸寄突伏て首を取る(原書には長持の駿州に落行とす且長持が名を長照とするの誤之長照の長持が子藤太郎が名之重脩寛政譜竹谷松平譜にも永祿六年三州上郷の城にて松平備後守清善鶴殿藤太郎長照を討取ると見へたり)其子藤太郎(成績右近)長照藤三郎長忠(一説長則)伴伯耆守資繼がために生捕らる(御年譜にも長照を生捕るとあり)神君御出馬に及ばず此城陥りければ松井左近が功を大に稱美し給ひ伴與七郎にも翌年に至り御感状を給ふ此城をば久松佐渡守俊勝をして守らしむ今川氏真の西部の落城を聞て大に怒り岡崎の人質を誅せんとすれども神君の北の方の今川の一門關口親永が息女故さもあしがたく日敷を送る所石川伯耆守數正是をきし主君の若君駿河にて害に逢給ふ事あらんに殉死する者一人もなきの當家の恥辱あり此事を告るとも主君ゆるし給ふ事じと思ひ家よ其趣を書置し駿府へ赴き若君ふ付添進らせたり氏真の鶴殿も親族なれば其子兩人岡崎に生捕と成じと聞て大に憂るよしあれば關口が方まで北方若君三方と鶴殿が子二人を取替んとや入けるに氏真悦び早速許諾しければ伯耆守の岡崎へ歸り其事ア上る神君

甚悦び給へば伯耆守の鶴殿兄弟を伴ひ駿府へ行て今川方へ渡し北方と若君を請取て御供して岡崎へ歸る岡崎に君臣とも大に悦び數正此度の成功を感せずといふ事なむ此後今川方といふよく御手切と成りければ氏真大に憤る叔母御關口形部少輔親永に腹切らせけり然るに岡崎の御家人等の只今迄人質を駿府へ出し置もの多し今川方小原肥前守鎮實三州吉田に有て人質を預りけるが此頃松平與次郎清善が今川へ出し置し人質を捨て岡崎へ其妻を進らせたりと聞て大に怒り兼て今川方へ出したる人質の女子其外岡崎がたの人質十一人吉田城外龍念寺口に於て申指にしたりける是を見る者小原が暴虐を爪弾して悪みける(西郡落城の事の伊東物語成績基業大成記によりて原書を改正す信康君人質替の事も同じ)

三州小坂井軍 井伊万千代の事

同年春の末今川方より佐脇八幡の砦を守らしめたる板倉彈正同主水等三連木の戸田牛窪の牧野の輩等聯し合せ小坂井東岡に出張す(原書此軍を九月十九日とす是九月十九日赤坂の軍と一日に混せし之今の成績基業によりて剛定す)酒井左衛門尉忠次を大將にて御入敷を向はせられしに味方散々に討なされ既に敗北せんと聞へければ岡崎より急に三千餘騎を



引具して御出馬ありて板倉戸田牧野が勝はこりたる勢の中へ無二無三にかけ入て討立給へ  
 敵忽ち敗北す味方の是を追討して八幡の人家を焼拂ひる此時近藤傳次郎深手負て歩行な  
 りがたきを見て渡邊半藏守綱肩に掛て歸りける諸將今日ばかり救ひせ給ひ負軍を勝軍に  
 仕たりと上たり神君我の佐脇を攻んとて出馬せしなりとのみ宣ひける(其業成績)此月今  
 川方井伊谷城主井伊肥後守直親の桶狭間にて討死したる信濃守直盛が再従弟之(諸本に直  
 親を直盛の子とす今系圖にて改む)其家士小野但馬道好いりある怨や有けん直親の尾州と  
 岡崎へ内通じ今川家に叛くよし讒言す今川氏眞忽に是を信じ遠州掛川城主朝比奈備中守  
 泰能に討手を命じたり氏眞の一族新野左馬助親矩直親と睦じき友あればいそぎ使を遣ひし  
 直親が實意を尋じに直親答けるの尾州織田信長が君のため家のため深き仇なり何の故に  
 信長に従ひて今川殿を叛んやとやければ新野左も有べけれど悦び氏眞に其旨告て機を疎  
 めけるにぞ氏眞疑をばらしける新野の又其よし井伊が方へ送早々駿府へ出で謝せらる  
 へととやつうのす直親悦斜ちらす従者少々引具して駿府をさとして急ぎたり朝比奈泰能の  
 井伊が免許の事いさらし知らずやがて討手に向ひむと用意する所只今直親が城下を廿人は

りかにて通行すると聞て天のわたへとよろこび大勢にて打て出小勢の直親を取籠て討殺し  
 氏眞がもとへ送る氏眞元來闇昏其虚實曲直の糺明もなく直親が所領を没入し万千代とて  
 わづりに三歳の小兒あるを直に誅せんとす新野左馬助やうやく氏眞を諫て其小兒をわづり  
 り新野の家まで養育しける其後(永祿七年之)左馬助道則引問の城主飯尾豊前守致實が討手  
 に向ひ討死せし其妻よく万千代を撫育してありけるに小野但馬また氏眞にすゝめて万千  
 代を誅せんとしければ新野が寡婦大に恐れある寺院を頼み密々隠し置たり其後年へて新野  
 が寡婦遠江國住人松下源次郎に再嫁せし時万千代をも伴ひ行しうが万千代遂に松下が家  
 にて成人し後々井伊侍從直政とて御當家第一佐命の功臣となりけり

今川家風衰廢 付奥山修理亮嵩山籠城并五本松落城の事

今川氏眞關西にて三浦右衛門佐の俊臣を愛し軍國の大事は三浦一人に委任し井伊直親の類  
 無二に忠義を志す者も讒臣の舌頭により無實の罪に沈み誅殺せられ三浦にとへ婿へつ  
 らへば不次の賞にあづかり加恩昇進望のまゝに成就すされば一家の風俗大に衰廢し酒宴  
 亂舞に奢侈を競ひ武備悉く棄果たり今川が被官に奥山修理亮貞範とて遠州嵩山の城に有



年頃無二の忠勤を願ける此奥山質直の生得にて詔依賄賂等を舉動事の曾て知らず三浦に  
 婿の事なきを右衛門佐の内に憤りある時氏真機嫌を伺ひ奥山が常々氏真の恩惠湯きを怨  
 み近日に織田徳川へ内通し今川家を傾けんと計畧をめぐらす早く誅伐を加へ給はずは後々  
 大事に及ぶべしと詞巧に譏したり氏真元來三浦が巧言令色を愛しければ忽に其機言を  
 用ひ菟原安房守忠胤小原藤五郎鎮宗を將とし三千餘騎を差添て永祿五年七月(家忠日記成  
 續基業)遠州湯山の城にむかうも修理亮も此事兼て聞じうは城兵本戸口に備て矢砲を飛  
 せ切て出寄手を度々追立て嚴しく防戦すれば寄手大に攻めくみ手負死人三百餘人及べ  
 りされども俄の籠城なれば兵糧乏しく後詰のたのみさし此城畢竟かへ難しと奥山の城  
 中の兵卒七十餘人其外婦人小兒迄集て都合百七十四人夜中山傳ひ落去ければ七月十七日今  
 川勢の人なき城を乗取ける九月十一日氏真又朝比奈備中守泰能に命じて西郷彈正右衛門正  
 勝が五本松の城に夜討せしむ正勝は先年岡崎の城を清康君に譲り進らせし昌安入道が孫な  
 りしが近年神君より本多百助信俊を以て招りしうは速に御味方に参りまうのみならず  
 野田の菅沼新八定盈段嶺の菅沼小法師長篠の菅沼左衛門貞景設樂越中守貞通等をも追々と

りめて徳川家へ降参せしめしなり氏真かくと聞て大に怒りしとぞ正勝寄手を引うけ散々に  
 防ぐといへども俄の事にて人数も少ければ正勝遂にうたれたり嫡子孫六郎元正月谷城に有  
 て是を聞早速に馳來りけれども従兵わづかに十四人大勢の中に切て入同じ枕又討死す次男  
 孫九郎清員既に生捕と成じが敵の執持たる縛を振切て深谷に落じうは死を遁れ野田に至り  
 菅沼新八定盈に其由告けれは新八早速に神君へ上る神君大に憐給ひ父が遺領を賜ふ清  
 員兄孫六郎孤兒あり此兒成長する間某代りて軍事を勤めいへんとすければ彌其志を  
 成せられ御書を下さる(成績基業によりて原書を補正す藩譜に孫九郎清員隣郷にありし  
 が助け來る徳川殿の加勢も馳加はり正勝彌力を得て諸軍を下知し敵を追拂ふとす是の誤れ  
 るに似たり前車後詰集に清員菅沼を頼み父兄の敗死を告ければ神君聞召大須賀本多植村渡  
 邊高井等加勢とせられ清員とにも朝比奈泰能を討しめらる大に打勝じうは神君其功を稱  
 美し給ひ父の遺領悉く清員に賜ひ其家を繼せらるとなり此説審なるがと又清員が兄元  
 正が孤兒の後には右京亮義勝といふ其子孫兵衛勝忠紀伊家の士となるよし系圖に見へき  
 赤坂軍神君御諱改の事



同年九月十九日神君酒井左衛門尉忠次を先手とし設樂郡八幡の砦にむうりせ給ふ二連木牛窪佐脇八幡の敵とも赤坂に出張して烈しく戦は味方散々に敗られたり其中にも佐脇八幡の守將板倉彈正重定勇を奮て追討す渡邊半藏守綱石川新九郎正綱同新七郎親綱踏留りて後殿じて味方を退んとするに敵きやく喰付て味方大にくるしみける時に矢田作十郎馬に離れ危うりしを渡邊半藏是を救ひ作十郎も馬を付て退く半藏の御油より赤坂迄の間に轡を回し敵を追拂ふ事十度鎗を合とる事二度之時の人其勇猛を稱して鎗半藏と名づけし此小返しの鎗をいへりぞ神君の先手敗北すと聞召急に御馬を進め給ふ板倉彈正の旗を見ると其儘馬引返し逃んとするを御旗本より近藤傳次郎鎗つけて突伏て首をとる彈正が鎗の板倉主水もうたれければ敵の物取軍と成り走り逃けるが佐脇八幡へも入事かならず皆牛窪二連木をさして逃行ければ佐脇八幡の兩砦は難なく味方へ乗取たり是年神君御諱元康を改めて家康と名乗らせ給ふ

按るは伊東法師が物語に永祿四年信長と御和睦ありて清洲へわたらせ給ひし時信長の方に伊東といふ者客と成りてあり源家相傳の秘書を持たり御逢なるといふ事とて引合せ

らる板岡崎へ歸り給ひし後彼法師も参りければ恐る問ひせ給ふ彼の者は豊前守佐那の産なり源頼義朝臣より傳來の秘書ありとて源家懐の書といふ四十八冊奉る阿部善九郎奉行と天野某寫して献じぬ此時源家の義家より繁昌の事を思召御諱に家の字を用ひ給ふべきにやと問せ給ひしかば伊東法師是こそ正八幡の御はからひにて思ひつかせ給ひし物と感じける依て永祿五年二月廿四日御諱改め給ふと見ゆ此説うけ難きに似たれば本文に記さず其後大成記の永祿五年の始に御諱の事を記せり是伊東が物語によられしにや岡崎物語に永祿三年岡崎御歸城の後御改め有しとあるの誤れり三年以後の御書にも皆元康とのみあるされぬ御年譜并家忠が日記に永祿六年の秋御名改め給ふと見ゆ編年に六年六月迄の御書に皆元康とのみあそばされ其九月より改め給ふよしに志るしたり此説とも皆是に似て非とすべし今寛永系圖本多廣孝が譜を閲るに永祿四年十一月一日に元康の御名を志るされ五年八月廿一日の御書に家康と書せ給ふ是により大成記の説に従ふ

三州一向宗一揆蜂起の事



永祿六年癸亥五月神君御鷹狩より出給ひけるつひてに松平主殿頭伊忠が深澤の城に立寄りしに  
 給ふ伊忠さまよく響應し奉る神君伊忠に蒼鳥を下され其上に長澤の城の敵境に接し要害  
 の地武田信玄毎度甲州より兵を出して侵し掠んとす此城を守らん者汝に過たる者なし汝今  
 より行て守るべしと仰ければ伊忠忝しと御請し六月より長澤の城を守る其後の信玄も侵  
 掠せざりければ神君御書を賜ひ賞せらるる七月に小坂井牛窪邊に砦を築き今川方の吉田城  
 を攻る備になさるべしとて砦の地を巡見し給ふ所に吉田より小原肥前守人数を出し喰留ん  
 どす味方小勢にて頗る難義に及べんとせしに平岩七之助親吉人数を召具して馳來り敵を追  
 立ければ難なく岡崎へ御馬を入られたり(基業)此頃不思議の一揆起り三河の國中を越  
 大に騒動す其濫觴を尋るに今年九月佐崎に樂を築しめられしが籠置所の兵糧乏しければ酒  
 井雅樂助正親差圖にて菅沼藤十郎定顯(後越中守)を所々に遣ひ兵糧を取入しむ佐崎村に  
 上宮寺といへる大寺あり寺中に粉を貯めたるを見て輕卒どもに命じ其寺へ使じ此  
 節糧米闕乏すれば寺の粉を借用すべしとや送り其返答も聞得して悉く其粉を輕卒數十人  
 にや付飛が如くに佐崎の樂に運び入させたり三州に一向宗三箇の大寺といふに佐崎の上宮

寺針崎の勝鬘寺(勝滿又り正滿とす誤之)野寺の本證寺(本勝とす誤之)といへりまた土  
 呂の善秀寺といふもあり上宮寺僧等の糧米奪われし事を大に怒り彼針崎野寺土呂の僧徒を  
 呼集め抑我浄土眞宗一向専念の教當國流布廣宣の濫觴の宗祖親鸞上人宗門の大要を邊鄙  
 の土民を教化せられ北國行脚の事終り天福元年(四條院即位元年)師京の折から當國矢作宿  
 樂師堂にて一七日法談し給へり其時聽聞の貴賤師依渴仰して皆此宗門に入しより文明の頃  
 此宗彌盛に成り國中若干の寺院ある中にも上宮本證勝鬘の三ヶ寺の院家にて悉かも一  
 國の僧祿之最宗祖上人以來守護不入の靈場なるを今度菅沼が舉動前代未聞の狼藉之此儀  
 に於ては徒に止べきにあらざ此仇を報じ宗門の耻辱を雪べしと衆議一決して僧俗といふ  
 迄も寺に師槽のよれみを以て國中の土民を呼寄るに元來宗門師依せし者共忽に三百餘人  
 來り集る其後追々此事聞傳へて集りたる者都合千四百餘人手々に棒千切木を提て菅沼が  
 屋敷に押寄圍の聲を揚てあし入に折ふし藤十郎の岡崎へ出仕したれば殘る婦女小兒ども  
 周章して泣叫ぶ留守の若黨ども大に驚き馳集りて防がんとするを門徒の僧俗大勢取籠め棒  
 を揃へて太刀も刃も打落し半死半生に打擲す其間に土民ども雜具米粟奪ひ取上宮寺へ



運びたり菅沼の岡崎に有て是を聞て大に怒り酒井雅樂助正親に是を訴ふ正親も又憤りて上宮寺へ手簡を遣ひし其罪を責たり其詞にいふ

一 凡僧徒の柔和忍辱を以て跡とし慈悲を以て心とし衆生を利益すること出家の所爲なるに上宮寺の僧徒は我慢の旗幟差上て邪見の策を提て無罪の女童部を打擲す是僧徒の法なるや否

一 報警と稱し男女兒童を打擲するの偏に波羅門の悪行にひゞこきや

一 家内へ亂入し財寶を奪取の盜賊の類たるべし所存わらば讒て言上し裁許なくば

其時のは非なく剛毅の沙汰にも及べきか是すら僧徒の行跡に有べからず能々其心に相尋へき今按るに一向宗の戒律を受持せずして女犯をゆるし齋食を行はずして

肉味を喰ひ佛尊を汚し又神明を穢したり佛法僧の儀式に背て王公宿將の法度守らず是兵亂の因縁亡國の基禁じても猶禁ずべきの此宗門あるべきか

一 上宮寺の上宮太子の名を借て寺號とす此故に上宮寺を尊ぶ事諸宗に過たり然るに太子の賢言を守らず放逸を働く國賊の徒とすべきものか

一 頭を丸め法衣を着し其形の僧に似て其志の僧にわらず偏に蝙蝠の鳥に似て鳥にあらざるが如きが邪見放逸を心とし貪慾愚痴の跡たるは大魔王の所行とすべきか

永祿六年 九月二十九日

上宮寺 御同宿

酒井雅樂助 正親

其上にも使者の口演せし菅沼が守護不入の地とも知らず米を借用せし其無禮の罪ありとせず然れども僧徒の万事忍辱を所行とすれば岡崎へ訴へ出て公裁を仰べき所理不盡に多勢を催し菅沼が屋舖へ押入家宅を打破り男女小兒までも打擲し財寶を奪ひ寺へ持歸る事其罪尤大なり陳謝せんの詞わらば速に返答すべし返答次第是非の沙汰に及ぶべしとす送る上宮寺の住持信祐弟子性祐家司三浦四郎右衛門をはじめ三ヶ寺其外門徒の僧俗皆く其書狀を一覽し其口上を聞よりも益怒り返答にも及ばず其使者を追かへす神君もかくと聞召正親に命せられ嚴重に糾明あるべしと聞へければ三ヶ寺をはじめ一宗の門徒僧俗今の宗門破滅の時至れり此方より一揆をもちて佛敵を退治せんべあるべからずと檀越を催す



當國元來此宗繁昌なれば士民のさら近郷の諸浪人集りて忽に多勢となりけり

御家人與力一揆の事

抑一向専念の教意の手の舞足の踏事も皆是報佛應化の妙用にして自力にあらざらむる所の不可思議光如來の御はからひなりとて父母死ても墳墓を築に及ばず其寺を廟堂として雜行雜修の心を抱ず一心一向に身を阿彌陀佛に歸依する本意あれば三ヶ寺のいふに及ばず末寺々々の檀家迄も佛祖如來へ恩徳報謝の爲と招かざるに來り集りければ上宮寺本誓寺勝鬘寺善秀寺等元來大寺志かも福地故武具兵糧玉藥まで十分に貯へ其上今川氏眞方へ内志を通る酒井將監東條荒川等をかたらしむとより宗門歸依の御家人等へもよく報恩のため荷擔すべしとカタラひける一向門徒の御家人等元より君臣は現世ばかりの契みて佛祖如來の未來永劫を頼む所と聞覺次第に落失て四ヶ寺中へ馳入輩少からず神君もかくて國中の騒動に及ぶべしと御心を惱まし給ひ酒井正親をして重て上宮寺へ遣はされ其旨趣を尋ね給ひ又岡崎の専福寺祐歡渡村の善秀といふ兩僧に命ぜられ和順の事を扱ひせられしが門徒の僧俗更に開入す此兩僧が首切て血祭にせんとひしめけり兩僧大に恐れ

此各四十七人  
有り大剛の勇  
士四十八人  
あり原書名一  
名落たるか

名四十二人

遊跡るかくての彌彼門徒どもを誅滅せらるべしと聞て普第奮功の勇士等も專修の教化に歸依の輩夜半迄も勤仕せしが忽君臣の大倫を忘れ今度の針崎土呂佐崎野寺思ひく立退き一揆よ力を合せける是不學無術の致す所といへども尤愚なる舉動といふべし先峰屋半之丞久世平四郎浪切孫七郎寛助太夫近藤新次郎黒柳孫左衛門同金七郎同金十郎淺井善三郎同小吉同五郎作渡邊玄蕃允同八右衛門同八郎三郎同半十郎同八郎五郎同源藏同半藏同墨右衛門同平三郎同源五右衛門同半三郎同太郎右衛門同平六淺岡新十郎同新八本多喜藏安藤治右衛門加藤善藏同次郎右衛門同源次郎同傳十郎同源藏同又三郎同源七佐野小太夫成瀬新兵衛大塚七藏坂部又六同庄之助囚獄之助同相之助同造酒助同又右衛門平岩善十郎土屋長吉川澄文助等を始としてすべて大剛の武士四拾八人其外八十四人針崎の勝鬘寺に馳加はるまいた土呂善秀寺へ楯籠る御家人の大橋傳十郎同左馬助石川半三郎同源右衛門同善五右衛門同新九郎同右衛門八同十郎左衛門同太郎八佐橋甚兵衛同甚五郎同齒之助大見藤六同辰之助江原孫三郎同又助本多甚七同三九郎同甚四郎同九郎三郎佐野與八郎内藤彌十郎山本才藏同小三郎同四平松平半助小野彌平次村井源四郎治平左五助黒柳三郎兵衛同彦助成瀬新藏岩城半



七三浦平三郎淺見主水助同金七郎加藤五郎右衛門平井甚五郎松井源四郎日爪佐五郎野澤四郎五郎吉田太右衛門はじめとして四十五人其外武士七十餘人佐崎上宮寺へは馬場小平太石川七郎倉地平左衛門太田善太夫小谷甚右衛門太田彌太夫同彦六郎安藤金助鳥居又右衛門山田八藏安藤太郎左衛門同次郎右衛門加藤太郎右衛門同幸之助同孫之進同勝之助矢田作十郎戸田三郎右衛門野寺の本證寺へ籠りしハ大津宇右衛門大塚甚左衛門同八郎兵衛同善五郎五味三左衛門中川太郎左衛門大塚又内牧吉藏其外石川黨加藤黨本多黨中嶋安閑寺等百餘人其中に兼々御家の老臣等に怨みをふくみ浪人せし類宗門の徒あらすとも馳加ふる諸方の逆徒二万餘騎とぞ聞へける僧徒大に悦び一揆等の心を堅固專一にせよとものく札に要文を書て兜の眞甲に建させける其文にいふ

進足者 往生極樂世界 退足者 墮落無間地獄

いとくさへ無智愚昧の徒 武士も土民も宗門の外又大事なしと思ひ堅まる事あれば面々此札を授けいかへ身命をおしみ地獄に落べけん只討死して極樂の往生を遂べとと六字の名號を唱へつゝ岡崎勢の寄するを廻しと待居たり

吉良荒川櫻井等叛逆 付 戸田回忠の事

吉良左兵衛督義昭の先に東條の城を攻落され降人となりて岡崎に盤居せしが哀れ世の變もあれかし時に乘じ家の再興をもなさばやと内々思慮をめぐらす所一向専修の徒がめたらひを天のわたふる幸なりと東條の岡山に城を取立て楯籠る荒川甲斐守頼持ハ先に吉良の一族をはかれ一番に降参し八面の城を手引し西尾の城を乗取し忠勤を賞せられ御妹嫁になされとさら御懇遇有しに是も一揆に與し御敵の色を顯へす櫻井の松平監物家次上野の酒井將監忠尚佐崎の松平三藏信次(三左衛門忠倫柳兵衛重弘弟)大草の松平七郎昌久(昌安入道の子成績親光に作る)等の専修の門徒にもわらずたい私慾貪邪のために大倫をわすれ天命を顧みず一揆のすゝめに荷擔せり又上村の安達左馬助同彌市郎鳥居四郎左衛門高木九助荒山兵衛本多孫八郎柳原七郎右衛門大原左近右衛門近藤傳次郎酒井作左衛門鳥居金五郎夏目次郎左衛門石川修理等の酒井將監が進めによりて皆一揆方へ組しけるこそうたてけれかゝる時節に忠勤を盡し無三の御味方たるハ長澤に松平上野介康忠御油に松平彌九郎景忠竹谷に松平玄蕃頭清善形原に松平紀伊守家忠深溝に松平主殿助伊忠ハ各其城を守り本多豊後守



廣孝は土井の城に有て對崎東條の敵と戦ひ酒井雅樂助正親の西尾の城に有て野寺の一揆荒川の兵と戦ひ藤井の松平勘四郎信一福釜の松平右京亮康親（成績福釜系圖によりて康親の父左馬助親俊に作る）其城は有て野寺の一揆櫻井の兵と戦ひ日夜合戦止む時さらになし土呂針崎の岡崎の南にあたりて僅に一里餘野寺佐藤櫻井の岡崎より西南にて是もわづかに一里ばかり酒井將監が上野城の其西北に有て岡崎を去る事半里斗之此頃戸田三郎左衛門忠次の上宮寺より野寺の木證寺に來りけるが元來一向の門徒にもあらず當時浪人してありといへども苗主の御恩を忘れかね回忠し野寺を焼て岡崎の御勢を寺中へ引入へしと酒井雅樂助へ訴ければ雅樂助大に悦び其由を言上しに酒井左衛門尉を大將とし戸田三郎左衛門を案内者とせられ木證寺を攻られんとす野寺の一揆ははや此事を聞出し城門を別所に改め散り法により夜中戸田道に迷ひ城に入る事成がたしされども兎角して裏門より入て第一柵の敗りしかども一揆等戸田が聲を聞知り鉄砲をはみちけるに戸田が兜にあたり倒れければ漸々死をまぬがれて歸りたり酒井も同じく引返す神君戸田が志を褒給ひ國光御脇差を賜われり此頃岡崎より御領東の長澤の方へ三里餘夫より東の駿河の今川に屬して敵地之然るに長澤

の上野介康忠も老年にしてまかも小勢なり此騒動の虚に乗じ今川方など襲來らば容易からざる事ありと神君御思慮を廻らされ東三河へ御使者を遣ひされ今川押の事を頼み遣ひされしかば東三河の諸將兼て神君英武行末頼母しく思ひ奉れば速に御請し伊奈の本多助太夫忠俊小坂井精塚に誓を構へ人質を籠て吉田城を押し山家三方築手の奥平菅沼西郷設樂等皆々岡崎へ人質を進らせ其身の居城に有て駿河を押へ嚴重に川意せり

岡崎忠義勇士付野羽落城の事

かゝる騒動の中にも忠義無二に志を變ぜず日夜粉骨碎心して君を守護する烈士に酒井左衛門尉忠次同雅樂助正親石川伯耆守敷正同日向守家成本多平八郎忠勝同肥後守忠貞同豊後守廣孝植村山羽守家政同莊右衛門同十内鶴殿十郎三郎長祐松平彌右衛門同孫九郎同二郎右衛門同金助粟津助七鳥居又五郎同伊賀守加藤九郎二郎同源四郎米津藤藏同小太夫小栗大六同仁右衛門上野三郎四郎安生長藏中根喜藏同九藏同源六成瀬藤藏正次柳原振津守同隼之助同小兵衛山口清太夫伊藤市左衛門香村半七松井左近忠次中根源太同甚七同新左衛門同彌次郎同喜三郎天野三郎左衛門同三郎兵衛同甚四郎同助兵衛同清兵衛同傳左衛門同又次郎山田



本十郎同柴田七九郎源美太郎兵衛加藤播磨守平岩七之助親吉青山喜太夫同午之助同善四郎  
 同虎之助永見新左衛門近藤馬右衛門久米新四郎八國彌九郎酒井下總守大竹源太郎小栗助兵  
 衛同彌右衛門安藤九助池野波之助同水之助吉原助兵衛遠山平太夫鳥居鶴之助同才一笛吹與  
 右衛門寬圖書之助同牛之助土屋勘助同甚七林藤五郎内藤甚五左衛門松平山城守杉浦藤次郎  
 山田彦八加藤矢之助栗生長藏祖父江右衛門尉深津九八郎今村彦兵衛勝長細川善三郎布施孫  
 左衛門内藤四郎左衛門石川又四郎重康根來十内宇津宗三郎杉浦久藏大野孫七市川新兵衛同  
 彦二郎此外にも猶多し又先に記せし長澤御油竹谷形原土井西尾藤井福釜の外にも酒井左  
 衛門尉の別に新若を築て上野の將監忠尙が往來を塞ぎ能見に松平圖書助親友大給には松  
 平源次郎親乘瀧沼には松平山雲守乘高三木には松平與十郎忠清弟九郎右衛門忠利岩津には  
 松平五左衛門近正此等の無二の忠節を盡し各居城に有て敵地をさへ又の居宅を皆にか  
 まへ一揆と戦ふ設樂郡上和田の大久保常源が子五郎右衛門忠勝住所ありしを築に取立て忠  
 勝并一門には平右衛門忠貞其子七郎右衛門忠世三男治右衛門忠佐四男新藏忠寄五男勘七郎  
 忠核六男權右衛門忠爲七男甚右衛門忠長忠勝が子は新八郎康忠彌三郎忠政其外彌一喜六與

一忠益與次郎九八郎筒井甚六郎杉浦大八郎五郎吉貞同八郎五郎勝吉同彌十郎親貞同久三久  
 勝杉山久内同市助市川理兵衛田井廣次郎等すべて三十六人の大久保黨立籠りて土呂針崎の  
 一揆と合戦す小栗大六も一族筒井の樂を守り賊徒と戦ふ土呂針崎の岡崎に近し上和田其間  
 に有故一揆岡崎に近寄る事を得ず一揆上和田へ押寄る時の忠勝嚙貝を吹立れば神君忽に御  
 出馬有故一揆ども恐れ退散すこゝに額田郡矢作川の東六栗郷野羽の古城の常時夏目次郎右  
 衛門吉信宅地あるを皆に取立たり野寺に籠たる浪人大津半右衛門乙部八兵衛等爰に來り一  
 揆を呼入て近郷を侵掠す依て松平主殿助伊忠深溝より打て山野羽の古城に押寄攻ける門徒  
 の僧俗十餘人大津乙部が下知をうけて鉄砲を飛し嚴しく防戦す要害堅固之急に攻むすべく  
 見へざりし所乙部俄に心かりりし矢文を以て内通し明夜寄手を引入べしと告て其時刻に  
 及へば相圖の提燈をさし上げ人質に其子太郎を出す主殿助方の待設たる事あれば乙部が手  
 引にて四十餘人の勢の密に樂中へ忍び入らせ其後寄手閤を作り二手に成りて攻立るに大津  
 半左衛門の防戦の術盡て針崎さして逃行たり夏目は逃る暇なく土藏の中へ身を隠す深溝勢  
 土藏を打破り夏目を生捕既に首を刎んとせし時乙部の我回忠せされ迎も此古壘久しく守り



て落べからざるを知て夏目が命を助ん事を思へば之曲て許し給はるべしと歎くゆへ主殿助  
私にはからひがたく子細を岡崎へや上裁を伺ふに神君寛仁の御沙汰を以て夏目乙部が事  
免許ありて主殿助に給りしぞありがたき元龜三年味方が原にて夏目吉信が忠死のこの大恩  
を報ひ奉る所ぞぞ聞へける

厚木坂(原書厚木に作るの誤之御年譜三河物語に小豆坂とす厚木と小豆同所あり)  
作岡大平合戦付馬場討死の事

十一月廿五日厚木坂(家忠記厚木に作る成績に厚木小豆同訓にして實一といふ)一戦と  
聞へし針崎勝鬘寺の賊徒上和田に押寄せんと聞へければ大久保黨此方より半途迄出張  
して一戦せんと將卒百七十餘人計りにて厚木阪へ陣を取る針崎の賊等の大久保黨小勢にて  
打山たるこそ幸ひなれ一騎も残さず討取れど一文字に打てかゝる大久保黨かねて期した  
る事なればわざと開計り作て兵を進めず一揆どもは上和田勢小勢にて進み得ずと思ひ押寄  
て討取れど阪下まで押来る所を大久保黨のあくまで敵を引よせて下り拳に射立ければ一揆  
ども射立られ一揆死人忽に三十餘人に及びけり大久保黨の一揆等色めく所を見て時こそ

よければ一同に阪を下り散々に切てまはる上和田にての相圖の具を吹立つるにより神君も岡  
崎城より御出馬あり一揆の方に渡邊半藏同源藏峰屋半之丞先登して奮戦す源藏岡崎方の  
先手に進みし黒田半平を突倒す岡崎勢是を見て大に怒り一同に打てかゝれ源藏も敵しが  
たく鎗を提て細細手を引退く阿部四郎兵衛忠政の頼に敵を射る渡邊半藏も射られしが鎗よ  
ければ裏かゝず其外藤藏甚五郎川田彦十郎喜藤八太夫坂部又六等皆忠政に射倒さる一揆方  
渡邊源次郎ねらひ寄て忠政を射る忠政弓手の肘にあたるといへども御手なり此間に半藏の  
身に立つ矢を折掛て鎗をふるへて大久保與一郎を突與一郎の深手負て引退く植村新六郎家  
政(成績による原書莊左衛門)峰屋半之允と鎗を合す一揆の峰屋を討せしと大勢救來れり岡  
崎方の植村を助け來り合戦す岡崎方追々大勢になれば半藏も半之允も引追んとす爰に水野  
藤十郎忠重の兄下野守信元と不快により鷲塚に閑居せしが此度の騒亂を聞て水野太郎作村  
越又四郎と共に岡崎に來り忠勤をばけむ藤十郎今日も御供にありしが峰屋が逃るを見て逃  
さじと追かけ渡り合ふ其時半之允取て返上脛の白き武者振にて我と鎗を組んとす笑止なり  
とつちやききながら突伏んとすれば神君御馬を馳鎗を揮てむかひ給へば峰屋鎗をふせて逃去



る松平金助是を見てきたか返し返せと大音揚て呼ばれば蜂屋願て主君のわたらせ給ふ故逃る予其方のために逃る事あらんやとて取て返し忽に金助を突殺し首をとらんとする所へ神君馬を馳寄給ひ憎き奴原と宣へハ蜂屋の主君を見て大に恐れ逃去ぬ一揆方寛助太夫の平岩七之助親吉を射る親吉耳を射られしが湖所ゆへ立あがらんとする所へ神君鎗を取て馬かけよせ助太夫にむかひせ給へば助太夫も大に恐れ逃去るかて一揆方皆逃去れハ神君岡崎へ御馬を入れ給ふ同月廿七日にハ大久保黨かさねて井田郷に出張し針崎勝鬘寺の一揆共と合戦す一揆方本多三彌正重ハ大久保七郎右衛門忠世を鉄砲にて打殺さんとぬらひける忠世も馬より下り三彌をぬらひ雙方鉄砲を放しけるに三彌が玉のあたらず忠世が放ちし鉄砲よ三彌が股をかすられ倒れしかど淺手ゆへ引退く一揆かぬて謀をめぐらし勢を二手にわけて一手ハ大久保黨をわしらひ一手ハ妙國寺邊の畔へ乗出し大久保黨が蹄路を遮り大久保黨引取前後より挟んで急に攻討て大久保が二門の徒悉く土井の水田泥濘に追はめて皆殺にせんと軍議一決して既に打立んとす峰屋半之允もとより大久保忠俊入道常源が録なれば流石に大久保一門悉く泥田へ陥らん事を歎くといへども内通すべき術あければ妙國寺邊の高

原に一騎にて乗出し乗廻して見せたり大久保黨是を見て半之允が舉動いかさま次第ありけり定て一揆ども妙國寺前を取切味方の蹄路を遮る計畧有と覺へたり古橋にも上兵の謀を撃といへりいざ引取んと早々人数を上和田へ引取たり一揆の是を見て急ぎ人数二手に分て押出したれども上和田勢はや引取し跡なれば手を空しくしたりとぞ又同月の末に上宮寺より馬場小平太石川新七郎矢田作十郎を大將とし一揆原作岡大平に出張したれば岡崎勢押寄て合戦し天野三郎兵衛康景一揆方隨一と頼切たる馬場小平太を討取ければ一揆原勝を消し魂を失て敗走せり壬十一月ハ本多豊後守康孝并松井左近忠次等此程東條の吉良を責討てまばら功あるを褒せられ各所領を加恩せらる(成績基業一揆宗胤記)

上郷城責付鶴殿兄弟討死の事

其頃今川氏真ハかさねて三州上郷の城を取立鶴殿長助長持が子藤太郎長照其弟藤明長忠に守らせけるよ此兄弟今度専修の門徒等一揆騒擾ハ時を得て近郷を侵掠し一揆どもと牒し合せして岡崎を襲はんとするよし聞ゆ爰に竹谷の松平立善頭清善ハ藤太郎との異父同母の兄弟清善が母の始に藤太郎が父長持が妻にて藤太郎を散けて後離別し清善が父備後守親善



に嫁して此清善を設けしなり然るに藤太郎兄弟の先に西郡の落城の時生捕せ成りしが駿府  
 まましくたる若君と人質替と成り駿府に歸されしに此後小原肥前守が吉田城に預たる岡  
 崎方の人質を悉く殺害せしに清善が女子も同じく串刺にまけるを清善怒憤りいかにも  
 して今川が持の城を攻取て此怨を報はんと思へばやがて上郷に押寄て力をさはめて攻たり  
 然れども流石に鶴殿の兄弟も烈しく防戦すれバ寄手散々に打ちらされ手負討死數知らず寄  
 手既に敗走するよし聞へければ岡崎より神君早御出馬あり御勢を名取山に屯し及び甲賀  
 の者共を遣はし指揮して責立給へば鶴殿兄弟も今の防戦の術盡果て藤太郎藤助始め一族七  
 八軍士七十餘人討死し城の忽落ければ神君の御勢を召具せられ岡崎へ歸らせ給へば清善  
 も竹谷へ歸陣せり(基業修譜竹谷松平譜)

大善坂軍付上和田合戦の事

かゝる騒亂の中に永祿六年も空しく暮て七年甲子にうつりぬいつしか四方の野山も霞渡り  
 て世の花鳥の色音のどかになりぬれど野寺佐崎土呂針崎の一揆原けふの攻寄る明日の攻よ  
 せられ合戦矢叫問の聲さらしに止む問のあかりけり正月始より神君の佐崎を攻られんとて急

に砦を築き給ふ一揆原是を妨んとて作岡大平の民屋を放火す是の正月三日之折節水野下  
 野守信元の年始の祝に岡崎へ参られ御對面ある最中に此放火の烟見へければ神君の事の様  
 を信元に仰謝せられ直に佐崎をさして御出馬あり信元もついで渡阿地まで出馬せらる神  
 君の大久保黨に針崎の賊を押へさせ大久保彌三郎一人を案内者になされ盗木を真直に過て  
 小豆坂へ押登り給ふ所へ作岡大平を焼し一揆原跡り來りはしあく行逢ひ奉り一揆ども大  
 に仰天して逃走る其中に石川新七郎近藤新一郎大見藤六佐橋甚五郎浪切孫七郎等の踏留り  
 岡崎勢と奮戦して互に矢砲を飛せしが近藤新一郎が射たる矢神君の手綱にあたりけれど御  
 身への恙なし神君大に怒らせ給ひ御馬を馳て賊軍に突てかゝり給へば賊軍こらへかねて八  
 方へ敗走す時石川新七郎朱具足に金の團扇の指物ししたる雪踏の馬に萌黄の小總鞍に  
 貝鞍置て殿と大見藤六の黒糸威の鎧に大袖付三總角結んで懸褱白の馬に黒鞍置て乘たり佐  
 橋甚五郎の白糸を黄に返したる鎧に紅の大總角つけ月留の馬に乗り浪切孫七郎の棧繩目  
 の鎧着て鶴殿の馬にまたがる此等は御家人の中にも常々其名知られたる者どもゆへ主君御  
 覽を恥かつの朋輩の見て笑はん所や思ひけん逃行賊軍の中に四人は馬足をも亂さず閑々と



引取さま神君遙に御覽じて只今本道を静かに引取賊共の差物を見るに石川大見佐橋浪切等  
 と見ゆるぞ彼等の一揆原の中にも隨一の者共一人も残さず討取れと御下知われ御旗本  
 より血氣の勇士我おどらじと追かくる其中にも水野藤十郎忠重の一番に乗付て金の團扇の  
 指物の石川新七郎と見るひか目が穢なくも押付を見する物かなくいふ水野右衛門太  
 夫忠政が十男藤十郎忠重なるぞ引返し勝負せよと詞をかけしかば石川高らかに打笑ひとが  
 ましき藤十郎殿の詞かな脛の白き無者振にて我等と勝負の事覺束あし返すに何の難き事わ  
 らんやとて轡を引返し互に馬を馳合せ突戦せしがやがて水野一喝して石川を突落し其首取  
 て團扇の指物に添へ實檢し備へ御感にわづかる忠重が相諍水野太郎作清久も同じく進んで  
 戦ひしが大見藤六を討取たり佐橋甚五郎も大勢に取籠られて討取らる浪切孫七郎の其場を  
 逃のびて大善坂へ逃登る神君諸館を合せて追さまに二鎗まで突給へども少しく程や遠かり  
 けん湖手あれは捨鞭打て逃延たり後に一揆平均し御家人等御免を蒙り浪切も再度奉仕しけ  
 るに及び或時神君浪切を召て大善坂にて汝が逃る時我汝を二鎗迄突たりしが湖手なりやと  
 御尋有けるに孫七郎朋輩の聞所や恥たりけん某生涯後疵を蒙りたる覺なし大善坂にて

突給ふの余人にてや侍らんとす上る神君聞せたまひ凡武士の法の虚言を吐て偽飾らざる  
 を本意とす汝勇のわれども信あくての最要なく車に載なきが如し我突たる所の總角の環  
 より右方一二十程下を一所妻手の穴穴門の處を備に二鎗迄突たれども程遠くして死に至  
 らざるなり汝が跡に疵有べし我が鎗に其時血の付て有ければ裏かきたるに相違あし汝猶  
 も陳しあば只今衣類を脱て鎗疵の虚實を示すべしと仰ければ孫七郎大に赤面せしかどなを  
 も還辭をつくりいかにも某が跡に二ヶ所鎗疵いへども是れ余人の爲に手負ひ君の御鎗痕  
 よいひのずとす上る神君大に笑ひせ給ひ然らば汝何方の軍に逃れを蒙りけるぞ後疵に  
 有べからずとし逃尻の疵ならば我らが所爲なるぞと宣へば一座の輩も皆々大に笑ひしとこ  
 さる程に土呂針崎野寺の一揆ども會合し先日よりの戦に味方にて頼みに思ふ石川大見佐橋  
 等も討死すいつまでかくてあるべきにあらざり今度の三ヶ寺の一揆一同して大久保が土和田  
 の寨をせめぬき其勢に乗じ岡崎の城に攻寄べしと軍議一決して正月十一日大勢を以て上和  
 田に押寄木戸口迄すゝみより一時責に攻落さんと火水に成りて責立たり大久保一黨元來老  
 練の勇士どもあれは少しも屈せず士卒を勵し矢炮を飛せ石弩を發し賊徒大勢打殺し三十六



騎の大久保黨其外杉浦松山田中市川さといふ輩時分のよしと門を叩開き打て山敵中に馳入  
 て追立追拂ひ追つ返しつ爰を専途と奮戦す其時五郎右衛門忠勝の弓手の眼を射られしか其  
 矢かちぐり捨て當の敵を射返したり七郎右衛門忠世も手を負ふ賊軍多勢なれば討るれども  
 斬らるれどもかへり見ず荒手を入替く戦へば大久保黨大略手を負て味方色めき立て見へ  
 ける所上和田と岡崎との間六名村の方より土屋甚助忠成筒井甚六忠俊をはじめ十餘騎馳付  
 大音わげ只今岡崎勢數千騎よて後詰するぞ其先鋒たる我々が高名とるを上和田の人よく  
 見置後日の證人に立れよと呼はる賊軍の是を聞すはや岡崎より後詰の人數が来るぞよ前後  
 の敵に取籠られてい大事ぞと大々騒ぎ立たり岡崎にてい上和田の相圖の螺貝聞ゆるとひと  
 とく神君鎧取で召れながら御門前にて高紐しめ兜の緒を結び給ひ御馬も召れしが餘りに急  
 みじて御供も出合す宇津與五郎一人御馬の口を取付の戸田三郎右衛門ばかり御後に供奉し  
 ばや御馬を馳給ふ御跡より追うに篋圖書助重忠内藤三左衛門信成河野善九郎正勝植村新六  
 郎家政同莊右衛門正勝内藤四郎左衛門正成本多平八郎忠勝鳥居彦左衛門元忠鶴殿十郎三  
 郎長祐天野三郎兵衛康景同甚四郎同清兵衛平岩七之助親吉松平彌右衛門同彌九郎同次郎右

衛門米津藤藏小栗大六柳原隼之助伊奈市左衛門布施孫左衛門渥美太郎兵衛今村彦兵衛永見  
 新右衛門三十八人やうり馳付たり折節勝鬘寺よりも追う一揆馳加り矢炮を雨の如くに打  
 掛るといへども味方死傷をかへり見ず攻取ふ其時中根喜藏一帯に進んで渡邊半藏守綱と鎗を  
 合せ戦けるが後より鎗を捨て刀を以て戦ひしに雙方痛手負ふて互に左右へ引退く時又鵜殿  
 十郎三郎長祐追かけて半藏を突く半藏かさねて手負たるを見て父の源五左衛門高綱救ひ來  
 り終に十郎三郎を突伏源五左衛門鎗を揮て神君にむかひんとす其時内藤四郎左衛門正成  
 源五左衛門を射倒せば半藏我が身數ヶ所の手疵負ながら父を敵に討せしと父を肩にかけ退  
 く爰に幡豆郡淺井の住人石川十郎左衛門の四郎左衛門が母方の叔父へ一説渡邊源五左衛  
 門を正成の舅といへり是も一揆方にて勝鬘寺に籠りける渡邊と同じく出むが此時大勢の  
 眞先かけて神君は近寄るを見て正成今日の事私の親族を顧る所にあらず大義に親を滅  
 すといひながら是を射る石川兩股を射ぬかれ倒れは是をも半藏救助けて引取り宇津與五  
 郎の峰屋半之允と組て峰屋がために討れたり土屋長吉重治の元來門徒たる故勝鬘寺に籠り  
 しが主君の御味方小勢にて危しと見ければたとひ此身の無間地獄に落るとも君の危難を救



へずして有べきかど一揆の賊徒に喉を刺し鋒を倒にして賊徒と合戦し深手負既に死せんと  
 す神君其志を憐みせ給ひ板にかきのせ上和田の砦に引入させ給ふかくて神君の御自身長  
 刀を打ふりく敵中を縦横に驅立給へ御旗本の輩も誰か少しも猶豫すべき一人當千の  
 勇を振て駈まれば賊軍終にこらへかね土呂針崎をさして逃はしる日既に暮ければ神君も  
 上和田の砦に御馬を入れ土屋長吉が痛手をあわれみ給ひ御みづから御看病遊されしが  
 深手なれば終に死す時又廿四歳石川家成に命ぜられ其屍をわつく葬らせ給ふ賊軍久世平  
 四郎渡邊源五左衛門石川十郎左衛門をはじめ數十人討れしが御味方も鶺鴒殿十郎三郎宇津與  
 五郎始め討死五人に及びり雑兵の猶少からず神君忠死の輩を深く歎き給ひ上和田より岡崎  
 へ歸らせ給ひ御甲冑を脱がせ給へ御鎗に鉄砲の玉二留りありけるを見て人を其御運目出  
 度御身恙なきを悦びけり(基業宗亂記)同月廿五日深津九八郎青山虎之助二人一揆にまされ  
 佐崎上宮寺へ忍び入て賊寨に火を放つべし其煙を相圖に御出軍ありて上宮寺を攻破り給へ  
 と謀を献じ城を出て上宮寺の賊寨へ忍び入時刻をはかり火を放たんとす神君も夜中佐崎  
 邊まで御出馬ありて相圖あそしと待せ給ひけるに深津青山の寺中の夜廻りの太田黨に見咎

られ賊等兩人が首を斬て寺の外に首を投出しければ此相圖相違してむさしく岡崎へ引取給  
 ふ

正校 三河後風土記卷第八終



校正 三河後風土記卷第九

三州八面合戦の事

永祿七年甲子二月八日酒井雅樂助正親が籠たる三州西尾の城兵糧乏き由岡崎へ注進したり  
 神君刈屋の水野下野守信元に援兵を請せ給へば信元三千餘人を引具じ加勢せらる神君此勢  
 を以て兵糧を守護せしめ矢作の方へ出て西野へ廻り六里程を経て難なく西尾城へ兵糧を納  
 め給ひ其御歸路に八面の城に攻寄給ふ(八面は元來より荒川が居城之)雅樂助正親も西尾  
 より人数を發し櫻井小川野寺八面の邊を放火す八面の城兵圍の聲を聞て打て出る寄手い  
 ると弱くと會釋して四五丁ばかり引退け城兵勝に乗じて追來るを思ふ圖に引よせ岡崎勢  
 と刈屋勢左右に別れ短兵急に取ひしく始め逃退し先手も大返しに返して攻立れば城兵た  
 りかねて皆城へ逃歸る其時一揆方頼み切たる馬場平太夫を天野彌兵衛討取たり岡崎刈屋  
 の兩勢勝軍して小川の安政といふ所迄引取所に鵜塚野寺等の一揆共三百餘人を喰留  
 んど押出し前路を遮る其中にも野寺の本證寺の住持空智中島安樂寺櫻井の園光寺の三僧の  
 剛強絶倫にて此類稀なる者共之本證寺の鉄の棒安樂寺園光寺の檜木の八角の棒を振上げて夜



又天魔の荒たる如き勢にて御旗本に打てかゝる神君御覽じて彼等の音に聞へし大力量の悪僧共々味方打物取ての勝負の詮なし只取こめ打てとれと下知し給へば酒井雅樂助本多平八郎其外石川近藤今村安藤等何れも馬上達者の射手共馬馳寄ての勢かけ馳進へての追物射に射る其半ある所へ水野下野守手勢を引具し一揆共の真中へ横合より打てかゝれば岡崎勢も切先を揃て割て倒れている三僧をはじめ三百餘人の一揆共何かは以てたまるべき散々に打たされて取走するを追討して一揆共六十餘人が首を取る水野が家人上田半六の一揆の隊長鈴木彌兵衛を討取ぬ櫻井の園光寺の深手負ひとても助るまじと思ひ本寺たる本證寺を逃延させんと高峯の上に仁王立に立て本證寺の空糺穢土の縁既に盡て彌陀の淨土へ只今往生する有様を見よと大高聲に呼はり上帯押切り鎧を投捨腹一文字にかき切て南無阿彌陀佛と唱へつゝ刀の先を口にくはへ高峯の上より真逆に落貫かれて死せるは本寺へ對し忠節の最期けりげにこそ見へにけれ其ひまよ本證寺の残る一揆等もろともにはふく寺内へ逃入る日既に黄昏きりとして岡崎として御歸城之(此一段原書にはいふまでもなし成績大成記等の諸書みな疎漏之今の三州一揆宗亂記甚詳明之よりて宗亂記に寄る)

岡崎斥候敗走 矢田作十郎討死の事

二月十三日には岡崎より石川又四郎根來十内布施孫左衛門等廿五人針崎勝鬨寺の形勢斥候のため遣はさる所賊軍の方へ内通の者や有けん一揆共伏兵を設け置間近く引請て不意に起立もの三十六人中にも渡邊半藏同半六峰屋半之丞眞助太夫眞先に進んで打てかゝりければこなたも同じくわたり合ひ互に入亂て戦ひしが石川の深手負て引退く根來の渡邊半藏に突伏られ半六に首を得らる布施も眞助太夫と組んで討るれば味方散々になりて引退く(成績基業には根來の戦死し布施石川の手負て引退くといふ今家忠記にしたがふ)此月また佐崎上宮寺の一揆原三百餘人矢田作十郎を大將として岡崎へ押寄たり神君聞召矢田作十郎の尤も剛勇にして毎度味方をかけ腦す今日も定て眞先かけて奮戦すべし汝等自余の者には目なかけぞ作十郎を是非討取べしと御下知あれバ御家人何れも其旨畏て待かくる所へ作十郎例の如く眞先かけて進み来る所を味方一同雨霰のとく鉄炮を打出すわやまた作十郎を馬上より打落す其時御旗本一同切先を揃へて打てかゝれば三百餘の一騎共大に僻易して作十郎を抱きかゝへて上宮寺として逃歸る(原書馬場矢田が討死を永祿六年に係るの誤り之今



大成記に従ふ宗胤記には深津青山が上宮寺に忍び入て討れしを翌日其首を三度空に擧て一揆悪口せしを鳥居黨憤り佐々木村にて合戦し岡崎よりも御出馬ありしと記す然れば正月に係くべきに似たり

一揆等降参の事

土呂善秀寺に籠りたる一揆方吉田源太左衛門は元來一向門徒にもわらず本多彌八郎正信と知己の交厚かりし故進められて心ならず一揆方とありし也岡崎の御家人齋藤與五右衛門是も吉田と知音なれば内々吉田方へ書簡を送り今度の各重代の君恩を願はず不義の一揆に組し叛逆の名を残す事尤無智無道といふべし早く天命を思ひ君臣の道を守り降参すべき様謀を廻らし本多峰屋等をも諫て早く罪を謝せらるべきやと申送る吉田もどより先非を悔る折柄なれば早速に同意せり峰屋半之允の久保黨の近縁ある故五郎右衛門忠勝より進しかば峰屋の治右衛門忠佐にたよりて降参を願ける依て忠勝忠佐の岡崎へ参り當時海内大は亂れて天下の豪傑所々に割據し各地國を切取て自國を強く富し終に旗を中國に揚んとす然るに譜代重恩の御家人宗門に迷ひ過半は怨敵と成る此處を窺ひ近隣の敵國押寄御

領を侵掠せしめし御大事成るべし早く一揆の徒が罪科をゆるされ速に歸順せしめ給ふべきにやと諫奉る神君もどより寛仁の御事故忽に其諫を採用し給ふ依て忠勝忠佐等の峰屋半之允石川善左衛門同半三郎本多甚四郎等を同道し今度大罪御免を謝して拜謁をせしむ此等歸路に唐津の浄土宗光西寺へ會集しかく恩免を蒙るうへ早く御先手に進み一揆の寺に踏潰すいと安しと申すも國中靜謐の功を速にせんとならば

- 一此度一揆に組せし諸士本領安堵の事
- 一道場僧俗共に元の如く立置べき事
- 一揆の張本人一命を助けらるべき事

右の三ヶ條御免あるから向後忠節を盡し東條并上野八面の城を攻陥し其外殘黨悉く退治仕るべしと申すにより忠勝忠佐又岡崎へ其由申上げるに神君聞召其二ヶ條の如く仰付らるべし但し一揆張本人を助命の願ひ叶ふべからずと仰けるに忠勝が父忠俊入道常源参り老臣が子孫一族去年以來日夜の苦戦或は毀傷し或は戦死す此忠節を哀と思召に於て今度忠勝忠佐が諫めの如く一揆共残らず助命の御ゆるし有て彼等を先手とし東條上野八



面の城を賣落し西三河を略定し其業を堅くし給ふべし是老臣が老後の願と諫めける  
 是より先織田信長も瀧川左近將監を使者として早く一揆等が罪を免じ遠州へ御手を出し給  
 へど諫められ水野下野守も度々此事を諫らるゝにより神君も其諫に従ひ給ひ賊軍一統に御  
 赦免の事仰出され二月廿八日上和田村浄土宗浄聚院（一本浄林院又成就とも有）にわたら  
 せ給ひ賊徒等願の通御印書をあし下されしかば一揆僧俗悦ぶ事限りあしかくして石川日向守  
 家成仰を蒙り降参の峰屋等を案内として土呂の善秀寺に向ひければ寺内一揆等攻らるゝと  
 心得大に騒動する所を日向守大音あげて賊等一同に御赦免あるぞと呼られ一揆等干戈を  
 捨て降参するも有り針崎の方へ逃行もあり寺内忽に静謐すれば日向守の其まゝ針崎に向  
 ひ高須口より勝鬘寺におしよせ寺内に火を放つ此烟にむせび一揆等大に狼狽する時日向守  
 一揆ども悉く助命あるぞと呼りけり馳めぐれば一揆等蘇生せし心地も歡聲天地を響か  
 して降参す佐崎上宮寺野寺本證寺に籠りし一揆ども思ひくは退散す其の中には降参じ  
 てふたゝび御家人と成りしも有り歸参の御家人等の先非を悔此後三心なく忠勤すべきよし  
 唐津覺西寺に於て神文の誓詞を献じたり櫻井の松平内膳正信定が孫監物家次ハ既に誅せ

らるべきに定まりしが大久保酒井等種々と諫め奉り忽に御免許あるのみならず本領迄  
 安堵せられしかば落涙して蘇生の恩を感じける

按るに三州岩津村中村某が家に傳へし三州一向宗一揆宗亂記といへる書文詞古拙なり  
 といへども此一亂の始末頗る審なるに似たり依て此一亂の事實ハ大成記基業成績を  
 以て原書を刪定し彼宗亂記をも採用して其疏漏を補ふもの少なからず其中ハ佐崎の賊  
 と合戦の時御味方散々に敗走せしかば只御一騎にて桑子の妙源寺へ入らせ給ふ其間に  
 御供大勢馳集り暮ひ來る味方を捕へて敵を追拂ひ堅固に守護して御歸城あり此間神君  
 に内陣にわたらせ給ひ恵心僧都彫刻したる佛前にて一揆退散國家安全の御祈念まじ  
 りけるが三月廿五日妙源寺へ御書下され此本尊を岡崎へ御請招有御持佛堂へ安置な  
 し給ひける今江戸増上寺に安置する本尊阿彌陀佛世に黒本尊と唱ふるものは是之其御書  
 并其代りも賜りたる佛像今も妙源寺に傳ふとあり

三州平均 厭離欣求御旗の事

櫻井の松平監物家次ハ既に降参し佐崎の松平三藏信次（直勝又ハ親光）先にも野心の聞へ